垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

垂水カントリークラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横道遺跡

1997年3月

鹿児島県垂水市教育委員会

垂水市立図書館
11041362

横道遺跡第2地点，第3地点遠景

D－8区西側土層堆積状況（第3地点）

3号土坑（第3地点）

溝状遺構（第3地点）

遺物の出土状況（第4地点）

鉄鏃出土状況（第4地点）

作業風景

序　　文

大隅半島の北西部に位置する垂水市は，眼前に鹿児島湾の美しい海岸線を望み，背後には手つかずの自然が残る高隈の山々が連なっています。このように美しい自然に育まれた本市においては，昔から多くの人々が生活を営み，文化を育んでおり，多くの有形・無形の文化財が残されています。

この報告書は，「横道遺跡」において，㈱錦江が行った垂水カントリークラブのゴルフ場造成工事に伴って実施された，埋蔵文化財発掘調査の記録をまとめたものです。横道遺跡からは，縄文時代晩期から古墳時代にかけての様々な遺構や遺物が出土しました。

今回の確認調査・全面調査及び報告書の作成にあたりましては，鹿児島県教育庁文化財課のご指導，並びに鹿児島県立埋蔵文化財センターからの調査員の派遣とご尽力をいただき，また，平成 7 年度調査につきましては日本考古学会会員瀬戸口望氏の協力も得て，無事に事業を終えることができました。

また，㈱錦江には協議の結果，埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき，ゴルフ場内のもう一箇所の「丹過遺跡」については，現地保存が決定し，今回記録保存となった「横道遺跡」については，始終全面的多大なるご協力をいただきました。

発刊にあたり，横道遺跡発掘調査事業にご協力いただきました関係各位に敬意と感謝の意を表します。

終わりに，本報告書が今後の文化財保護・学術研究のために広く活用されますことを心から祈念致します。

平成 9 年 3 月

垂水市教育委員会

教育長　川井田　稔

報 告 書 抄 録

ふ り が な	よこみちいせき
書　　名	横道遺跡
副 書 名	垂水カントリークラブ建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	2
編 集 者 名	鵜飼一伸， 羽生文彦， 弥栄久志 ， 今村敏照
編 集 機 関	垂水市教育委員会
所　在　地	〒891-21 鹿児島県垂水市旭町61-2 TELL 0994-32-0224
発 行 年 月 日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
よこみちいせき 横道遺跡	かごしまけん 鹿児島県 たるみずし 垂水市	462144	11-96	31° 27′ 50″	130° 43′ 50″	19940411～ 19950613	7,600	ゴルフ場 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横道遺跡	包蔵地	縄文時代晩期 弥生時代 古墳時代 古代	土坑	縄文晩期土器 免田式土器 成川式土器・鉄鏃 土師器	

付図　横道遺跡の位置

例　　言

1　本報告書は，垂水市教育委員会が平成6年度と平成7年度の2ヵ年に渡って実施した，㈱錦江　垂水カントリークラブのゴルフ場造成工事に伴う横道遺跡の埋蔵文化財についての発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，㈱錦江の委託事業として，垂水市教育委員会が実施した。

3　平成6年度に実施した確認調査及び第1・第2・第3地点の全面発掘調査においては，鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事弥栄久志氏，同文化財主事児玉健一郎氏，同文化財研究員前迫亮一氏，同文化財研究員中原一成氏，同文化財研究員今村敏照氏に発掘調査の協力を頂いた他，鹿児島県教育庁文化課，鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた（役職名等は全て平成6年度当時のものである）。また，平成7年度に実施した第4地点の全面発掘調査及び第5地点の一部調査においては，日本考古学会会員瀬戸口望氏，鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財研究員今村敏照氏に発掘調査の協力を頂いた他，鹿児島県教育庁文化課，鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた（役職名等は全て平成7年度当時のものである）。また，平成8年度に実施した報告書作成事業においては，鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事弥栄久志氏，同文化財研究員今村敏照氏に協力を頂いた他，鹿児島県教育庁文化課，鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた。また，報告書用の写真撮影に関して鹿児島県立埋蔵文化財センターの文化財主事鶴田静彦氏の指導・協力を頂いた。（役職名等は全て平成8年度当時のものである）。

4　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高度である。

5　本書の遺物番号は通し番号を用い，図版中の番号も一致する。

6　出土遺構・遺物の測量・実測・製図・写真撮影等の分担は下記のとおりである。

　確認調査　鵜飼一伸，弥栄久志，児玉健一郎，前迫亮一

　全面調査　鵜飼一伸，弥栄久志，中原一成，今村敏照

　整理作業　鵜飼一伸，羽生文彦，弥栄久志，今村敏照

7　執筆分担は下記のとおりである。

　第Ⅰ章　弥栄久志

　第Ⅱ章，第Ⅲ章，第Ⅳ章，第Ⅴ章　鵜飼一伸，羽生文彦

　第Ⅵ章　今村敏照

8　本書の編集は鵜飼・羽生・弥栄・今村が行った。

9　本遺跡の出土遺物は垂水市教育委員会が保管・展示するものである。

本　文　目　次

序　文

例　言

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1

　第1節　調査に至るまでの経緯 …… 1

　第2節　確認調査と全面調査の協議 …… 1

　第3節　調査の組織 …… 1

　第4節　調査の経緯 …… 2

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 6

　第1節　地形概説 …… 6

　第2節　地質概説 …… 6

　第3節　歴史概説及び周辺の遺跡 …… 6

第Ⅲ章　層序 …… 10

第Ⅳ章　第3地点及び第2地点の発掘調査 …… 12

　第1節　発掘調査の概要 …… 12

　第2節　遺構 …… 12

　第3節　出土遺物 …… 16

第Ⅴ章　第4地点の発掘調査 …… 41

　第1節　発掘調査の概要 …… 41

　第2節　遺構 …… 41

　第3節　出土遺物 …… 41

第Ⅵ章　まとめ …… 61

あ　と　が　き

挿　図　目　次

付　図　横道遺跡の位置

第1図　周辺位置図 …… 5

第2図　垂水の地質概略 …… 7

第3図　周辺の遺跡 …… 8

第4図　土層堆積状況 …… 11

第5図　第3地点Ⅳ層上面の地形及び遺構配置図 …… 13

第6図　第3地点検出土坑 …… 14

第7図　第2地点Ⅳ層上面の地形 …… 15

第8図　第3地点遺物出土状況図 …… 17, 18

第9図　第2地点遺物出土状況図 …… 19

第10図　出土遺物実測図1（土器ⅢA類） …… 20

第11図　出土遺物実測図２（土器ⅢＢ－甕口－１ａ類～１ｃ類）…… 21
第12図　出土遺物実測図３（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類）…… 23
第13図　出土遺物実測図４（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類）…… 24
第14図　出土遺物実測図５（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類～２ｃ類）…… 26
第15図　出土遺物実測図６（土器ⅢＢ－甕口－２ｃ類～３ｃ類）…… 27
第16図　出土遺物実測図７（土器ⅢＢ－甕口－３ｃ類～甕胴－１ａ類）…… 28
第17図　出土遺物実測図８（土器ⅢＢ－甕胴１ａ類～３ａ類）…… 30
第18図　出土遺物実測図９（土器ⅢＢ－甕胴３ａ類～３ｂ類）…… 31
第19図　出土遺物実測図10（土器ⅢＢ－甕底類～壺類）…… 33
第20図　出土遺物実測図11（土器ⅢＢ－壺頸類～壺底類）…… 34
第21図　出土遺物実測図12（土器ⅢＢ－高杯類～Ⅳ類，土師器）…… 35
第22図　第４地点Ⅳ層上面の地形 …… 42
第23図　第４地点遺物出土状況図 …… 43
第24図　出土遺物実測図13（土器Ⅰ類）…… 44
第25図　出土遺物実測図14（土器Ⅰ，Ⅱ類）…… 45
第26図　出土遺物実測図15（土器ⅢＢ－甕口－１ａ～１ｃ類）…… 47
第27図　出土遺物実測図16（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類）…… 48
第28図　出土遺物実測図17（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類）…… 49
第29図　出土遺物実測図18（土器ⅢＢ－甕口－１ｃ～２ｃ類）…… 50
第30図　出土遺物実測図19（土器ⅢＢ－甕口－２ｃ～甕胴－２ａ類）…… 52
第31図　出土遺物実測図20（土器ⅢＢ－甕胴－２ａ～甕胴－３ｂ類）…… 53
第32図　出土遺物実測図21（土器ⅢＢ－甕胴－３ｂ～小壺口類）…… 55
第33図　出土遺物実測図22（土器ⅢＢ－小壺胴類～ミニチュア，鉄器）…… 56

表　目　次

付　表　報告書抄録
第１表　周辺遺跡地名表 …… 9
第２表　第３地点検出土坑一覧表 …… 12
第３表　横道遺跡出土遺物観察表１ …… 36
第４表　横道遺跡出土遺物観察表２ …… 37
第５表　横道遺跡出土遺物観察表３ …… 38
第６表　横道遺跡出土遺物観察表４ …… 39
第７表　横道遺跡出土遺物観察表５ …… 40
第８表　横道遺跡出土土師器観察表 …… 40
第９表　横道遺跡出土遺物観察表６ …… 57
第10表　横道遺跡出土遺物観察表７ …… 58
第11表　横道遺跡出土遺物観察表８ …… 59
第12表　横道遺跡出土遺物観察表９ …… 60
第13表　横道遺跡出土鉄器観察表 …… 60

図　版　目　次

巻頭図板１
図版１　縄文時代晩期の土器 …… 63
　　免田式土器 …… 63
図版２　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器）…… 64
図版３　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）…… 65
図版４　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）…… 66
図版５　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）…… 67
図版６　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片・胴部片）…… 68
図版７　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の胴部片）…… 69
図版８　弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器・鉢形土器・壺形土器の底部片）…… 70
図版９　弥生時代後期～古墳時代の土器（壺形土器）…… 71
図版10　弥生時代後期～古墳時代の土器（壺形土器の胴部片）…… 72
図版11　弥生時代後期～古墳時代の土器（壺形土器の頸部片）…… 73
　　弥生時代後期～古墳時代の土器（高杯片・坩土器片）…… 73
図版12　弥生時代後期～古墳時代の土器（ミニチュア土器）…… 74
　　鉄器（鉄剣・鉄鏃）…… 74

第Ⅰ章　調　査　の　経　緯

第１節　調査に至るまでの経過

垂水市教育委員会（以下，市教委）は，㈱錦江垂水カントリークラブのゴルフ場造成工事中に遺物が発見されたことを知り，分布調査を鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

これを受けて，文化財課は市教委に対し，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）へ分布調査を依頼するよう調整した。

そして，市教委は，埋文センターと共に平成６年３月22日に分布調査を実施し，約30，000㎡の範囲に遺物が散布していることが確認され横道遺跡とした。

次に，この分布調査結果にもとづき，平成６年４月５日に市教委と㈱錦江及び文化財課，埋文センターは再度協議を行い，遺跡の範囲確認のための調査を平成６年４月11日～平成６年４月15日まで実施することが確認された。

なお，市教委は平成２年６月15日付けで，文化財課にゴルフ場建設予定地内の分布調査を依頼し，丹過遺跡（約20，000㎡）を確認した。この遺跡は，㈱錦江との協議の結果，設計変更により将来的に調査可能な状態で現地保存となった。

第２節　確認調査と全面調査の協議

確認調査は，市教委が埋文センターへの調査員派遣依頼をして，平成６年４月11日～15日の間で実施した。

その結果，古墳時代の遺跡で５つの地点に分かれていることが確認された。（第１図参照）

確認調査結果

地　点	第１地点	第２地点	第３地点	第４地点	第５地点	合　計
面　積	８００㎡	８００㎡	３，２００㎡	１，８００㎡	１，０００㎡	７，６００㎡

次に，全面調査の協議は，３ケ年計画で，平成６年度に第１～３地点の実施，平成７年度に第４地点と第５地点の一部を実施，報告書は調査が終了した次年度に作成実施することが取り扱われた。

第３節　調査の組織

事業主体者　　株式会社　錦江
調査主体者　　垂水市教育委員会

平成６年度　（確認調査，第１・第２・第３地点の全面調査）
調査責任者　　垂水市教育委員会　　教育長　　塩釜　繁

調査企画	〃	社会教育課長	岩穴口　新
調査事務	〃	社会教育係長	森下利行
調査担当者	〃	社会教育係主査	北迫一信
	〃	社会教育係主事	鵜飼一伸
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財主事	弥栄久志
	〃	〃	児玉健一郎
	〃	文化財研究員	前迫亮一
	〃	〃	中原一成
	〃	〃	今村敏照

平成7年度　（第4地点全面調査・第5地点の一部の調査）

調査責任者	垂水市教育委員会	教育長	塩釜　繁
調査企画	〃	社会教育課長	岩穴口　新
調査事務	〃	社会教育係長	森下利行
調査担当者	〃	社会教育係主事	鵜飼一伸
	〃	嘱託	瀬戸口　望（日本考古学会会員）
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	文化財研究員	今村敏照

平成8年度　（報告書作成）

調査責任者	垂水市教育委員会	教育長	塩釜　繁
調査企画	〃	社会教育課長	岩穴口　新
調査事務	〃	社会教育係長	谷口敏徳
調査担当者	〃	社会教育係主事	鵜飼一伸
	〃	社会教育係文化財主事補	羽生文彦
	埋蔵文化財センター	文化財主事	弥栄久志
	〃	文化財研究員	今村敏照

第4節　調査の経過

確認調査は平成6年4月11日～15日，第3地点は平成6年6月6日～8月25日，第1・2地点は平成6年11月14日～12月2日，第4地点は平成7年5月8日～6月13日に実施し，平成8年度に報告書作成を実施した。

調査の内容は，以下の日誌抄に掲載する。

［日誌抄］

確認調査

平成6年4月11日（月）

第1地点　第1～第8トレンチを設定し，掘り始める。規模は2×110mのトレンチに及ぶ。第3トレンチに土器片が出土。

4月12日（火）

雨天のため，各トレンチの土層断面の調査を実施。

4月13日（水）

第1地点　第1～第8トレンチの調査。第3トレンチのみ出土。

第2地点　第1～第5トレンチを設定。第1・3・4トレンチを掘り始める。

第3地点　第1・2トレンチの設定と表土剥ぎ。

4月14日（木）

第1地点　第3・7・8トレンチの測量。

第2地点　第1～第5トレンチを掘り下げ。第6・7トレンチを設定・掘り下げ。

第3地点　第1～3トレンチの設定・掘り下げ。

4月15日（金）

第2地点　第1～第7トレンチの掘り下げ・測量。

第3地点　第1～第3トレンチを掘り下げ・測量。

第4地点　第1トレンチの掘り下げ・測量。

本日で確認調査終了。

第3地点の全面調査

平成6年6月6日（月）～6月10日（金）

E－7・8区の表土剥ぎ。D－7・8・9区の表土剥ぎ。

6月13日（月）～6月17日（金）

D－7・8・9区の表土剥ぎ。C－7・8・9・10区の表土剥ぎ。

6月20日（月）～6月24日（金）

A・B－7・8・9・10区の表土剥ぎ。E－7・8区の第3層掘り下げ。

6月28日（火）～7月1日（金）

E－7・8区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

7月4日（月）～7月8日（金）

D・E－7・8区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

7月11日（月）～7月15日（金）

D・E－7・8区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

7月18日（月）～7月22日（金）

C・D－8・9区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

7月25日（月）～7月29日（金）

C・D－8・9区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。土抗実測。

8月2日（火）～8月4日（金）

B・C・D－8・9区の第3層掘り下げ．写真撮影。遺物取り上げ測量。土抗実測。

8月8日（月）～8月12日（金）

A・B・C・D－8・9・10区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。土坑実測。土器実測。溝検出。

8月16日（火）～8月19日（金）

全体のコンター測量。畦外し。遺物取り上げ測量。

8月22日（火）～8月25日（木）

畦外し。遺物取り上げ測量。

本週で調査終了。

第1・2地点の全面調査

11月14日（月）～11月18日（金）

C・D－12・13区の第3層掘り下げ。遺物取り上げ測量。土器実測。

11月21日（月）～11月25日（金）

B・C－12・13区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

11月29日～12月2日（金）

B・C－12・13区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。畦外し。全体のコンター測量。第1地点の掘り下げ。本週で調査終了。

第4・5地点の調査

平成7年5月8日（月）～5月12日

E・F－1・2区の表土剥ぎ。第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

5月15日（月）～5月19日（金）

D・E－1・2区の表土剥ぎ。第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

5月22日（月）～5月26日（金）

D－1区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。土層断面図作成。

5月29日（月）～6月2日（金）

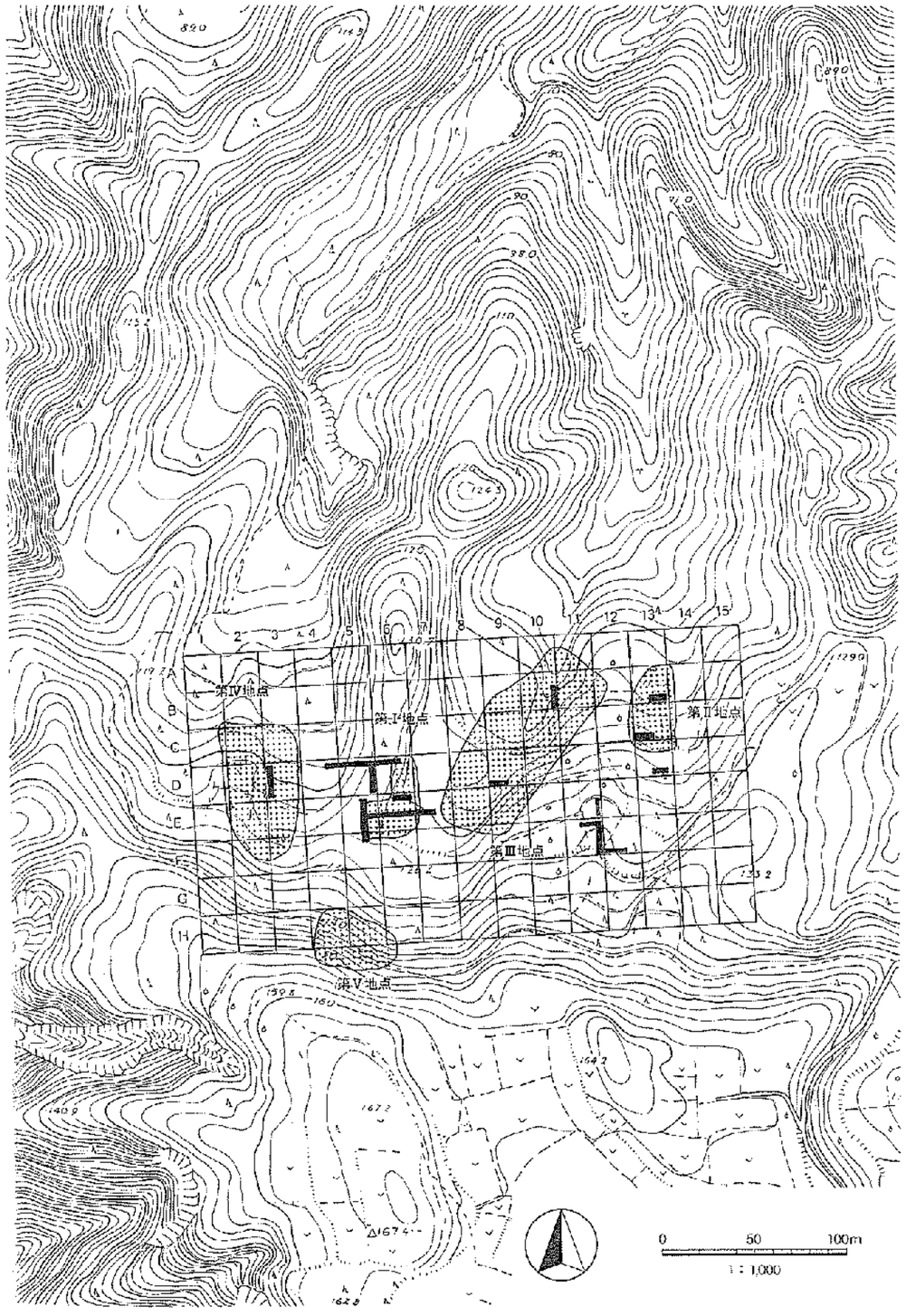
D－1・2区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。

6月5日（月）～6月9日（金）

C－1区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。畦外し。

6月12日（月）・6月13日（火）

C－1区の第3層掘り下げ。写真撮影。遺物取り上げ測量。畦外し。13日で調査終了。



第1図　周辺位置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地形概説

横道遺跡は，垂水市街地から南東約５ｋｍの地点（北緯３１°　２７′　５０″，東経１３０°　４３′　５０″）に位置する。

垂水市の地形は，大きく３地域に分けることができる。東方の高隈山地を中心とする山地，その麓から鹿児島湾近くまで緩傾斜をなして広がるいわゆるシラス台地，そして台地間や海岸線にある沖積平野の３つである。シラス台地は，高隈山地と接する部分が海抜約200mであるが，西方ほど次第に低くなり，市街地付近では高さ10数ｍの断崖を連ね海岸に望んでいる。

遺跡の位置するところは，シラス台地が高隈山地と接する付近にあたり，海抜１２０～１３０ｍの台地間に形成された緩やかな谷地形に立地する。

確認調査の結果，２箇所の谷とその間の尾根を遺跡の範囲として，確認調査の順に第１～５地点とした。

第２節　地質概説

先述の第１節で分けた山地帯は，白亜系の四万十累層群の高隈山帯（橋本，1926）に相当し，海地底地滑り堆積物を挟む砂岩頁岩互層の高隈山層（太田・河内，1965）と牛根層（小川内・岩松，1986）の一部が中新生後期（14Ma）の高隈山花崗岩（柴田，1978）の貫入に伴い接触熱変成作用を受けホルンフェルス化している。

その山地から，浸食・運搬・堆積作用を受け扇状地状の垂水砂礫層を形成し，その上に旧期ローム層，大隅降下軽石層・妻屋火砕流堆積物・亀割坂角礫層・入戸火砕流堆積物・新期ローム層及びそれらの二次堆積物からなる、いわゆるシラス台地を構成している。

沖積層は砂や粘土，小石からなる。

また，透水性の高いシラス台地の直下には緻密な旧期ローム層が堆積しており，それが不透水層となり，シラス台地縁辺部の崖下においてしばしば湧水がみられる。

本遺跡は，谷地形ではあるが，傾斜が緩やかなためシラス台地上とほとんど相違ない新期のローム層の堆積がみられ，サツマ火山灰，アカホヤ火山灰，及び大正３年の桜島の火山灰が確認された。遺物包含層は，アカホヤ火山灰の上に堆積したアカホヤ火山灰の二次堆積層に相当する。

第３節　歴史概説及び周辺の遺跡

垂水市史によると，「過去において考古資料となる遺跡地は少なかった。」とある。しかし近年の鹿児島県教育委員会による広域分布調査や垂水市教育委員会が実施してきた発掘調査の結果，今回調査を行った地域周辺においても，第２図及び第１表にみられるように縄文～中世の城跡まで様々な遺跡が点在していることが分かってきた。その大部分は台地上と海岸線沿いの沖積平野に集中しており，古墳時代のものが多い。

［参考文献］

太田良平　「５万分の１地質図幅『垂水』および同説明書」　１９５４　地質調査所

橋本　勇　「九州南部における時代未詳層群の総括」

（『九大教養地学研報　９　１３－６９』）　１９６２

小川内良人ほか　「大隈半島四万十帯の地質構造」　（

『鹿大理学部紀要（地学・生物学）１９』）　１９８６

柴田　賢　「西日本外帯における第三紀花崗岩貫入の同時性」

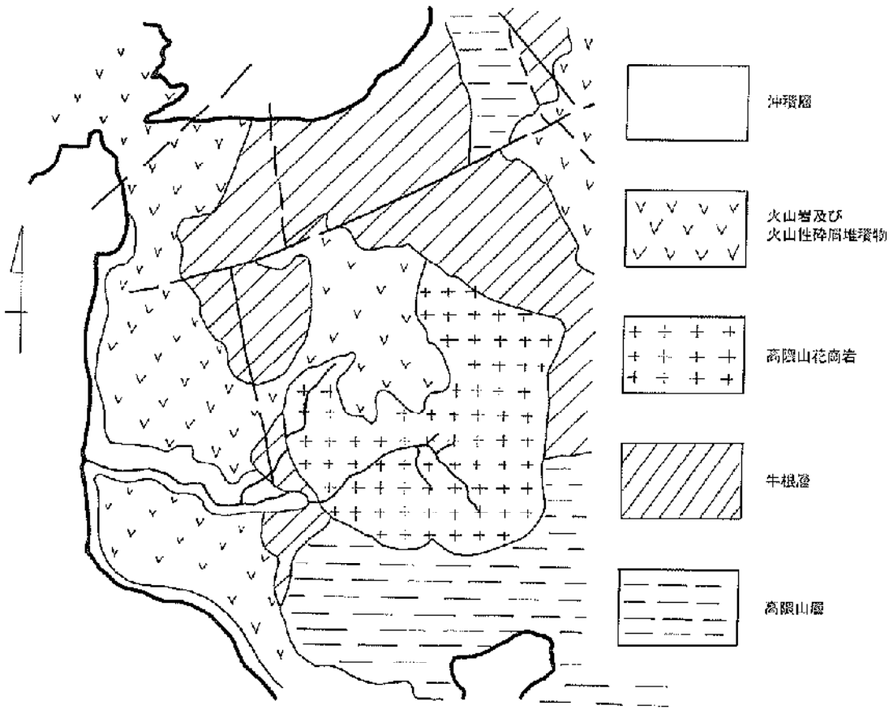
（『地調月報　２９　５５１－５５４』）　１９７８

KOBAYASHI et al　「Thickness and Grain-size Distribution of the Osumi pumice Fall Deposit from the Aira Caldrera」

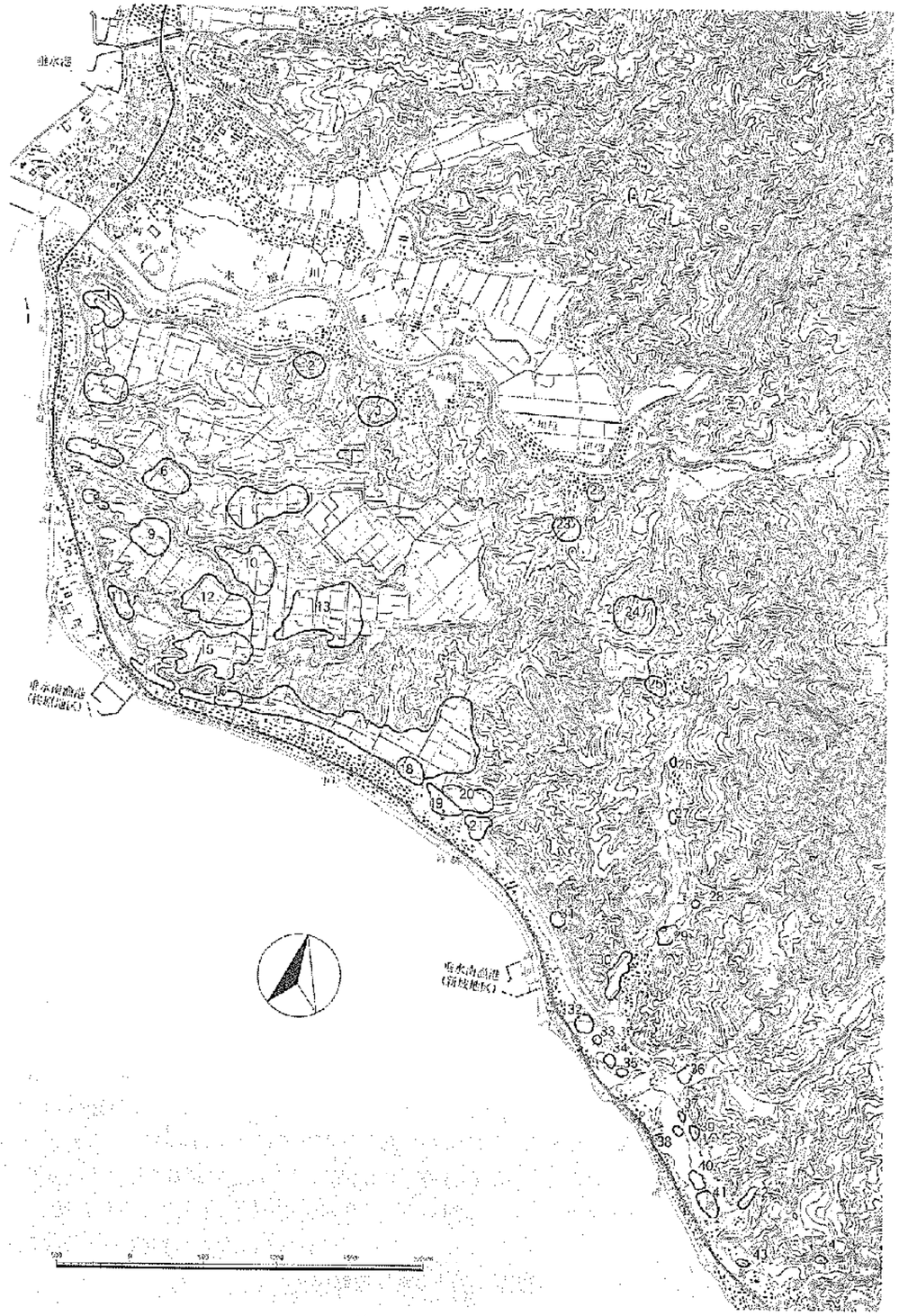
（『Bull.Volcanol.Soc.Japan.　２　２８　２　１２９－１３９』　１９８３）

荒巻　重雄　「姶良カルデラと入戸火砕流」　（『月刊　地球 Vol.　５　２』）　１９８３

垂水市教育委員会　「垂水市史　上巻」　１９６４



第2図　垂水の地質概略



第3図　周辺の遺跡

第1表　周辺遺跡地名表表

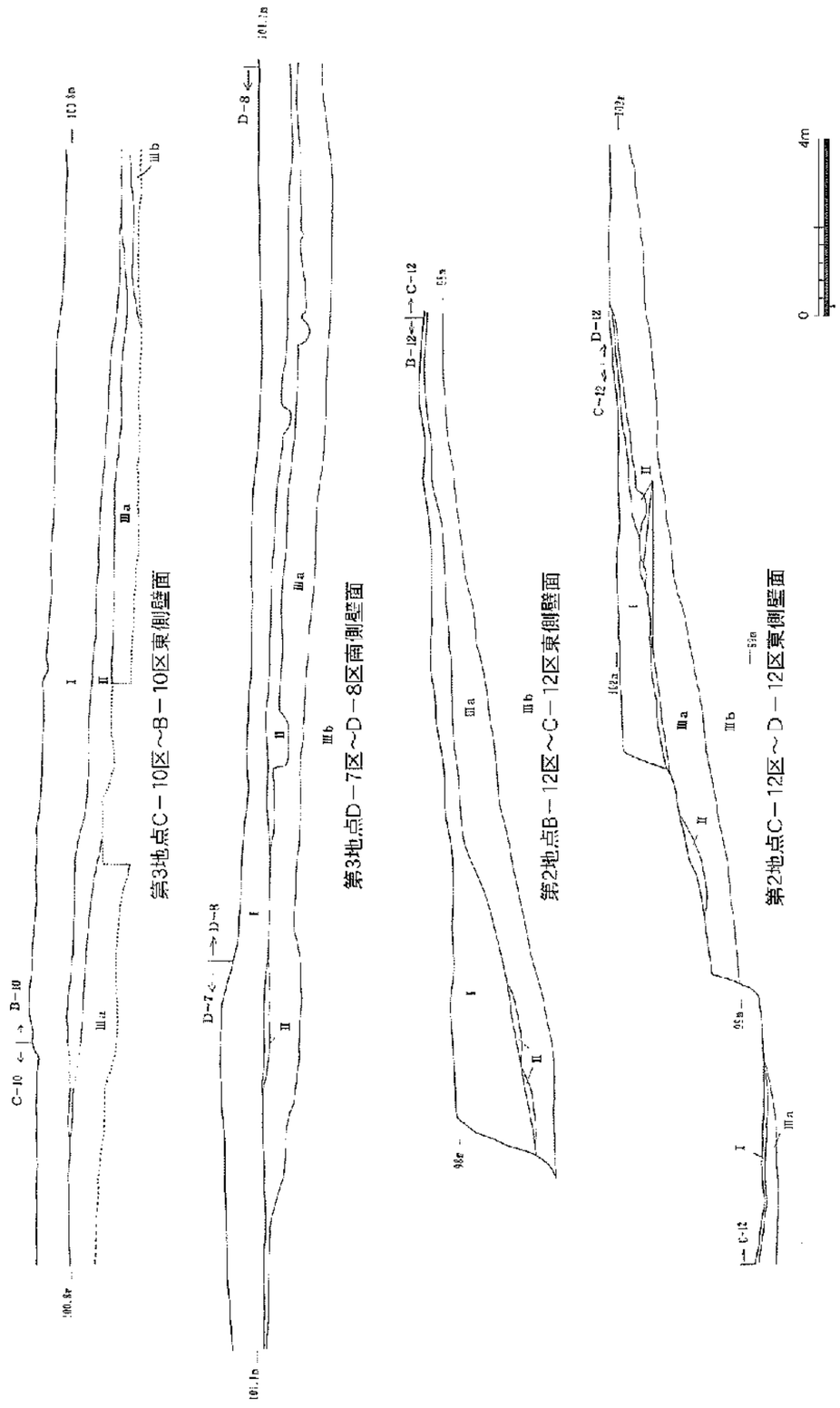
番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	水迫	浜平水迫	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史
2	本城跡	本城城跡下	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史
3	本城跡 (下之城)	本城上本城	台地	室町 安土桃山		垂水市史
4	浜平	浜平	台地	古墳	成川式	
5	葛迫城跡	浜平葛迫	台地	室町 安土桃山		垂水市史
6	迫頭	浜平	台地	古墳	成川式土器	H3農政分布
7	平谷	浜平	台地	古墳	成川式土器	H3農政分布
8	尾迫城跡	浜平尾迫	台地	室町 安土桃山		垂水市史
9	高屋	浜平	台地	古墳	成川式土器	H7農政
10	小鶴内	柊原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
11	西ヶ迫	新生	低地	古墳	成川式	H6年度農政分布，平成7年度確認調査，平成8年度全面調査
12	一本松後	柊原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
13	細ヶ崎	柊原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
14	後ヶ迫A	柊原小学校	低地	古・歴	成川式・土師器・須恵器 青磁・白磁	H7確認調査
15	大迫	柊原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
16	軽砂	柊原軽砂	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史
17	柊原遺跡群	柊原	低地	縄・古	貝塚	
18	柊原貝塚	柊原柊原下	低地	縄 古墳	貝塚・人骨・獣骨・魚骨 種子・装石・軽石製品(岩偶) ・土器(轟式・市来式・ 御領式・三万田式・納曽式・ 上加世田式・入佐式等) ・石器・貝器・骨角器 成川式	H7個人住宅建設に伴う確認調査及び農道整備に伴う確認調査
19	宮ノ前	新城宮脇	低地	縄(前・晩)・弥・古・歴	縄文土器片，弥生土器片，成川式，陶磁器片	
20	前畑	新城宮脇	低地	縄(晩)・古・歴	黒川式・成川式・土師器・須恵器	H6確認調査
21	重田	新城重田	低地	縄(前・晩)・弥・古	曽畑式，深浦式，山ノ口式，成川式	H6，7確認調査
22	城跡	高城本高城	台地	弥生		
23	高城跡	高城小学校	台地	鎌倉 南北朝 室町 安土桃山		垂水市史
24	横道	高城殿	台地	縄文(晩)・古・歴	黒川式，成川式，土師器，鉄剣，鉄鏃，薩摩焼き	H6ゴルフ場工事中発見，H6・7全面調査
25	西ヶ迫	新城西ヶ迫	台地	弥生	弥生式土器片	垂水市史
26	小谷	新城小谷	低地	古墳	成川式	H7確認調査
27	大丸	新城小谷	低地	古墳	成川式，須恵器	H8確認調査
28	宮籠	新城小谷	低地	古・歴	成川式	H9確認調査
29	東畠	新城小谷	低地	古墳	成川式，須恵器	H3農政分布，H7確認調査
30	高松	新城湖川内	低地	縄・歴	土器片	H3農政分布
31	諏訪	新城諏訪下稲荷平	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史 昭和42年上田魏明方畑地
32	松崎	新城諏訪	低地	縄～古	土器片	H3農政分布
33	須崎	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布，H7確認調査
34	横間下	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布，H7確認調査
35	竹下	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布，H8確認調査
36	梅本	新城田平	低地	古墳	成川式，須恵器	H3農政分布，H8確認調査
37	崩尻	新城宇住麓	低地	古墳	成川式，須恵器	H3農政分布，H8確認調査
38	中牟田	新城宇住麓	低地	古墳	成川式	H3農政分布，H5確認調査
39	田中川内宇 田平宅地	新城田中川内田平	低地	弥生	弥生式土器片・壺	垂水市史・昭和30・45年 永谷シヅ方宅地 田平与茂八方
40	小房迫前	新城大浜	低地	弥・古・歴	弥生土器・成川式	H5年度確認調査，H6全面調査
41	宮下	新城大浜	低地	縄(後・晩)・弥・古	面平式，三万田式，黒川式，刻目突帯文土器，弥生土器，成川式，石斧，磨石，敲石，石皿，石鏃，礫器，楔形石器	H3農政分布，H5確認調査，H6全面調査
42	感王寺口	新城感王寺	低地	古墳	成川式	H3農政分布，H5確認調査
43	但	新城	低地	古墳	成川式	H3農政分布
44	井ノ尾	新城	低地	古墳	成川式	H3農政分布

第Ⅲ章　層　　序

発掘調査は，20m 四方の調査区画を設定し，重機を使用して表土を削除した後，作業員の手掘りで行った。第１～５地点までの層序には地形的な相違がみられたものの基本となる層序は以下のとおりである。

基本層序

Ⅰ 層	表　　土	古墳時代～現代の遺物が混在
Ⅱ 層	黒　色　土	古墳時代，近世の遺物が混在
Ⅲa 層	褐　色　土	遺物包含層（縄文晩期～古墳時代）
Ⅲb 層	淡黄褐色土	喜界アカホヤテフラ（K－Ah）の２次堆積無遺物層
Ⅳ 層	明茶褐色土	無遺物層
Ⅴ 層	黒褐色砂質土	無遺物層
Ⅵ 層	黄褐色砂質土・軽石	a～d に分層　桜島薩摩テフラ（Sz－S）の無遺物層
Ⅶ 層	暗茶褐色強粘質土	無遺物層
Ⅷ 層	淡茶褐色粘質土	無遺物層
Ⅸ 層	濁灰白色弱粘質土	姶良 Tn テフラ（AT）の無遺物層



第4図　土層堆積状況

第Ⅳ章　第３地点及び第２地点の発掘調査

第１節　発掘調査の概要

第１地点から第３地点までの発掘調査は，平成６年度に実施した。発掘調査は第３地点より行い，以下第２地点，第１地点と順に調査を行った。第３地点の発掘調査は，平成６年６月６日から平成６年８月２５日まで行った。第２地点及び第１地点の発掘調査は，平成６年１１月１４日から平成６年１２月２日まで行った。しかし，第１地点からは遺構及び遺物については検出されなかったので，本章での記述は割愛する。

発掘調査は，調査対象区域内に，２０ｍ×２０ｍのグリッドを設定し，重機を使用して表土を削除した後，作業員の手掘りで行った。（５頁第１図参照）。

第２節　遺構

第３地点からは，土坑と溝状遺構が検出されたが，いずれも遺物を伴わず，時期や用途については判然としない。他には，確とした遺構は検出されていない。第２地点からは，特に遺構は確認されなかった。

溝状遺構

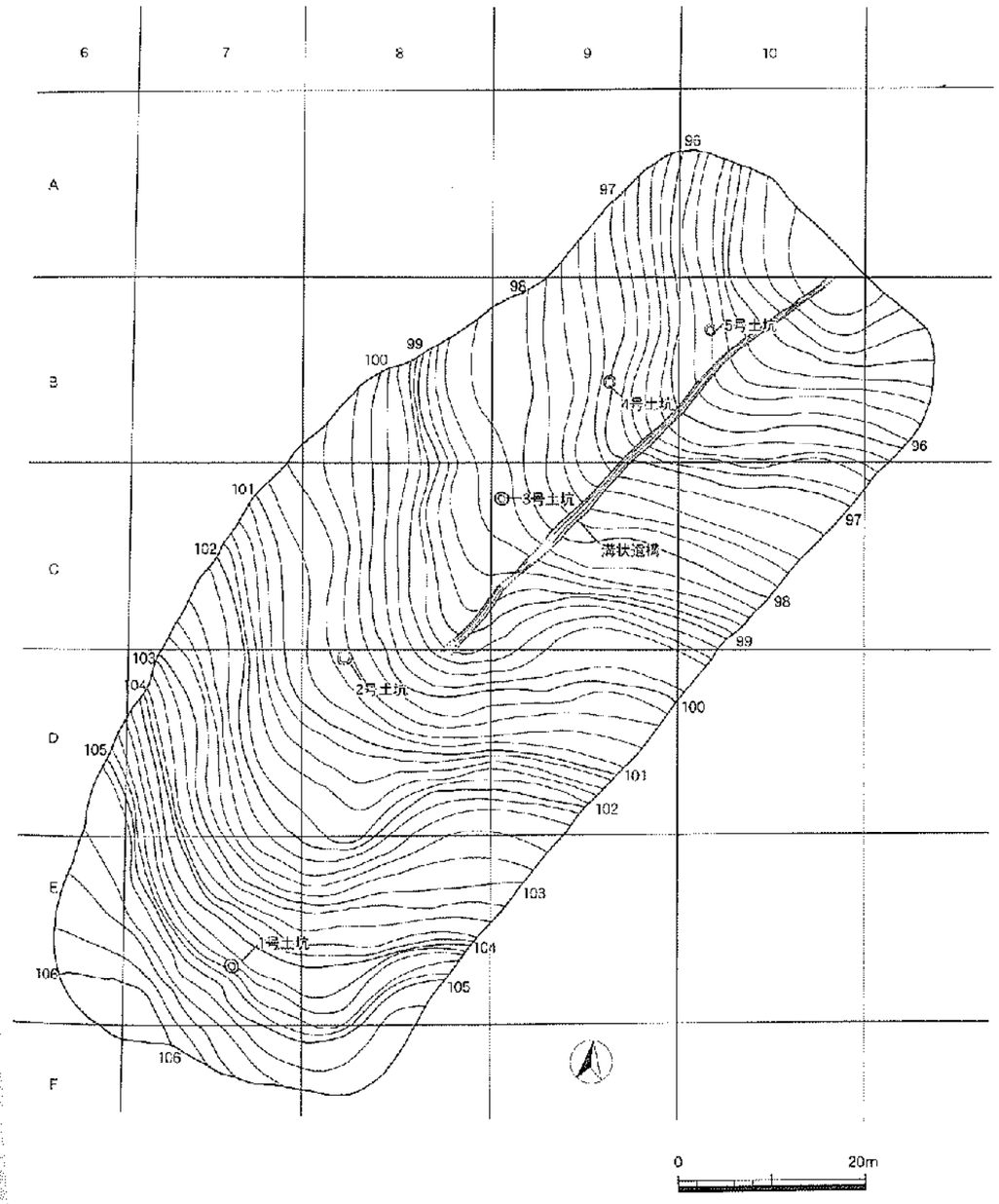
谷状地形を有する第３地点の中央最深部を縦断する（Ｃ－８区，Ｃ－９区，Ｂ－９区，Ｂ－１０区），溝状の遺構が検出された。長さ約６０ｍ，幅約２ｍである。溝の掘り込みは一部不規則な部分もあり，あるいは自然の流水路の可能性も考えられる。埋土としてⅡ層が充填していた。遺物の出土は見られなかった。

土坑

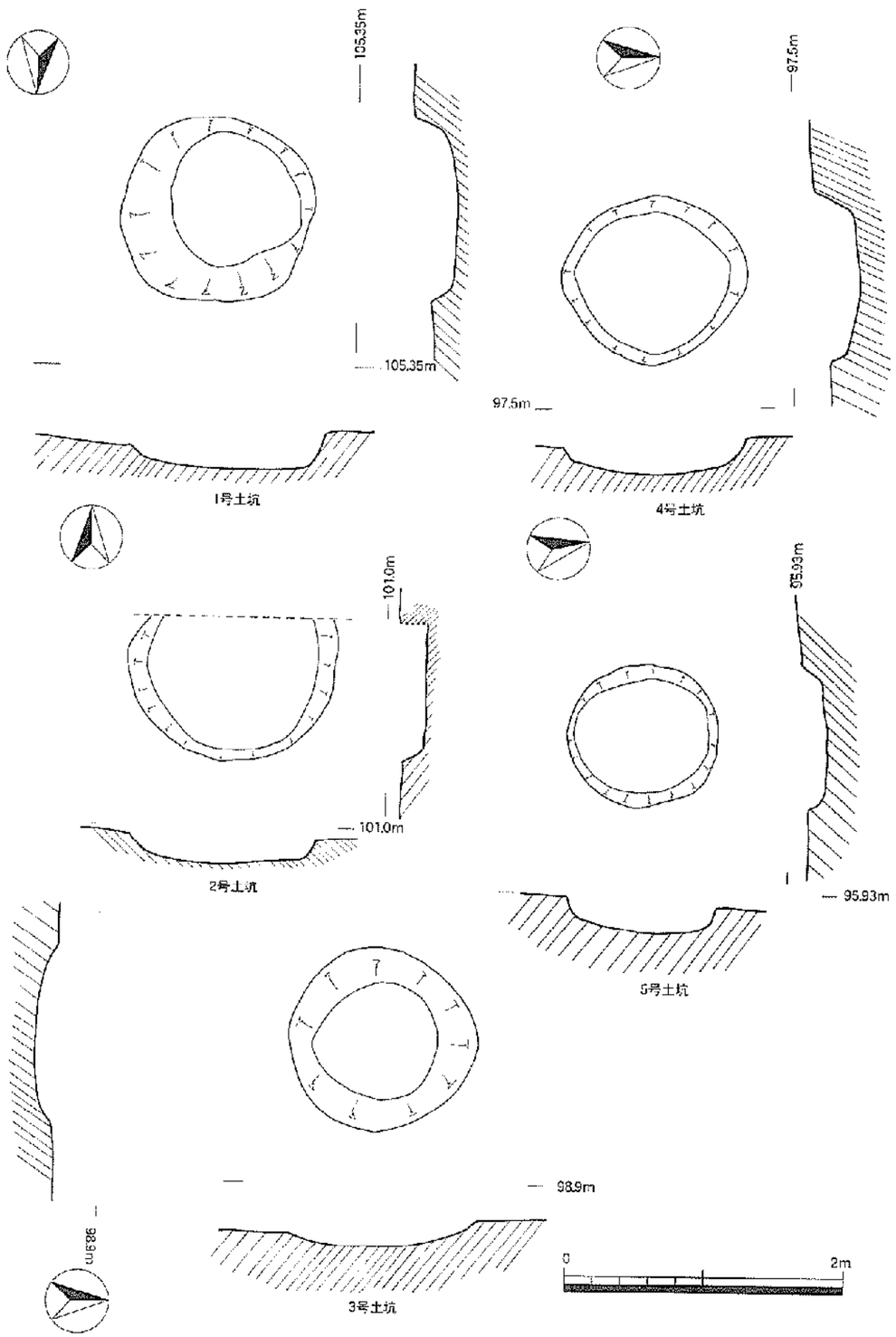
第３地点より，５つの土坑が検出された。いずれも円形のプランを有し，擂鉢状を呈する。溝状遺構に沿ってほぼ等間隔に点在する。いずれも埋土としてⅡ層が充填しており，遺物は検出されなかった。

第2表　第3地点検出土坑一覧表

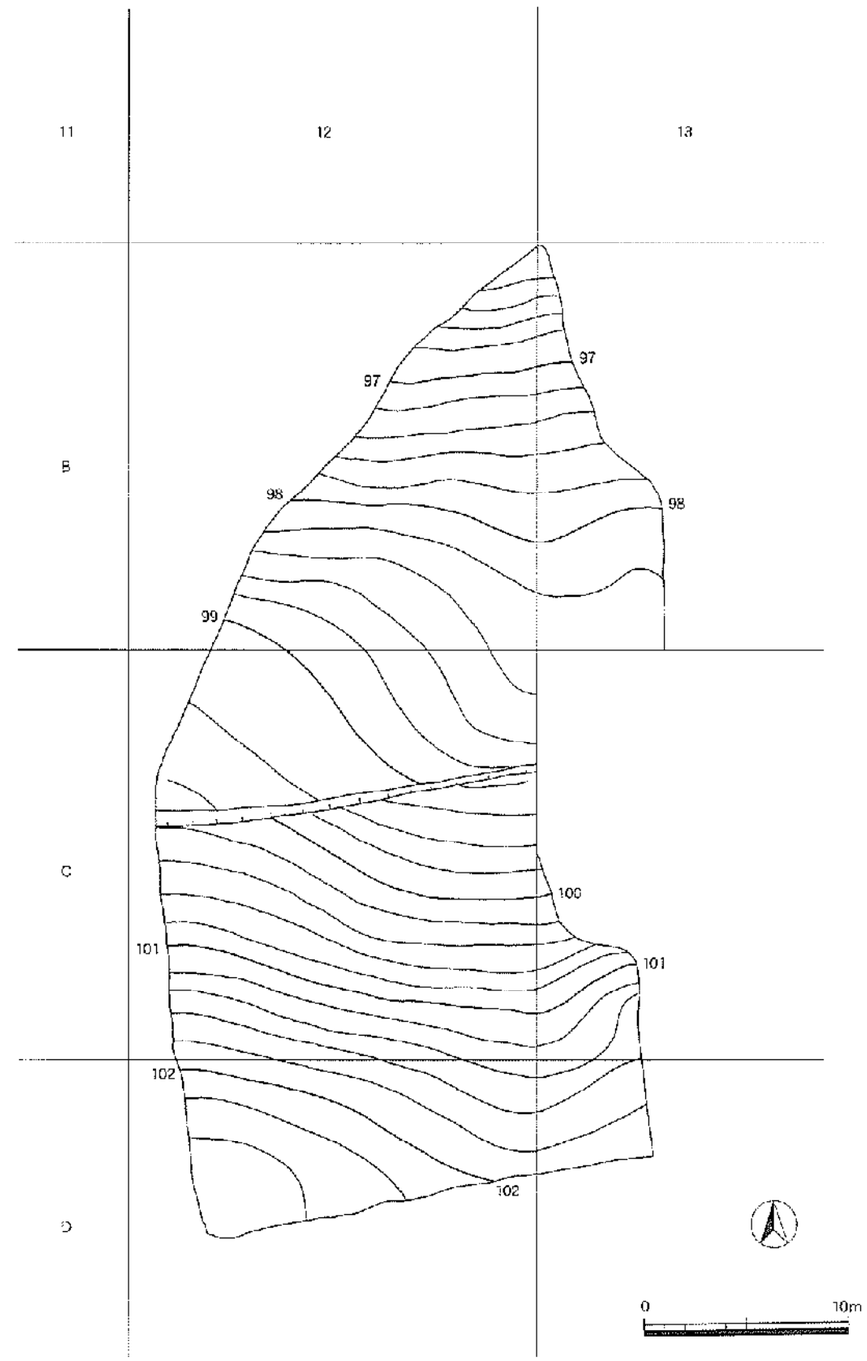
名　称	検出区	プラン	直径	深さ	埋土	遺物
１号土坑	Ｅ－７	円形	約１４０cm	約２０cm	Ⅱ層	－
２号土坑	Ｄ－８	円形	約１４０cm	約２２cm	Ⅱ層	－
３号土坑	Ｃ－９	円形	約１４０cm	約６cm	Ⅱ層	－
４号土坑	Ｂ－９	円形	約１３０cm	約２４cm	Ⅱ層	－
５号土坑	Ｂ－１０	円形	約１２０cm	約８cm	Ⅱ層	－



第5図　第3地点Ⅳ層上面の地形及び遺構配置図



第6図　第3地点検出土坑



第7図　第2地点Ⅳ層上面の地形

第３節　出土遺物

横道遺跡第３地点及び第２地点からは，弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が出土した。出土した遺物の大半を占めるのは，いわゆる「成川式土器」であり，中には完形のものも含まれる。他には，僅かに第３地点から免田式土器が４点，土師器が１点出土したのみである。このような状況であったため，出土した地点に関わらず，形態や器種による分類に従って記述を行った。出土した地層は第３地点，第２地点ともにⅢａ層である。

１　弥生時代後期～古墳時代の土器（土器Ⅲ類　第１０図１～第２１図２２５）

次章（第Ⅴ章）で第４地点出土の遺物について記述するが，第４地点からは僅かに縄文時代晩期の土器が出土している。それらの土器については，Ⅰ類土器，Ⅱ類土器と分類し，成川式土器についてはⅢ類土器として分類した。第３地点及び第２地点からは縄文時代晩期の遺物は検出されていないが，記述に整合性を持たせる意味合いから，第３地点及び第２地点出土の成川式土器についても，Ⅲ類土器と分類することにする。

本遺跡出土の資料は，ある程度の復元が可能なものが含まれているが，それらは比較的大形のものであるので，単純に図化する際大形のものをⅢＡ類とし，図化する際小形になる小片のものをⅢＢ類と大別して，さらに器形や胎土・器面調整といったそれぞれの特徴ごとに細分を試みた。なお，この大型，小型の分類は紙面レイアウト上の都合による便宜的な分類であり，特に土器型式分類に基づくものではないことを断っておく。以下，それぞれについて記述を行っていく。

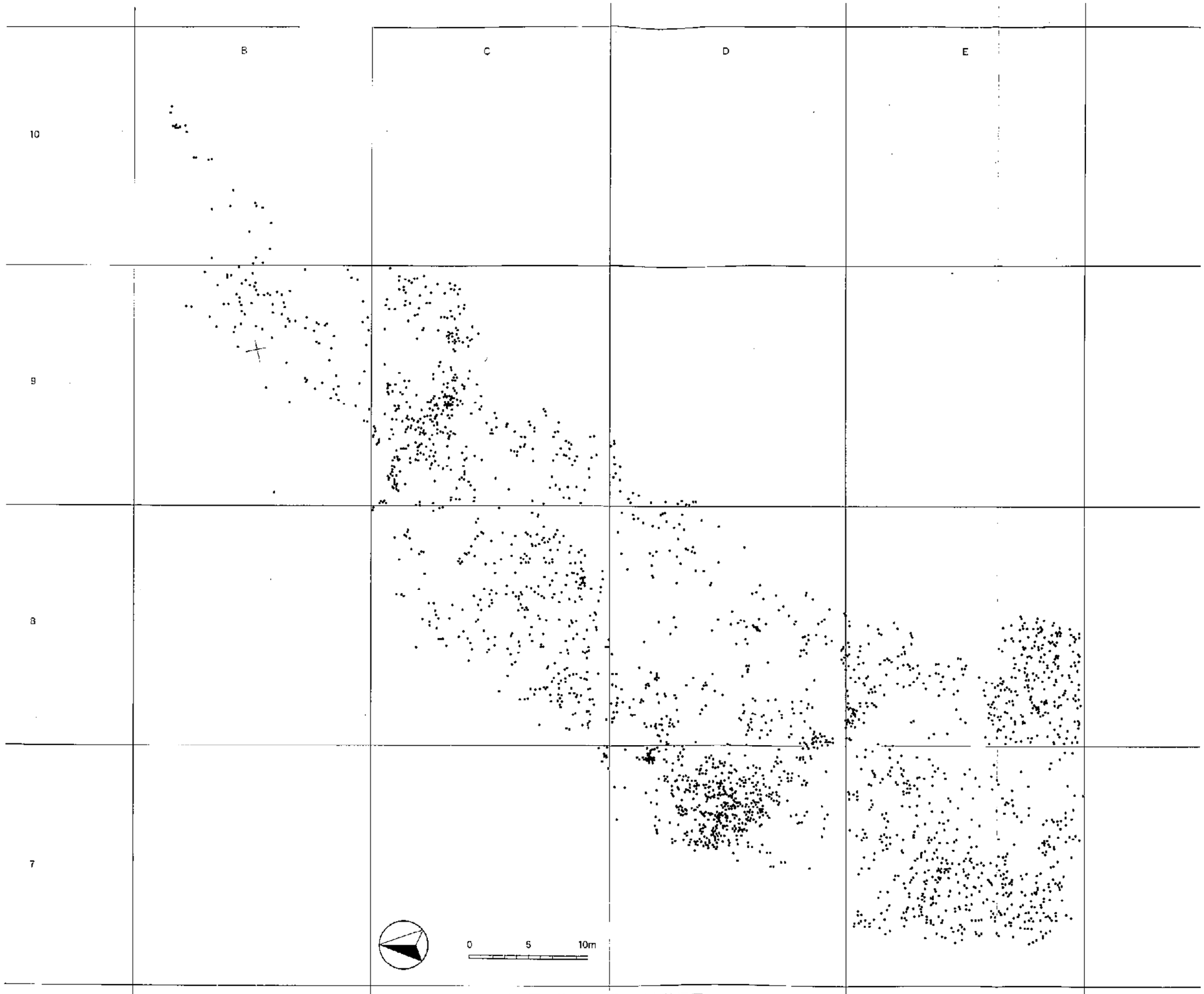
土器ⅢＡ－甕１類（第１０図１～３）

成川式土器のうち，完形のものまたは比較的大型のものをⅢＡ類とした。本報告書作成に関しては，中村直子氏の研究を参考としたが（中村，１９９４），形態や器種に関する用語等は，中村の研究・用語を参考・引用として，以下記述を行っていくことにする。

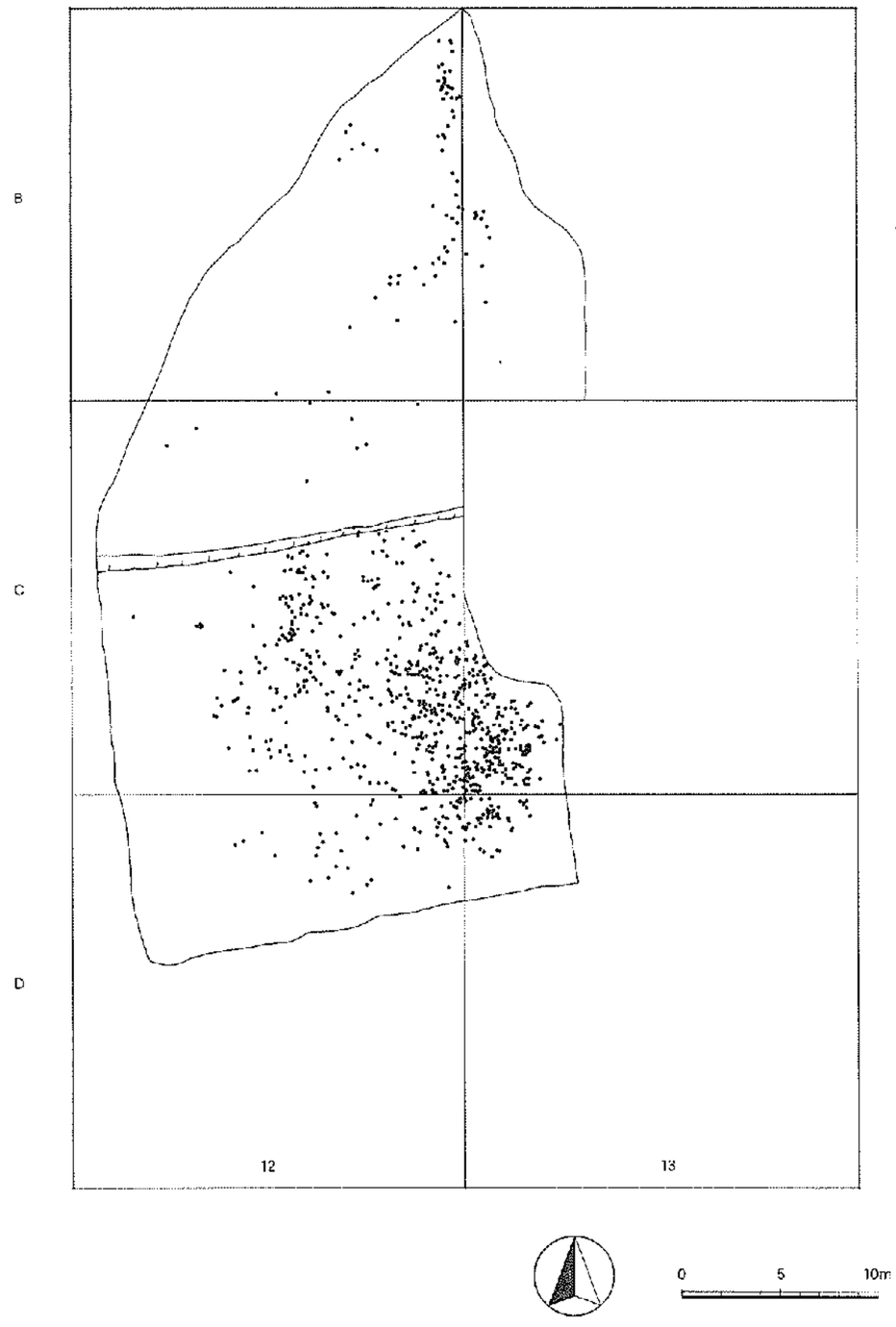
ⅢＡ類に属する甕形土器の中で，大きく外反する口縁部を有するものをⅢＡ－甕１類とした。いずれも刻目が施された突帯を有する。１は完形の甕である。胴部に断面が三角形の突帯を有するが，突帯には工具によると思われる細い刻目を施す。刻目内には繊維による圧痕が観察できる。口縁部と突帯間の距離は比較的短い。器外面に，板の木口でなでる調整法（いわゆるハケメ。以下，ハケメと記述する）が見られる。やや低い脚部を有する。脚台の内面天井部は平坦で，短い脚部は先端へ向けて真っ直ぐに降り，先端で僅かに外反する。脚台内外面に指押さえと横ナデが確認できる。２は，口縁部から底部にかけて残存している。胴部に断面が三角形の突帯を有するが，突帯には工具によると思われる細い刻目を施す。口縁部と突帯間の距離は比較的短い。器外面にハケメ及び横ナデが，器内面に横ナデがそれぞれ観察できる。３は，口縁部から胴部にかけて残存している。口縁部と胴部の境目に段を有するが，この段部に断面が三角形の突帯を有する。突帯には工具によると思われる細い刻目を施す。口縁部と突帯間の距離はあまり長くないが，１・２と比較すると若干長い。器外面口縁部に，ハケメ状原体の工具による縦方向の擦過（いわゆるカキアゲ。以下，カキアゲと記述する。）が観察できる。他に，器外面にハケメ及び横ナデが，器内面にナデがそれぞれ観察できる。

土器ⅢＡ－甕２類（第１０図４，５）

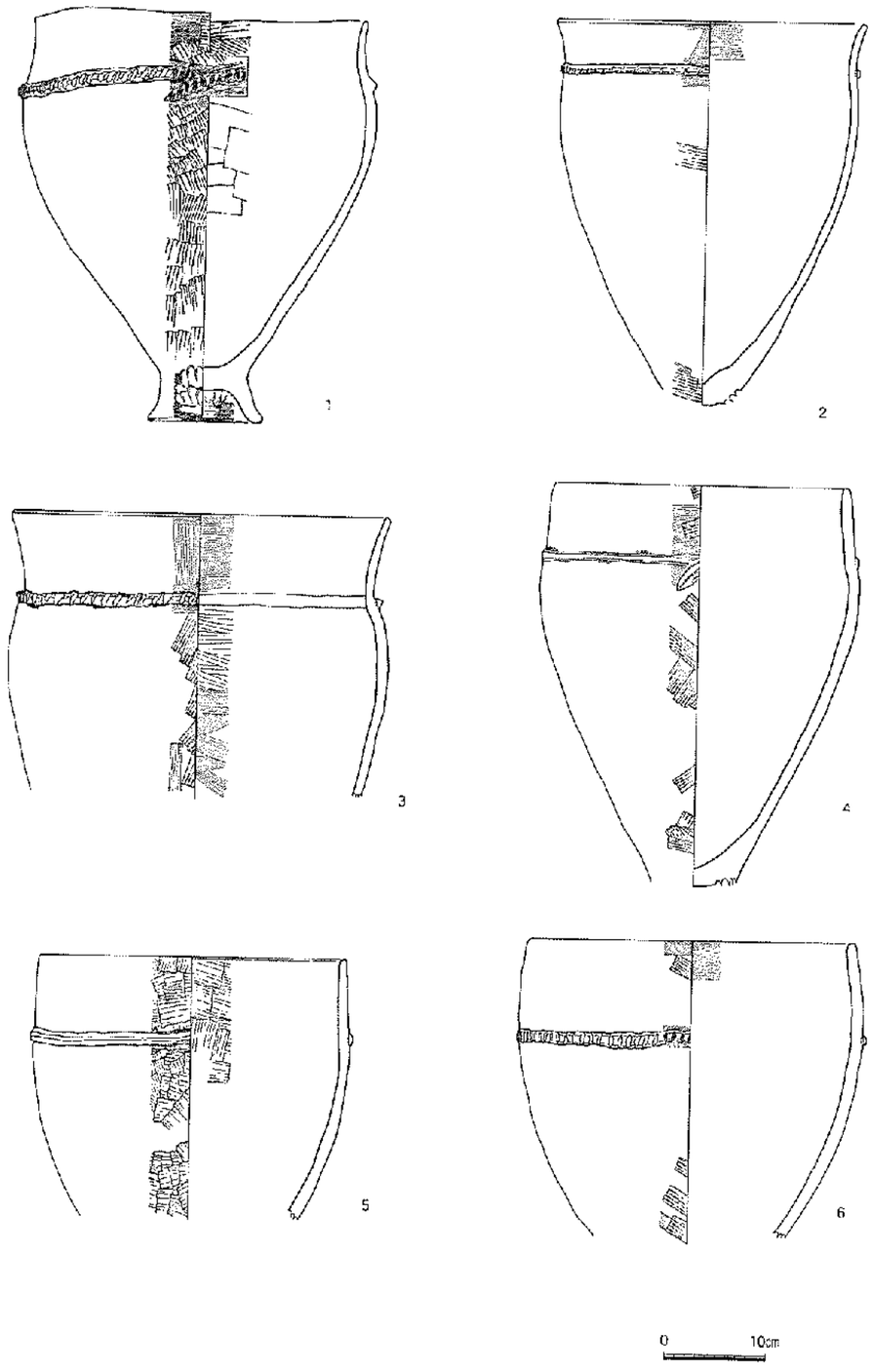
ⅢＡ類に属する甕形土器の中で，ほぼ直立する口縁部を有するものをⅢＡ－甕２類とした。いず



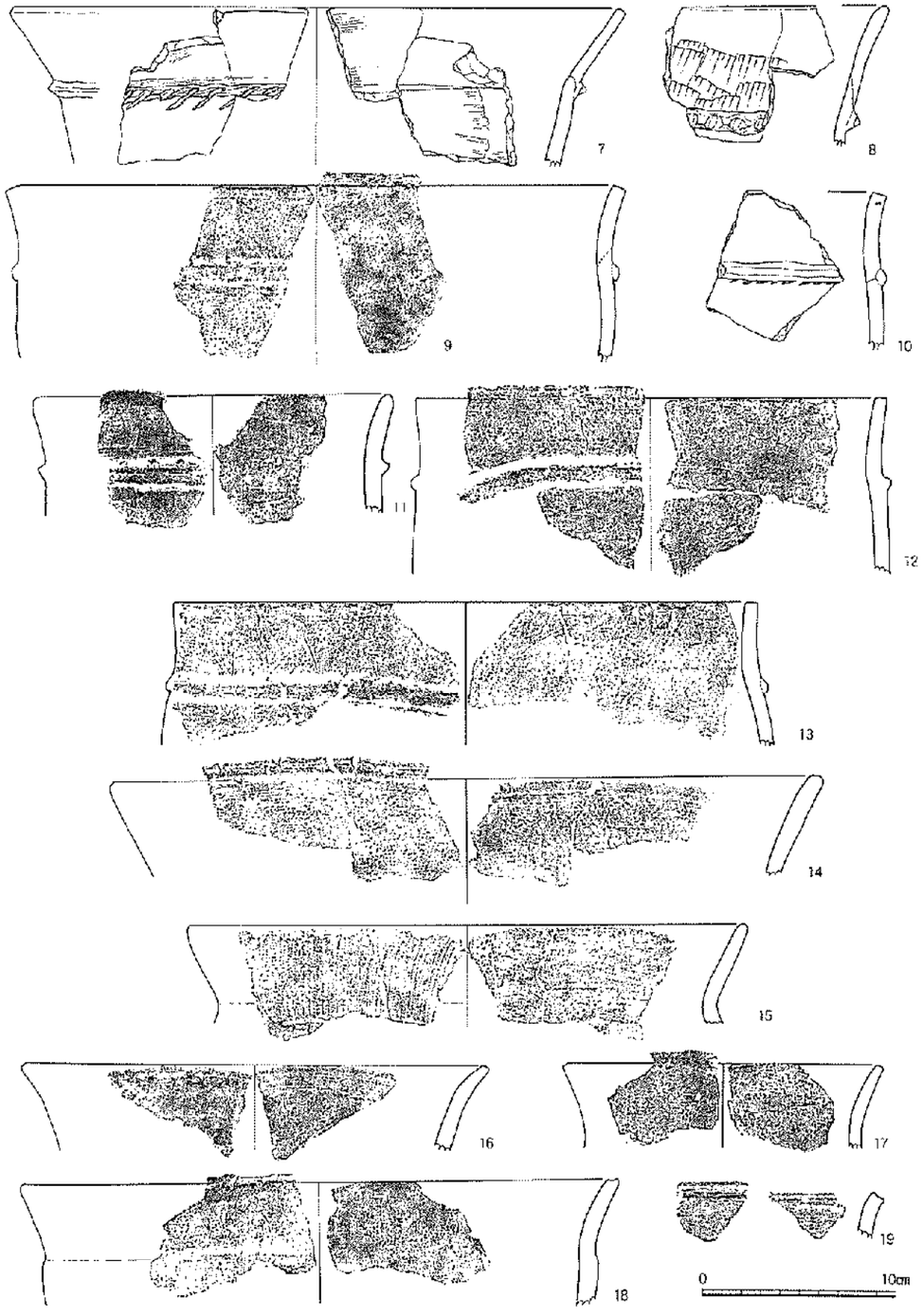
第8図　第3地点遺物出土状況図



第9図　第2地点遺物出土状況図



第10図　出土遺物実測図1（土器ⅢA類）



第11図　出土遺物実測図2（土器ⅢB－甕口－1a類～1c類）

れも刻目を施さない突帯を有する。４は口縁部から底部付近にかけて残存するものである。口縁部と胴部の境に，断面がゆるい三角形の突帯を有する。器外面にハケメ及びナデが観察できるが，器内面には，特に調整は観察できない。５は口縁部から底部付近にかけて残存するものである。断面が蒲鉾形の突帯を有する。器内外面にハケメが観察できる。

土器ⅢＡ－甕３類（第１０図６）

ⅢＡ類に属する甕形土器の中で，内湾する口縁部を有するものをⅢＡ－甕３類とした。６は口縁部から底部付近にかけて残存するものである。胴部に断面台形の突帯を有する。突帯には工具によると思われる細い刻目を施す。刻目内には繊維による圧痕が確認される。器外面に，ハケメとナデが，器内面にナデが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－１ａ類（第１１図７，８）

横道遺跡から出土した成川式土器の中で，比較的小型のもの及び小片のものをⅢＢ類とした。ⅢＢ類に属する甕形土器の中で，口縁部付近が残存しているものをⅢＢ－甕口類とし，さらに，口縁部が外反するもの，または口縁部が大きく外傾して開くものをⅢＢ－甕口－１類とした。さらにその中で，胴部との境に突帯を有し，その突帯に刻目が施されているものを，ⅢＢ－甕口－１ａ類とした。

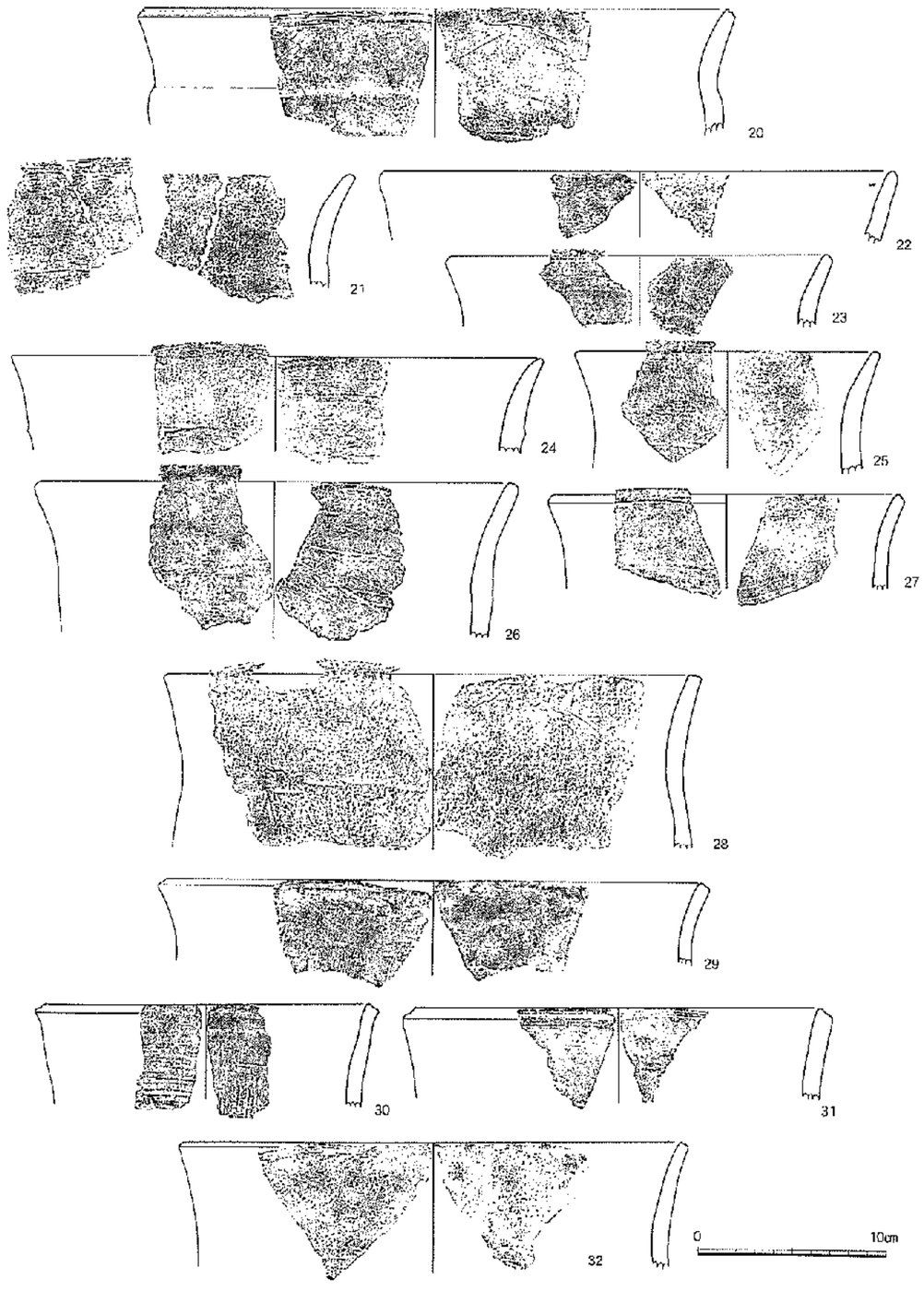
７は，先端に向かって大きく外傾して開く口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が三角形の突帯を１条有するが，突帯には細い原体の工具によると思われる斜方向の刻目を施す。器面調整は，器外面にナデが，器内面にハケメ及びナデが観察できる。８は外傾する口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が三角形の突帯を１条有するが，突帯にはやや太い原体の工具によると思われる刻目を施す。器面調整は，器外面にハケメが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－１ｂ類（第１１図９～１３）

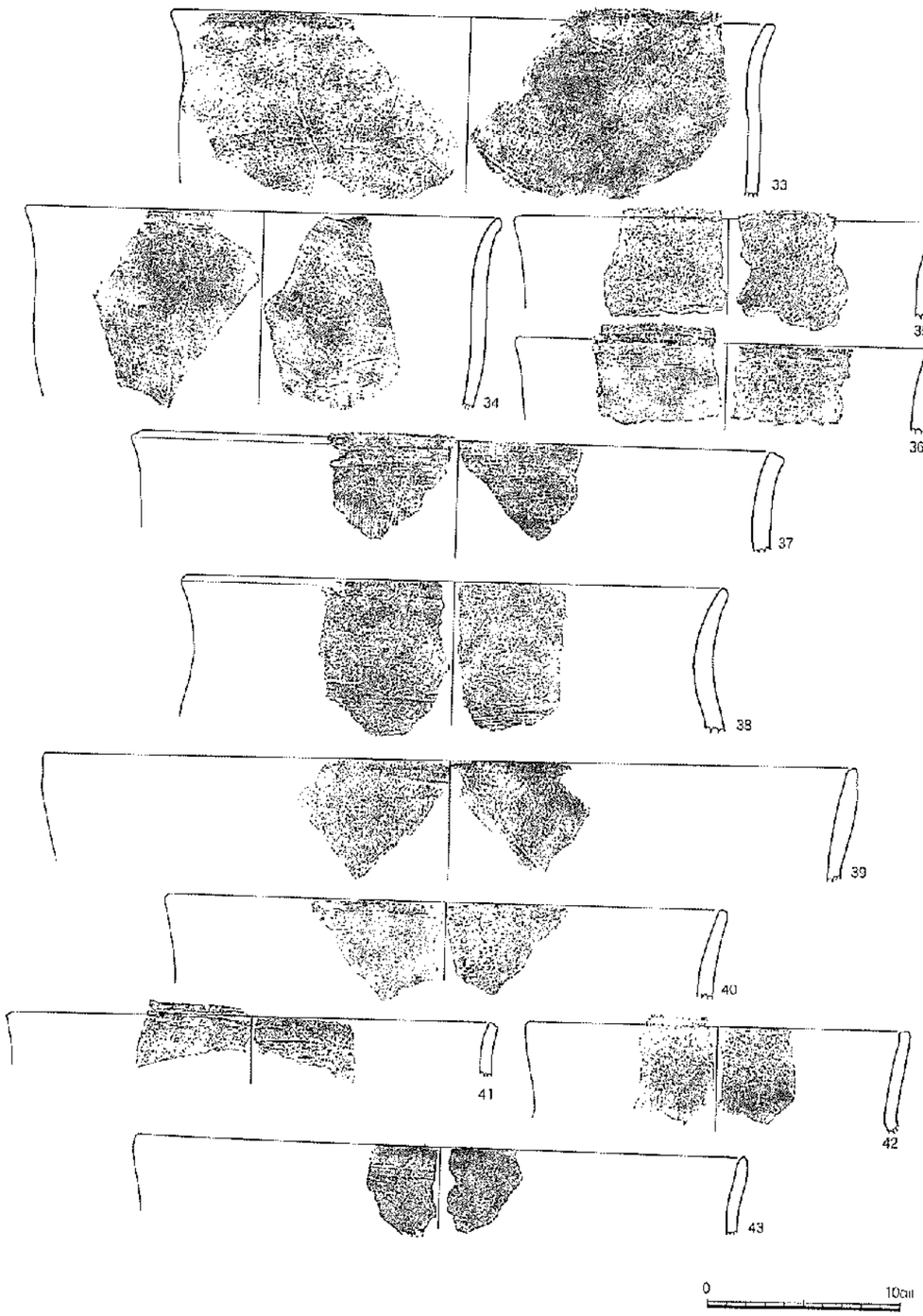
ⅢＢ－甕口－１類のうち，刻目を施さない突帯を有するものを，ⅢＢ－甕口－１ｂ類とした。９は，先端に向かってやや外反する口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が台形の突帯を１条有する。器面調整は，器内外面にナデが観察できる。１０も，先端に向かってやや外反する口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が台形の突帯を１条有する。器面調整は，器内外面ともに磨耗しており判然としない。１１も先端に向かってやや外反する口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が台形の突帯を１条有する。器面調整は，器内外面にナデが観察できる。１２は，口縁部がほぼ直立し，先端がわずかに開く。口縁部と胴部の境に，断面が台形の突帯を１条有する。器面調整は，器表面の磨耗が激しく，観察できなかった。１３は，内傾する口縁部であるが，突帯部でわずかに外反するので，この分類とした。突帯の断面は台形である。器面調整は，器内外面にナデが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類（第１１図１４～第１４図５１）

ⅢＢ－甕口－１類のうち，突帯を有しないものを，ⅢＢ－甕口－１ｃ類とした。いずれも外傾または外反する口縁部である。１５は口縁部外面に，ハケメ状原体工具による縦方向の擦過（いわゆるカキアゲ）を行うことによって胴部との境に段を有する。他にも２４・２９・３０・３７にカキアゲが観察できる。１８・１９・２１・２４・５０は，口縁部と胴部の境目に段を有する。器面調整は，内外面にナデが観察できるものが多い。



第12図　出土遺物実測図4（土器ⅢB－甕口－1c類）



第13図　出土遺物実測図4（土器ⅢB－甕口－1c類）

土器ⅢB－甕口－２a類（第１４図５２）

成川式土器の甕形土器のうち，口縁部が直立するもの，あるいは若干外反するがⅢB－甕口－１類ほどは外反しないもの，すなわち外反の程度が低いものを土器ⅢB－甕口－２類とした。その中で，刻目が施された突帯を有するものをⅢB－甕口－２a類とした。

５２は，直立する口縁部である。胴部との境に，断面が三角形の突帯を一条有するが，突帯には棒状の工具によると思われるやや太い刻目を施す。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢB－甕口－２b類（第１４図５３，５４）

ⅢB－甕口－２類のうち，刻目が施されていない突帯を有するものを，ⅢB－甕口－２b類とした。５３は，ほぼ直立し，先端部が若干外反する口縁部である。胴部との境に，断面が台形の突帯を一条有する。突帯は指により整形された，いわゆる絡状突帯である。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。５４は，若干外反するが，ほぼ直立する口縁部である。胴部との境に，断面が台形の突帯を有する。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢB－甕口－２c類（第１４図５５～第１５図５８）

ⅢB－甕口－２類のうち，突帯を有しないものをⅢB－甕口－２c類とした。いずれもほぼ直立する口縁部である。器面調整は，内外面ともにナデが観察できるものが多い。５７，５８は，口縁部外面にカキアゲが観察できる。

土器ⅢB－甕口－３a類（第１５図５９～６１）

成川式土器の甕形土器のうち，口縁部が内湾するものをⅢB－甕口－３類とした。その中で，刻目が施されている突帯を有するものを，ⅢB－甕口－３a類とした。

５９は，外傾しているが，やや内湾する口縁部である。胴部との境に断面が蒲鉾形の突帯を一条有するが，突帯には，棒状の工具によると思われる細い刻目が，斜方向に施されている。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。６０は，内湾する口縁部である。胴部との境に断面が三角形の突帯を一条有するが，突帯には，棒状の工具によると思われる細い刻目が，斜方向に施されている。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。６１はやや内湾する口縁部である。胴部との境に断面が三角形の突帯を一条有するが，突帯には，刻目が施されている。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢB－甕口－３b類（第１５図６２～６４）

ⅢB－甕口－３類のうち，刻目が施されていない突帯を有するものを，ⅢB－甕口－３b類とした。

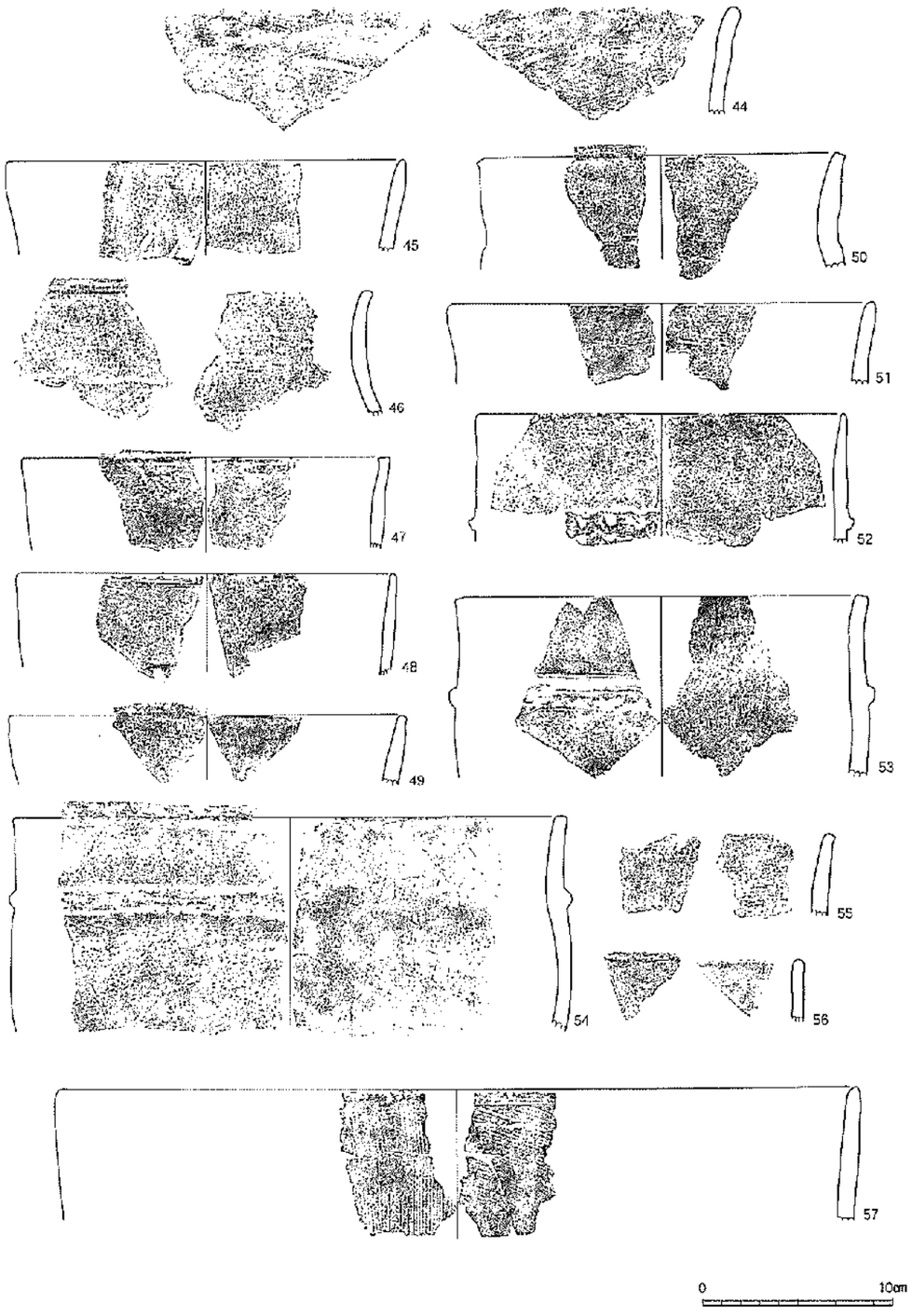
６２は内湾する口縁部である。胴部との境に，断面が台形の突帯を一条有する。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。６３・６４は，ほぼ直立するが，若干内湾する口縁部である。胴部との境に，断面が三角形の突帯を一条有する。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢB－甕口－３c類（第１５図６５～第１６図７３）

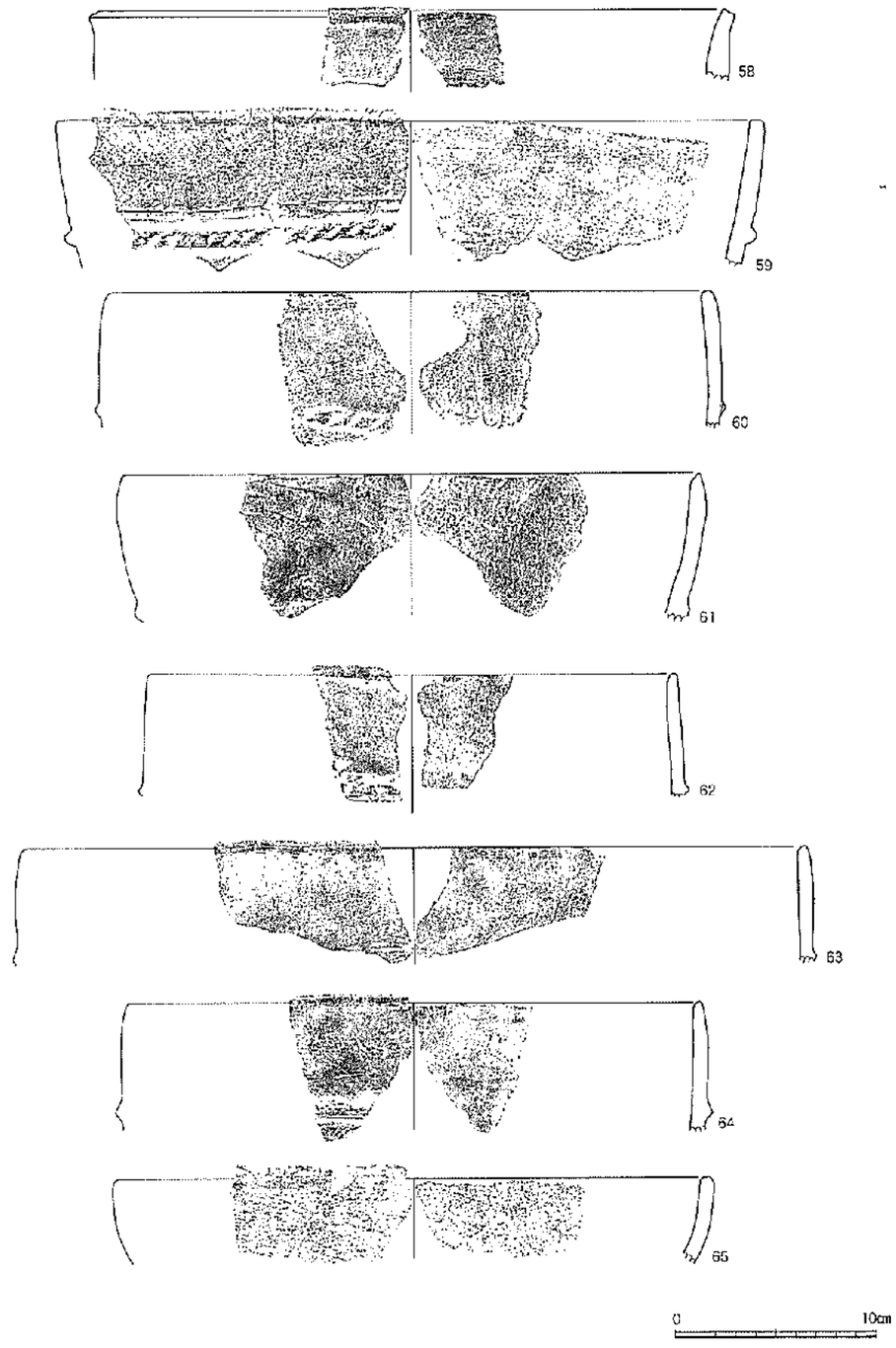
ⅢB－甕口－３類のうち，突帯を有しないものを，ⅢB－甕口－３c類とした。いずれも内湾する口縁部である。器面調整は，内外面ともにナデが観察できるものが多い。

土器ⅢB－甕胴－１a類（第１６図７４～８１）

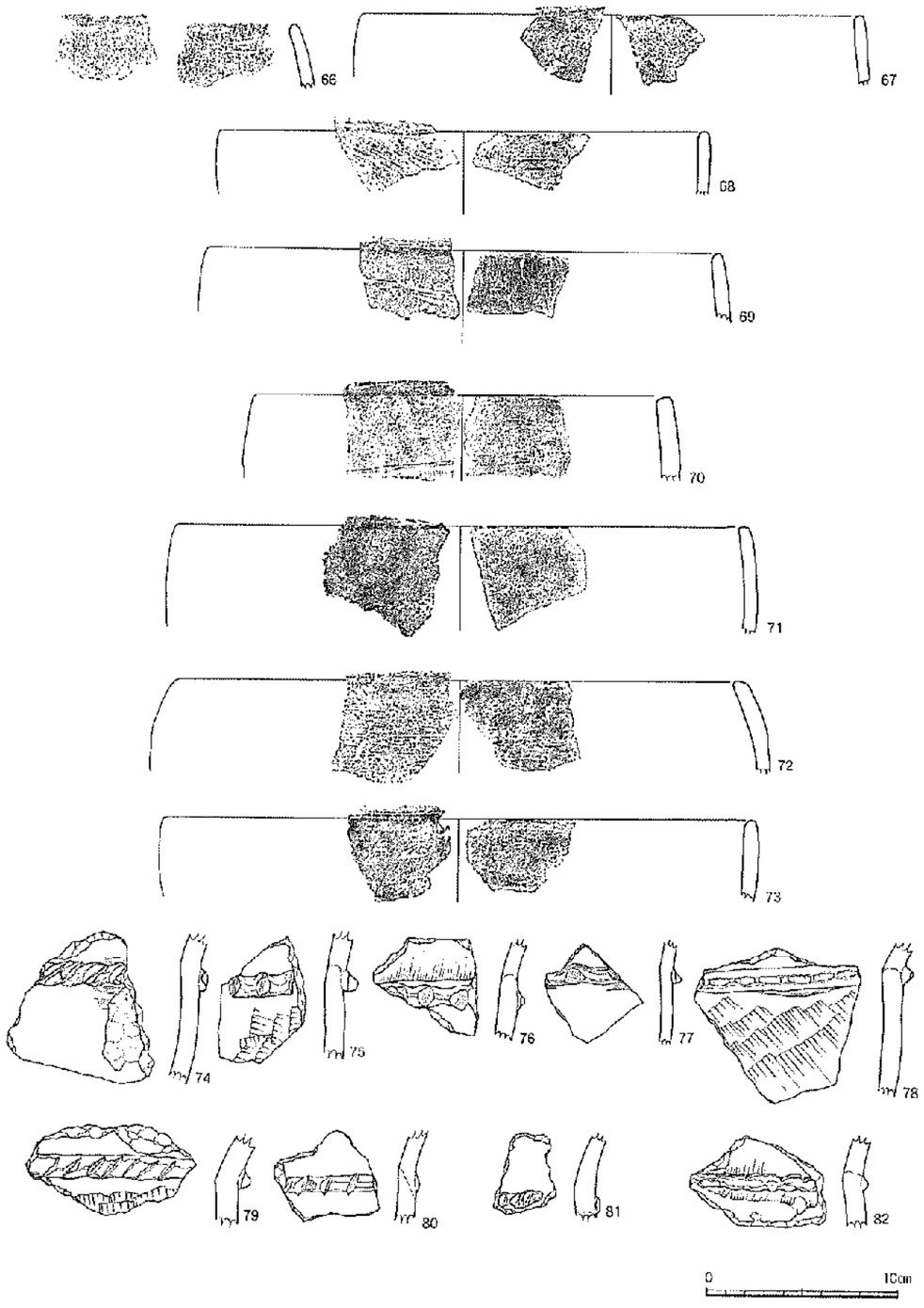
甕形土器のうち，胴部付近が残存しているものを土器ⅢB－甕胴類とした。このうち，外反もし



第14図　出土遺物実測図5（土器ⅢB－甕口－1c類～2c類）



第15図　出土遺物実測図6（土器ⅢB－甕口－2c類～3c類）



第16図　出土遺物実測図7（土器ⅢB－甕口－3c類～甕胴－1a類）

くは外傾して開く口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－１類とした。土器ⅢB－甕胴－１ａ類は，刻目が施されている突帯を有するものである。７４～７７は，いずれも，突帯に棒状の工具によると思われる刻目を施すが，刻目内に繊維圧痕が観察できる。７８は，断面が台形の突帯に，指によると思われるやや太い刻目を施す。７９～８１は，いずれも突帯に棒状の工具によると思われる刻目を施す。７９は細い刻目を斜方向に施す。

土器ⅢB－甕胴－１ｂ類（第１６図８２～第１７図８４）

刻目が施されていない突帯を有するものを，土器ⅢB－甕胴－１ｂ類とした。８２は，断面がゆるい三角形の突帯を一条有するが，突帯は指による整形がなされた絡状突帯である。８３，８４は断面が台形の突帯を一条有する。

土器ⅢB－甕胴－２ａ類（第１７図８５～９４）

土器ⅢB－甕胴類のうち，ほぼ直立する口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－２類とした。このうち，刻目が施されている突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－２ａ類とした。

８５～８８は，断面三角形ないし台形の，刻目が施されている突帯を有し，刻目内には繊維圧痕が観察できる。８７は，断面三角形の突帯を二条有するが，この二条の突帯にまたがるように刻目が施されている。９０～９４は，断面三角形または台形の突帯に，棒状の工具によると思われる刻目が施されている。９４は突帯が二条残存しているが，細い刻目が施されている。

いずれのものも，器面調整は内外面ともにナデが観察できるものが多い。

土器ⅢB－甕胴－２ｂ類（第１７図９５）

土器ⅢB－甕胴－２類のうち，刻目が施されていない突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－２ｂ類とした。

９５は，断面がゆるい三角形の突帯を一条有するが，この突帯は指による整形がなされた絡状突帯である。器面調整は内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢB－甕胴－３ａ類（第１７図９６～第１８図１４２）

土器ⅢB－甕胴類のうち，内湾する口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－３類とした。このうち，刻目が施されている突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－３ａ類とした。

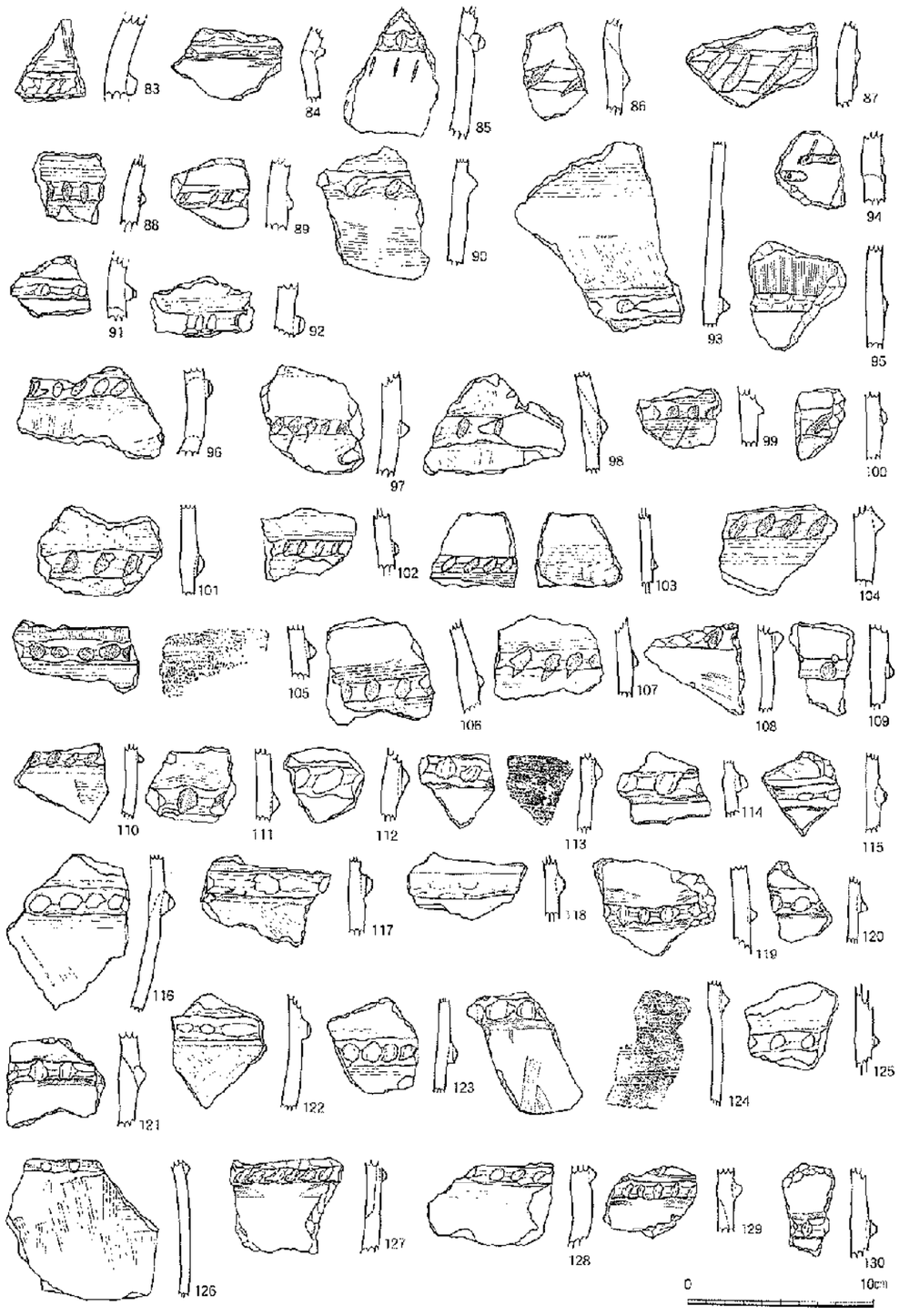
９６～１１１は，断面が三角形ないし台形の突帯を有する。突帯には棒状の工具によると思われる刻目が施されており，刻目内には繊維圧痕が観察できる。１１２～１２５は，断面が三角形または台形の突帯に，丸みを帯びたやや太い刻目が施されている。１２６～１３８は，断面が三角形または台形の突帯に，棒状の工具によると思われる細い刻目が施されている。１３９～１４２は，さらに細い原体によると思われる刻目が，斜方向に施されている。

いずれのものも，器面調整は内外面ともにナデが観察できるものが多い。

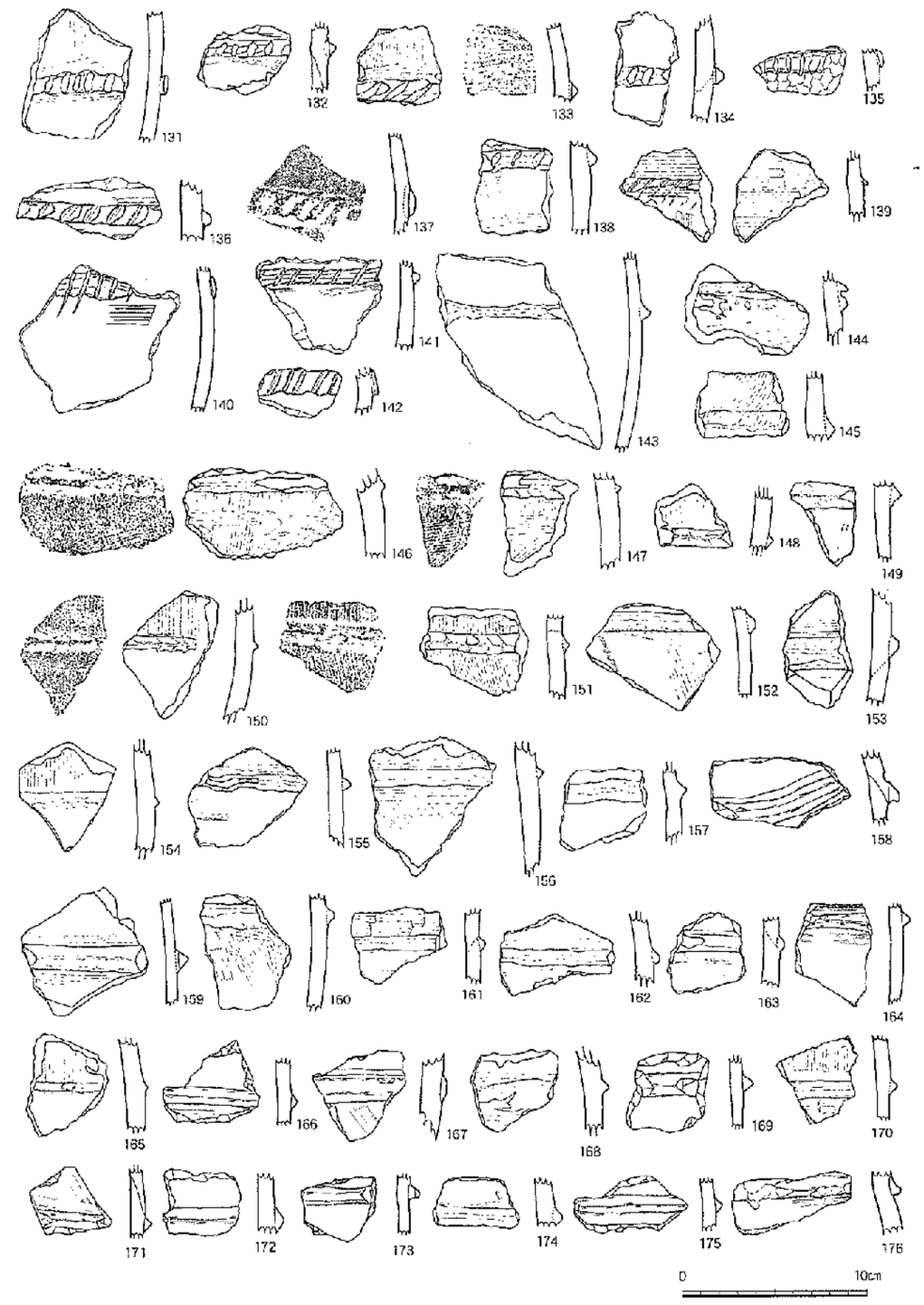
土器ⅢB－甕胴－３ｂ類（第１８図１４３～１７６）

土器ⅢB－甕胴－３類のうち，刻目を施さない突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－３ｂ類とした。

１４３～１５５は，断面がゆるい三角形の突帯を有するが，この突帯は指による整形がなされた絡状突帯である。器面調整は内外面ともにナデが観察できるものが多い。１５６～１７６は，断面が三角形または台形の突帯を有する。器面調整は内外面ともにナデが観察できるものが多い。



第17図　出土遺物実測図8（土器ⅢB－甕胴1a類～3a類）



第18図　出土遺物実測図9（土器ⅢB－甕胴3a類～3b類）

土器ⅢＢ－甕底類（第１９図１７７，１７８）

甕形土器の，底部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－甕底類とした。１７７，１７８ともに底部と脚台の境に，断面三角形の突帯を一条有する。器面調整は，いずれも器外面にハケメが観察できる。

土器ⅢＢ－甕脚類（第１９図１７９～１９２）

甕形土器の，脚台付近が残存しているものを土器ⅢＢ－甕脚類とした。１７９～１８３は，脚が先端へ向けて直線的に開き，内面天井部が若干突起する脚台である。１８４～１９２は，脚台の先端が残存しているものである。いずれも，先端へ向けて直線的に開くものと思われる。

いずれのものも，器面調整は内外面ともにナデが観察できるものが多い。

土器ⅢＢ－壺類（第１９図１９３）

１９３は壺形土器の完形品である。口縁部はくの字上に外反する。胴部との境には明確な稜線を有する。肩部は張り出さず，胴部中央付近に最大径を有する。突帯は有さない。底部は残存していないが，丸底であると思われる。器面調整は，外面にハケメ・ナデが，内面にはナデ・ハケメ・ケズリが観察できる。

土器ⅢＢ－壺頸類（第２０図１９４，１９５）

壺形土器のうち，頸部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壺頸類とした。

１９４は，外反する口縁部へ続く頸部である。胴部との境に，断面が三角形の突帯を一条有する。突帯には工具によると思われる菱形の刻目が施されている。器面調整としては，外面にナデが観察できる。１９５も，残存部は少ないが，外反する頸部と思われる。胴部との境に刻目を施さない突帯を一条有する。突帯の断面は三角形である。

土器ⅢＢ－壺胴類（第２０図１９６～２１０）

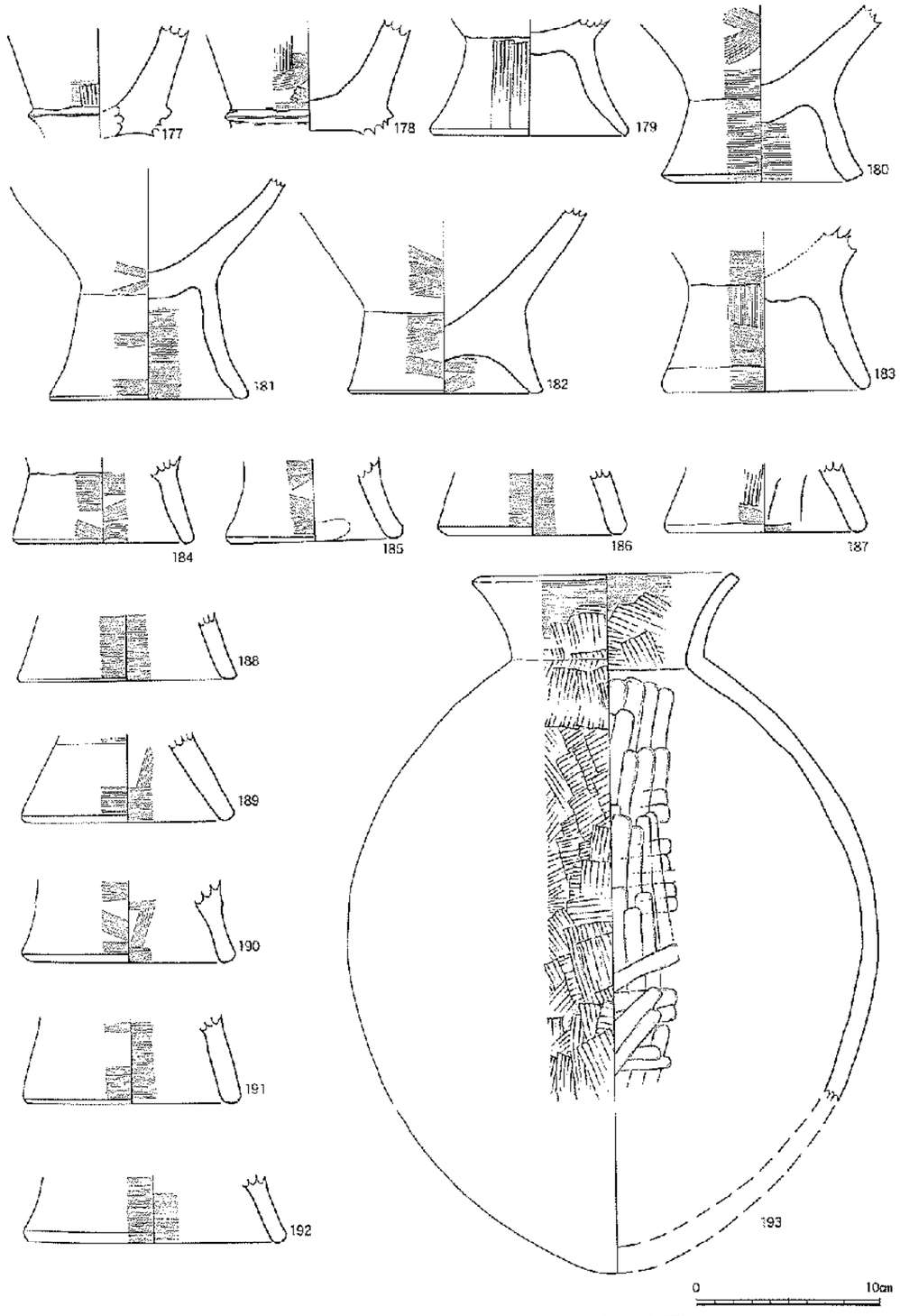
壺形土器のうち，胴部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壺胴類とした。

１９６は，肩部である。器外面に横方向のナデが観察できる。１９７～１９９は胴部片であるが，刻目が施された断面台形の突帯を一条有し，さらに刻目内には繊維圧痕が観察できる。１９８はやや幅が広い突帯で，刻目も大きい。２００～２０７は，刻目が施された突帯を有する。突帯の断面は台形または三角形である。２００は頸部付近から底部付近にかけて残存している。胴部中央付近に断面が台形の突帯を１条有するが，突帯には工具によると思われる細かい刻目が施されている。器面調整は，内外面ともにハケメ，ナデが観察できる。２０１～２０３，２０７は，工具によると思われるやや細かい丸形の刻目が施されている。２０４は，断面が台形の突帯を二条有するが，二条の突帯間に跨るように斜方向の細い刻目が施されている。２０５，２０６は断面三角形の突帯に，工具によると思われる細い突帯が，斜方向に施されている。２０８～２１０は，断面三角形の，刻目が施されていない突帯を有する。２０９，２１０の突帯は，指による整形のなされた，いわゆる絡状突帯である。

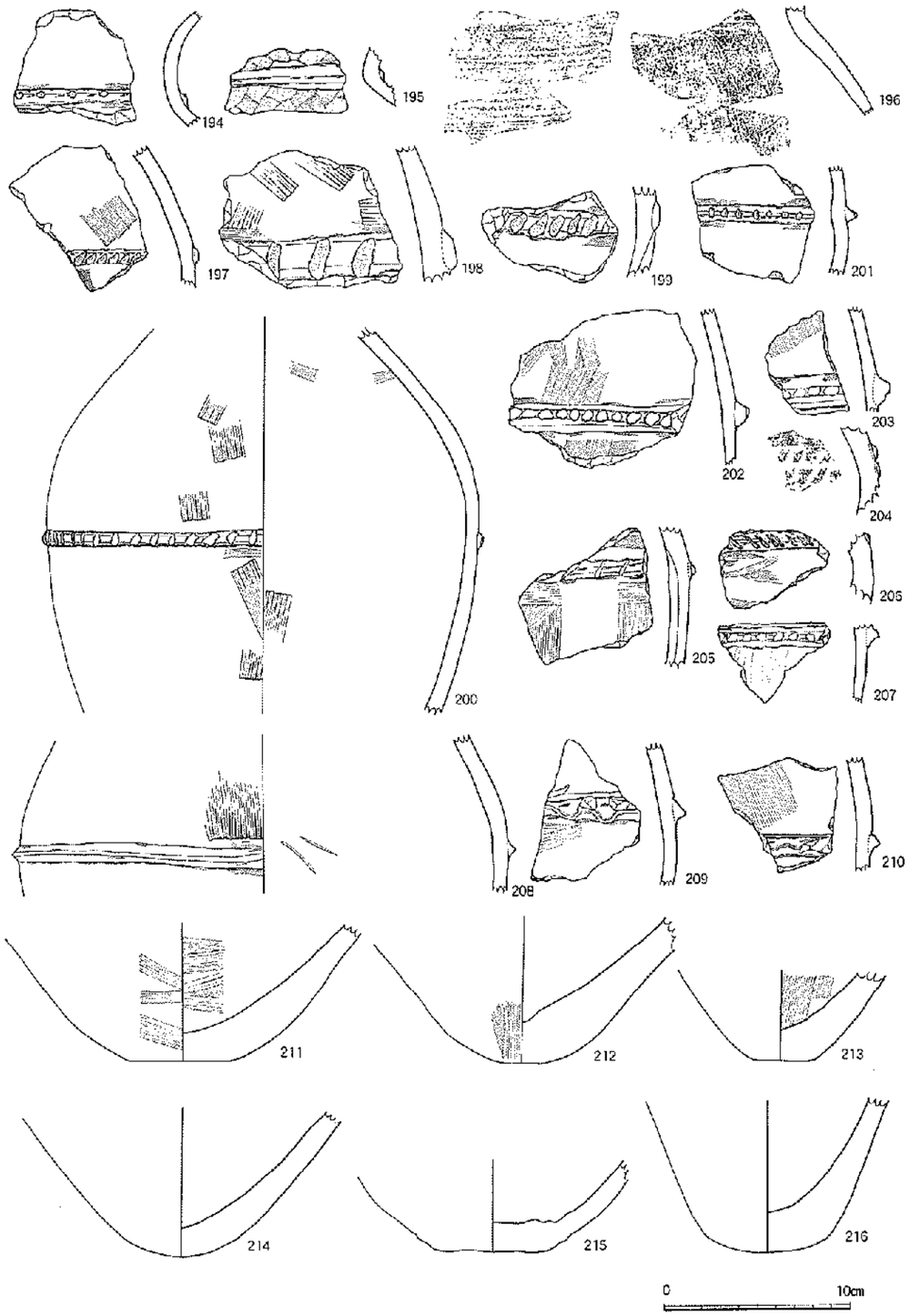
土器ⅢＢ－壺底類（第２０図２１１～２１６）

壺形土器のうち，底部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壺底類とした。

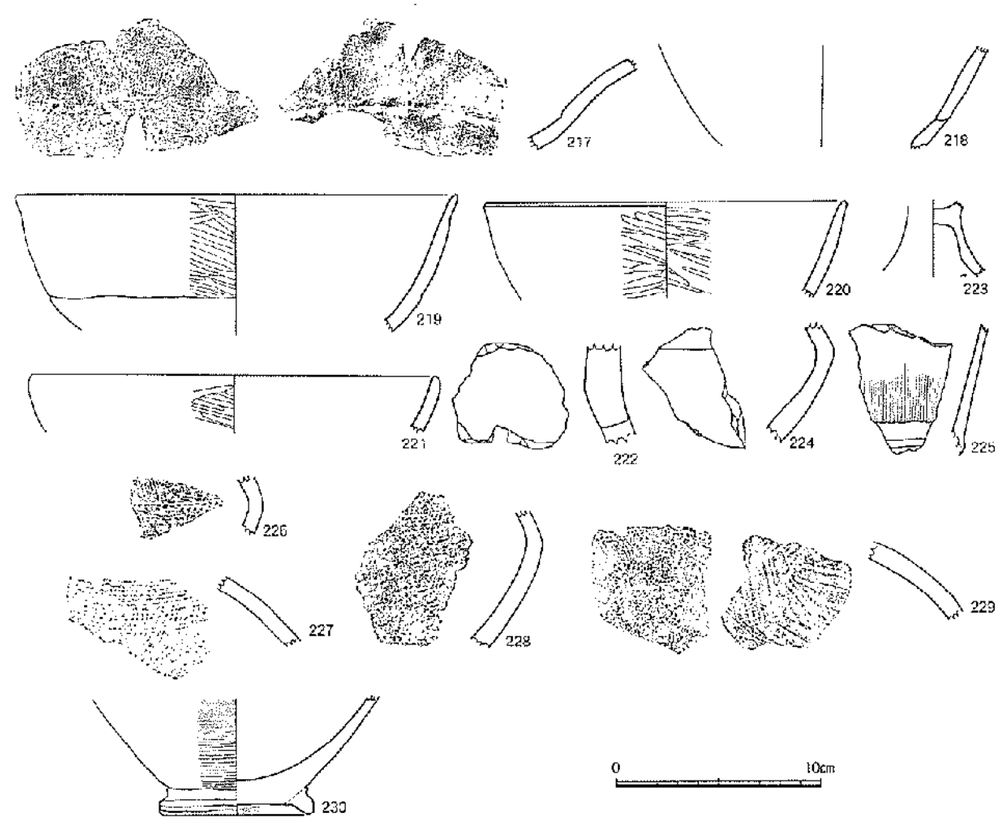
２１１，２１３，２１５は平底で，２１２，２１４は丸底で，２１６はわずかに丸みを帯びた凸レンズ状を呈する底である。器面調整は，ナデが観察できるものが多い。



第19図　出土遺物実測図10（土器ⅢＢ－甕底類～壺類）



第20図　出土遺物実測図11（土器ⅢB－壺頸類～壺底類）



第21図　出土遺物実測図12（土器ⅢB－高杯類～Ⅳ類，土師器）

土器ⅢB－高杯類（第２１図２１７～２２３）

成川式土器のうち，高杯形土器を土器ⅢB－高杯類とした。

２１７～２２１は，坏部である。２１７は坏部で，屈折して，大きく外反して開くものである。器外面にカキアゲが観察できる。２１８は若干屈折して，外傾する坏部である。２１９は坏部下方に段を有し，段部には明確な稜線を有する。外面が研磨されている。２２０，２２１は内湾する口縁部である。外面は研磨されている。２２２・２２３は脚部である。２２２は，ややいびつな円孔を有する。２２３は，中空の脚部である。

土器ⅢB－坩類（第２１図２２４，２２５）

成川式土器のうち，坩形土器を土器ⅢB－坩類とした。

２２４は，ソロバン状に大きく張り出す胴部である。最大径部で大きく「くの字状」に屈曲するが，屈曲部には明確な稜線を有する。２２５はやや外傾する頸部である。胴部との境に，断面三角形の突帯を一条有する。頸部外面は，カキアゲ状に縦方向のハケメが観察できる。

土器Ⅳ類（第２１図２２６～２２９）

土器片であるが，施されている沈線文より，いわゆる免田式土器と思われるものを土器Ⅳ類とし

た。いずれも，長い頸部と，ソロバン状の胴部を有すると思われるもので，沈線文が施された胴部付近が残存している。

２２６は横位の沈線の上位に，重弧文が施されている。２２７は，横位の沈線が数条施され，その下位に重弧文が鋸歯状に向かい合って施されている。２２８は，横位の沈線の上位に，重弧文が施されている。２２９は，円形の沈線文からなる文様を施す。

２　土師器（第２１図２３０）

第３地点より土師器が１点のみ出土した。２３０は底部付近及び高台が残存しているもので，いわゆる内黒土師器である。

〔第Ⅳ章　引用・参考文献〕

中　村　直　子　１９８７　「成川式土器再考」　『鹿大考古』６：５７－５６

第3表　横道遺跡出土遺物観察表1

※胎土のS・C・K・U・Sはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	焼成	備考
10	1	3			甕		S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ヘラナデ	ヘラナデ	良	刻目に組織痕
10	2	3			甕	口縁部～底部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ヘラナデ	ナデ	良	
10	3	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部～胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯，ヘラナデ	ナデ	良	
10	4	3			甕	口縁部～底部	S・C・K	明茶褐色	突帯，ヘラナデ		良	
10	5	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部～底部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ヘラナデ	ヘラナデ	良	
10	6	3	D－8	Ⅲa	甕	口縁部～底部	S・C・K	暗茶褐色	突帯，ヘラナデ	ナデ	良	
11	7	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	明茶褐色	刻目突帯，ナデ	ハケメ	良	
11	8	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯ハケメ，ヘラナデ	ナデ	良	
11	9	2	D－13	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
11	10	2	E－8	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	明赤褐	突帯		良	
11	11	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	ヘラナデ	ナデ	良	
11	12	2	D－13	Ⅲb	甕	口縁部						
11	13	2	D－13	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
11	14	3	C－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
11	15	2	C－12	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	黒褐	ナデ，擦過いわゆ	ヘラナデ	良	
11	16	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	赤褐	ナデ	ナデ	良	
11	17	3	E－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
11	18	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	灰黄褐	ナデ	ナデ	良	
11	19	3	C－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	20	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	
12	21	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	22	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	にぶい褐	ナデ	ナデ	良	
12	23	2	C－12	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	24	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	
12	25	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	26	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗橙褐色	ヘラナデ	ケズリ	良	
12	27	2	D－12	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	28	2	C－13	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
12	29	2	D－12	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	
12	30	2	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	

第4表　横道遺跡出土遺物観察表2

※胎土のS・C・K・U・Sはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	焼成	備考
12	31	2	C－12	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
12	32	2	C－12	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	褐	ナデ	ナデ	良	
13	33	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	黒褐	ナデ	ナデ	良	
13	34	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
13	35	3	D－12	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	黒茶褐色	ナデ	ナデ	良	
13	36	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
13	37	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	
13	38	2	D－7	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	にぶい橙	ナデ	ナデ	良	
13	39	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	黒褐色	ナデ	ナデ	良	
13	40	2	C－12	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
13	41	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
13	42	2	E－7	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	橙	ナデ	ナデ	良	
13	43	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	44	3	D－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	45	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	46	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	47	2	C－12	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	48	3	C－9	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	黒茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	49	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	50	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	灰黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	51	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	52	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	灰黄茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
14	53	3	E－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	突帯，ナデ	ハケメ	良	
14	54	2	D－13	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	暗黄茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
14	55	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	黒茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	56	3	C－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
14	57	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ，カキアゲ	ハケメ	良	
15	58	2	C－12	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	
15	59	2	C－13	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
15	60	2	C－13	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
15	61	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	にぶい橙	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
15	62	3	D－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
15	63	2	C－13	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
15	64	2	E－8	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
15	65	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
16	66	3	C－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	67	3	C－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗橙褐色	ナデ	ナデ	良	
16	68	3	C－9	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	69	2	D－13	Ⅲb	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	70	2	C－13	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ハケメ	ナデ	良	
16	71	3	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	72	3	E－8	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	73	2	C－12	Ⅲ	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
16	74	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ナデ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	75	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ		良	刻目に組織痕
17	76	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	77	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	78	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	79	3	E－7	Ⅱ	甕	頸部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
17	80	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ヘラナデ		良	

第5表　横道遺跡出土遺物観察表3

※胎土のS・C・K・U・Sはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	残存	備考
17	81	3	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	82	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黒茶褐	突帯，ナデ	ハケメ	良	絡状突帯
17	83	3	E－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黒茶褐	突帯，ナデ	ナデ	良	
17	84	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯，ナデ	ハケメ	良	
17	85	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	86	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	87	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	88	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	89	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	90	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	91	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	92	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
17	93	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	94	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯	ナデ	良	
17	95	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	絡状突帯
17	96	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	97	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	98	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	99	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	100	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	101	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	102	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	103	2	D－12	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	104	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	105	2	B－13	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ハケメ	ケズリ	良	刻目に組織痕
17	106	2	C－2	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	107	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	108	2	B－12	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	109	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯	ナデ	良	刻目に組織痕
17	110	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	刻目に組織痕
17	111	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤橙色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	刻目に組織痕
17	112	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	113	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯	ケズリ	良	
17	114	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯，ナデ	ハケメ	良	
17	115	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	116	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
17	117	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	118	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ナデ	ケズリ	良	
17	119	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	120	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	121	3	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	122	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
17	123	3	B－10	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
17	124	2	D－12	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯，ナデ	ケズリ	良	
17	125	3	B－10	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
17	126	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K・U	黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
17	127	2	D－12	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	128	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
17	129	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
17	130	3	C－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K・U	暗黄茶褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	

第6表　横道遺跡出土遺物観察表4

※胎土のS・C・K・U・Sはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	残存	備考
18	131	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
18	132	3	C－10	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
18	133	3	B－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黄褐色	刻目突帯，ハケメ	ケズリ	良	
18	134	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
18	135	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯	ナデ	良	
18	136	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	137	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
18	138	3	E－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯，ナデ	ナデ	良	
18	139	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	140	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	141	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯，ハケメ	ナデ	良	
18	142	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	刻目突帯	ナデ	良	
18	143	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	突帯		良	絡状突帯
18	144	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	絡状突帯
18	145	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯，ハケメ		良	絡状突帯
18	146	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰黒褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	絡状突帯
18	147	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	絡状突帯
18	148	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	絡状突帯
18	149	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	突帯，ナデ		良	絡状突帯
18	150	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯，ハケメ		良	絡状突帯
18	151	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯，ハケメ		良	絡状突帯
18	152	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	突帯，ナデ		良	絡状突帯
18	153	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	突帯，ナデ		良	絡状突帯
18	154	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	茶褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	絡状突帯
18	155	3	C－9	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯，ハケメ		良	絡状突帯
18	156	3	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	157	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯，ナデ		良	
18	158	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	突帯，ナデ		良	
18	159	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡白茶色	突帯，ナデ		良	
18	160	2	C－12	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	161	2	D－13	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	淡灰褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	
18	162	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯，ナデ	ナデ	良	
18	163	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	突帯，ナデ		良	
18	164	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	突帯，ナデ	ハケメ	良	
18	165	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黒褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	
18	166	2	E－8	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	突帯，ナデ		良	
18	167	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯，ナデ		良	
18	168	3	E－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰褐色	突帯，ナデ		良	
18	169	3	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	170	2	C－13	Ⅲb	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
18	171	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	突帯，ナデ	ハケメ	良	
18	172	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K・U	暗黄茶褐色	突帯	ナデ	良	
18	173	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	突帯		良	
18	174	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯，ナデ		良	
18	175	3	C－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	突帯	ハケメ	良	
18	176	3	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶色	突帯，ナデ		良	
19	177	2	C－12	Ⅲb	甕	底部	S・C・K	淡黄茶褐色	ナデ，突帯		良	
19	178	2	E－8	Ⅲ	甕	底部	S・C・K	暗黄茶褐色	ナデ，突帯		良	
19	179	3	C－9	Ⅲa	甕	脚台	S・C・K	橙褐色	ナデ		良	
19	180	3	E－8	Ⅲa	甕	脚台	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	

第7表　横道遺跡出土遺物観察表5

※胎土のS·C·K·U·Sはそれぞれ S=石英, C=長石, K=角閃石, U=雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	焼成	備考
19	181	3	E−8	Ⅲ	甕	脚台	S·C·K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	182	3	D−8	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	183	3	D−8	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗茶褐色	ナデ		良	
19	184	2	C−12	Ⅲb	甕	脚台	S·C·K	淡黄茶褐色	ナデ		良	
19	185	3	B−9	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ	指による押圧	良	
19	186	3	D−1	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	187	3	E−8	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	188	2	C−12	Ⅲb	甕	脚台	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	189	3	D−7	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗黄褐色	ナデ	ナデ	良	
19	190	3	E−8	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	191	3	E−7	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	淡黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
19	192	3	B−9	Ⅲa	甕	脚台	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ	指による押圧	良	
19	193	3		Ⅲ	壺		S·C·K	淡茶褐色	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ, ケズリ	良	
20	194	3	E−7	Ⅲa	壺	頸部	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ		良	
20	195	2	C−12	Ⅲb	壺	頸部	S·C·K	淡赤茶褐色	突帯		良	
20	196	2	D−12	Ⅲb	壺	胴部	S·C·K	暗茶褐色	ナデ		良	
20	197	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗黄茶褐色	刻目突帯, ナデ		良	刻目に組織痕
20	198	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K·U	暗黄茶褐色	刻目突帯, ハケメ		良	刻目に組織痕
20	199	3	E−8	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡赤茶褐色	刻目突帯, ナデ	ケズリ	良	刻目に組織痕
20	200	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗黄茶褐色	刻目突帯, ハケメ		良	
20	201	2	C−12	Ⅲ	壺	胴部	S·C·K	淡茶褐色	ナデ		良	
20	202	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗黄茶褐色	刻目突帯, ハケメ	ケズリ	良	
20	203	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡茶褐色	刻目突帯, ナデ		良	
20	204	3	B−9	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	赤茶褐色	刻目突帯	ケズリ	良	
20	205	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡黄茶褐色	刻目突帯, ナデ		良	
20	206	3	E−8	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡赤茶褐色	刻目突帯, ナデ		良	
20	207	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡赤茶褐色	刻目突帯, ナデ		良	
20	208	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗赤茶褐色	突帯, ハケメ		良	
20	209	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	淡赤茶褐色	突帯, ナデ		良	縄状突帯
20	210	3	D−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗黄茶褐色	突帯, ナデ		良	縄状突帯
20	211	3	E−8	Ⅲa	壺	底部	S·C·K	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
20	212	2	B−12	Ⅲ	壺	底部	S·C·K	黄茶褐色	ナデ		良	
20	213	2	C−7	Ⅲ	壺	底部	S·C·K	暗黄茶褐色		ハケメ	良	
20	214	2	C−12	Ⅲb	壺	底部	S·C·K	黄茶褐色			良	
20	215	3	E−7	Ⅲa	壺	底部	S·C·K	暗赤茶褐色			良	
20	216	3	D−8	Ⅲa	壺	底部	S·C·K	黄茶褐色			良	
20	217	3	D−7	Ⅲa	高杯	坏部	S·C·K	淡橙褐色	磨滅		良	
20	218	3	C−8	Ⅲa	高杯	坏部	S·C·K	淡白茶褐色			良	
20	219	3	C−9	Ⅲa	高杯	坏部	S·C·K	赤褐色	ミガキ		良	
20	220	3	C−9	Ⅲa	高杯	坏部	S·C·K	赤褐色	ミガキ		良	
20	221	3	C−8	Ⅲa	高杯	坏部	S·C·K	赤褐色	ミガキ		良	
20	222	2	C−12	Ⅲb	高杯	脚部	S·C·K	橙褐色			良	
20	223	2	C−12	Ⅲb	高杯	脚部	S·C·K	淡橙褐色			良	
20	224	3	E−7	Ⅲa	坩	胴部	S·C·K	橙褐色			良	
20	225	3	E−7	Ⅲa	坩	胴部	S·C·K	淡橙褐色	ハケメ		良	
20	226	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗橙褐色	沈線文		良	免田式
20	227	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗橙褐色	沈線文		良	免田式
20	228	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗橙褐色	沈線文		良	免田式
20	229	3	E−7	Ⅲa	壺	胴部	S·C·K	暗黄茶褐色	沈線文	ナデ	良	免田式

第8表　横道遺跡出土土師器観察表

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	焼成	備考
20	230	3	B−7/10	Ⅲa	鉢	底部, 高台		淡茶褐色	ナデ, ケズリ		良	内黒土師器

第Ⅴ章　第４地点の発掘調査

第１節　発掘調査の概要

第４地点及び第５地点の一部についての発掘調査は，平成７年度に実施した。第４地点及び第５地点の一部についての発掘調査は，平成７年５月８日から平成７年６月１３日まで行った。しかし，第５地点からは遺構及び遺物については検出されなかったので，本章での記述は割愛する。

発掘調査は，調査対象区域内に，２０ｍ×２０ｍのグリッドを設定し，重機を使用して表土を削除した後，作業員の手掘りで行った。（５頁第１図参照）。

第２節　遺構

第４地点からは，特に遺構は確認されなかった。

第３節　出土遺物

横道遺跡第４地点からは，縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物が出土した。出土した遺物の大半を占めるのは，いわゆる「成川式土器」であり，中には完形のものも含まれる。他には，僅かに縄文時代晩期の土器が４点，古墳時代のものと思われる鉄器が３点出土したのみである。第Ⅴ章でも，第Ⅳ章に従い，形態や器種による分類に従って記述を行った。出土した地層は第３地点，第２地点と同様Ⅲａ層である。

１　縄文時代晩期の土器（土器Ⅲ類　第２４図２３１〜第２５図２３５）

縄文時代晩期の土器がわずかに出土している。それらのうち，いわゆる黒川式土器に分類されると思われるものを土器Ⅰ類，繊維圧痕の見られる土器を土器Ⅱ類とした。

土器Ⅰ類（第２４図２３１，第２５図２３２）

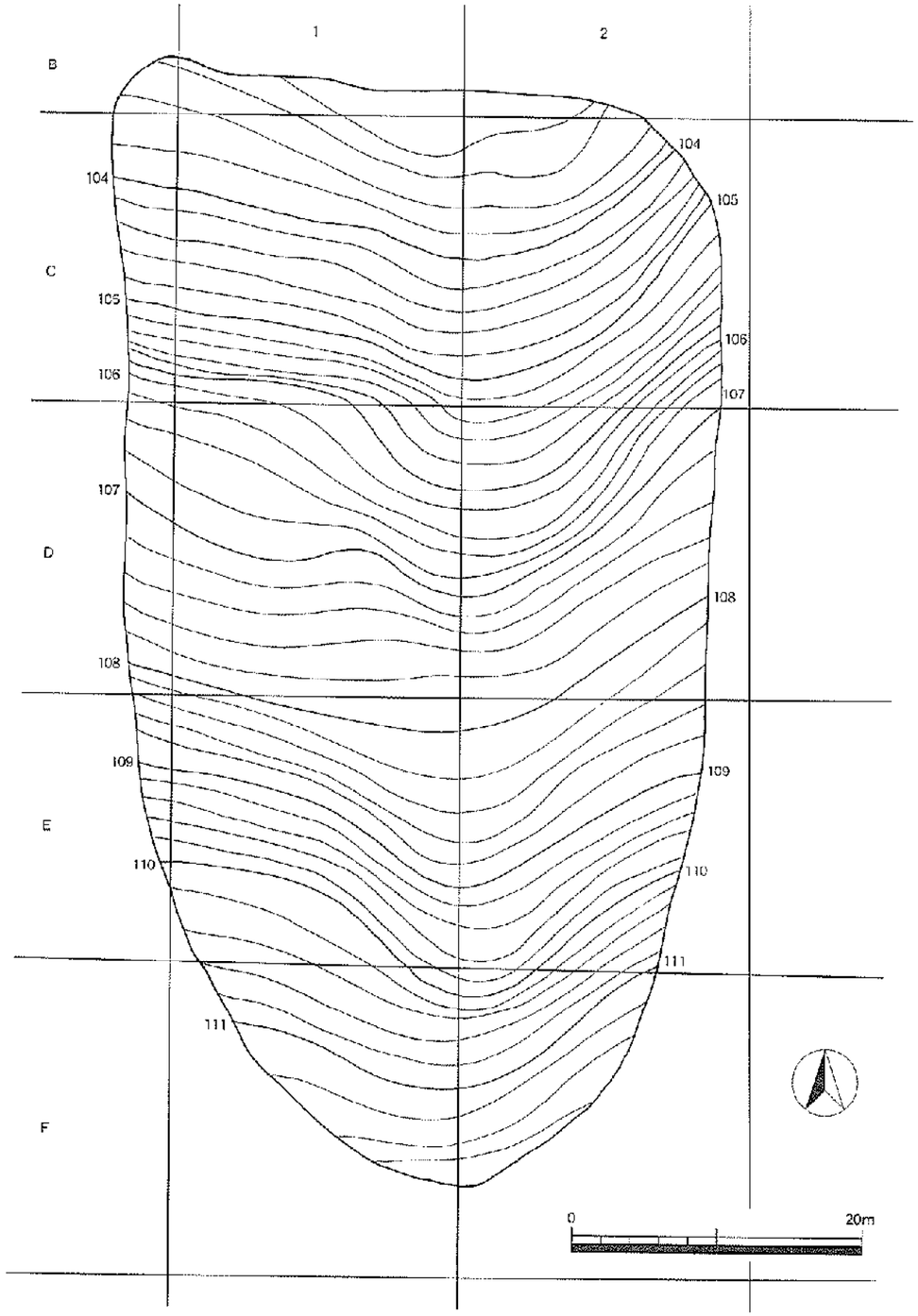
いわゆる黒川式土器に分類されると思われるものを，土器Ⅰ類とした。

２３１は，浅鉢形土器である。胴部より外傾して大きく開く口縁部には，リボン状の突起を有する。口縁端部よりすぐ下位に，口縁部に沿って一条の沈線が廻る。胴部と口縁部の境には段を有するが，段部には沈線が一条施されており，口縁部と胴部の境を明瞭なものにしている。底部は平底で，底部に沿って一条の沈線が廻る。表面は磨耗が激しく，図化できるほどではないが，研磨痕が確認でき，精製のものであったことがわかる。

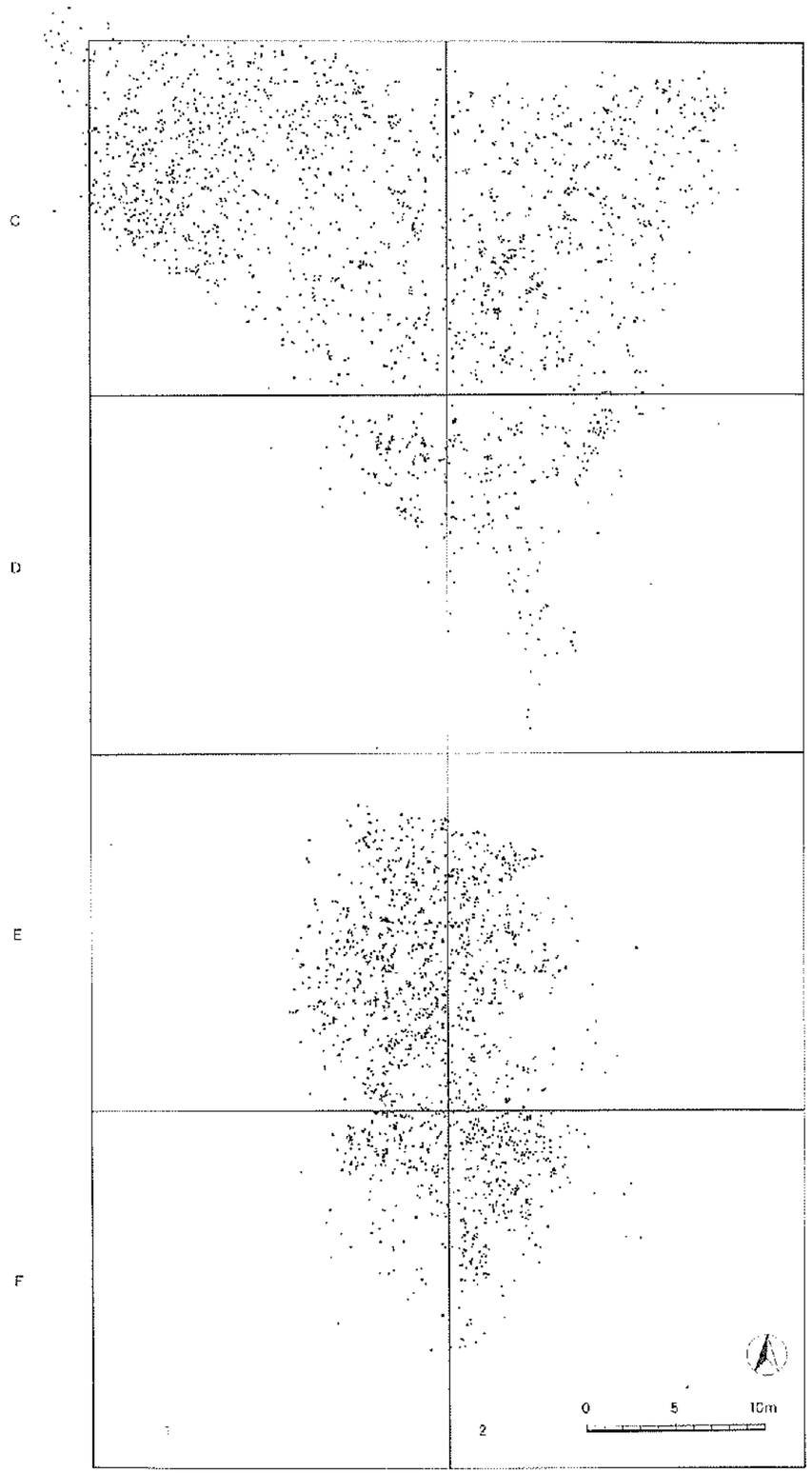
２３２も２３１と同様に精製浅鉢形土器である。２３２より小形で，こちらは器表面に研磨痕が明確に観察でき，精緻な仕上がりである。胴部中央で大きく「くの字状」に屈曲して，外反する口縁部へと続く。この屈曲部には明確な稜線を有する。わずかに口径のほうが胴径より大きい。口縁端部は欠損しているが，２３２と同様リボン状の突起があったものと思われる。底部は平底であるが，凸レンズ状に若干丸みを帯びている。

土器Ⅱ類（第２５図２３２，２３３）

縄文時代晩期の土器と思われる土器で，繊維圧痕の観察できるものを土器Ⅱ類とした。

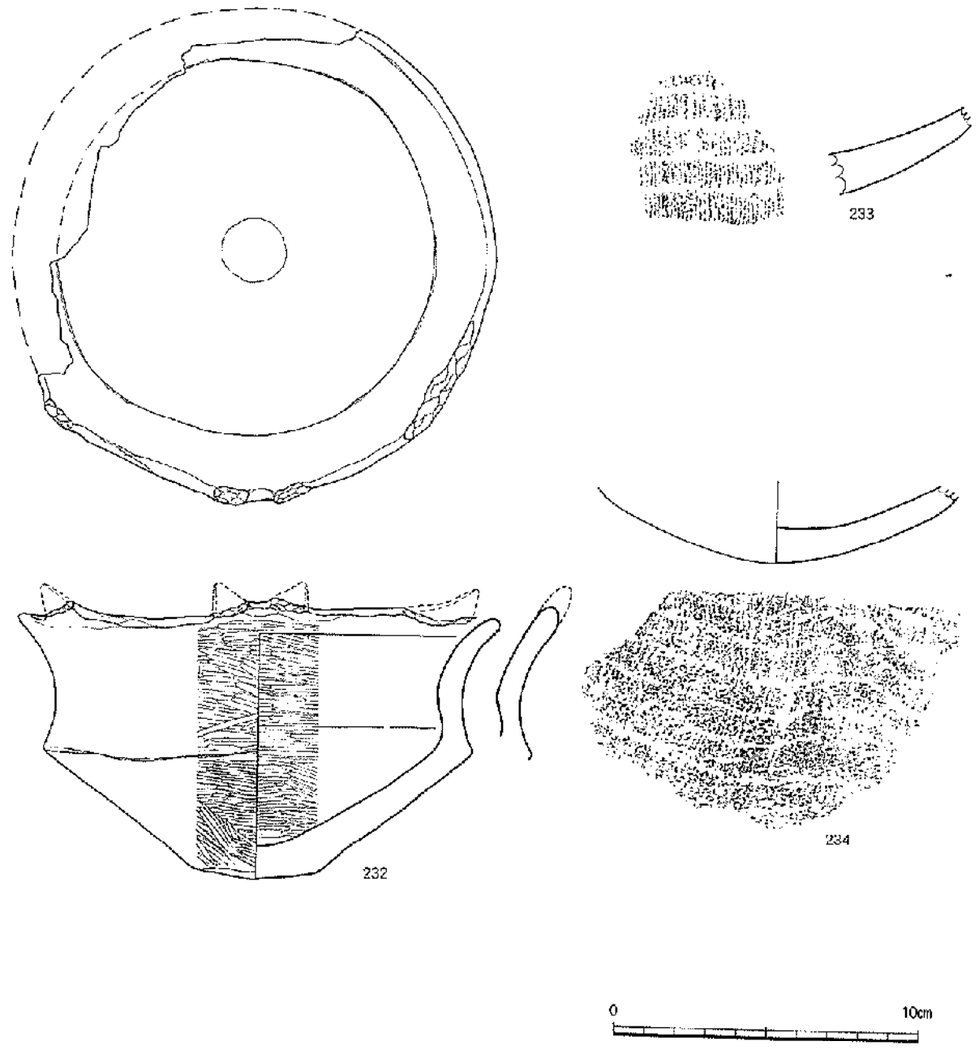


第22図　第4地点Ⅳ層上面の地形



第23図　第4地点遺物出土状況図

第24図　出土遺物実測図13（土器Ⅰ類）



第25図　出土遺物実測図14（土器Ⅰ，Ⅱ類）

２３３は，詳細な形態は不明であるが胴部から底部にかかる部分と思われる。２３４は，凸レンズ状に丸みを帯びた底部である。２３３，２３４ともに，外面にアンギン風の編み布を押圧している。編布は，約８mm間隔の縦糸で編み込まれている。

２　古墳時代の土器（第２６図２３５～第３３図４２５）

第３地点，第２地点と同様第４地点においても主体となる土器は，弥生時代後半から古墳時代にかけて使用された，いわゆる成川式土器である。成川式土器は，土器Ⅲ類と分類した。本報告書作成に関しては，中村直子氏の研究を参考としたが（中村，１９９４），形態や器種に関する用語等は，中村の研究・用語を参考・引用として，以下記述を行っていくことにする。なお，記述に整合性を

もたせる意味合いから，第Ⅳ章の内容に沿って分類を試みた。

土器ⅢＢ－甕口－１ａ類（第２６図２３５）

甕形土器の中で，口縁部付近が残存しているものをⅢＢ－甕口類とし，さらに，口縁部が外反するもの，または口縁部が大きく外傾して開くものをⅢＢ－甕口－１類とした。さらにその中で，胴部との境に突帯を有し，その突帯に刻目が施されているものを，ⅢＢ－甕口－１ａ類とした。

２３５は，突帯部で大きく屈曲し，先端に向かって開く口縁部である。口縁部と胴部の境に，断面が三角形の突帯を１条有するが，突帯には工具によると思われる楕円形の刻目を施す。器面調整は，器外面にハケメが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－１ｂ類（第２６図２３６）

ⅢＢ－甕口－１類のうち，刻目を施さない突帯を有するものを，ⅢＢ－甕口－１ｂ類とした。

２３６は，外反する口縁部から胴部付近が残存しているものである。口縁部と胴部の境に，断面がゆるい台形の突帯を１条有する。器面調整は，器内外面にナデが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－１ｃ類（第２６図２３７～第２９図２８２）

ⅢＢ－甕口－１類のうち，突帯を有しないものを，ⅢＢ－甕口－１ｃ類とした。いずれも外傾または外反する口縁部である。

２３７は，口縁端部下位に，器壁を貫通する孔が穿たれているが，補修孔と思われる。２３８は口縁部外面に，ハケメ状原体工具による縦方向の擦過（いわゆるカキアゲ）を行うことによって胴部との境に段を有する。他にも２５２にカキアゲが観察できる。器面調整は，内外面にナデが観察できるものが多い。

土器ⅢＢ－甕口－２ｂ類（第２９図２８３～２８５）

成川式土器の甕形土器のうち，口縁部が直立するもの，あるいは若干外反するがⅢＢ－甕口－１類ほどは外反しないもの，すなわち外反の程度が低いものを土器ⅢＢ－甕口－２類とした。その中で，刻目が施されていない突帯を有するものをⅢＢ－甕口－２ｂ類とした。

２８３～２８５は，いずれも口縁部と胴部との境に，断面が台形の突帯を一条有する。器面調整は，いずれも内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－２ｃ類（第２９図２８６～第３０図２８９）

ⅢＢ－甕口－２類のうち，突帯を有しないものをⅢＢ－甕口－２ｃ類とした。いずれもほぼ直立する口縁部である。器面調整は，内外面ともにナデが観察できるものが多い。

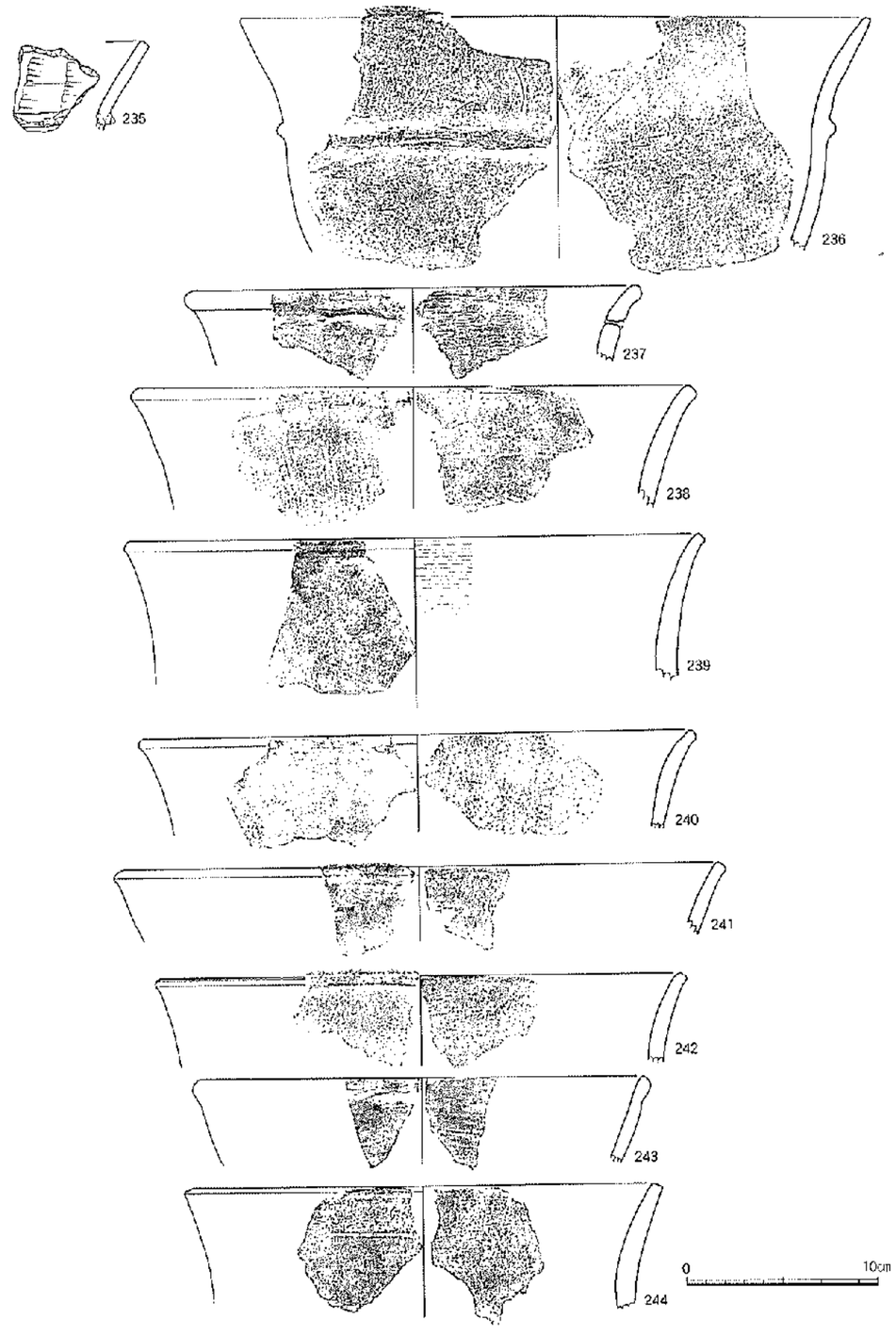
土器ⅢＢ－甕口－３ｂ類（第３０図２９０，２９１）

甕形土器のうち，口縁部が内湾するものをⅢＢ－甕口－３類とした。その中で，刻目が施されていない突帯を有するものを，ⅢＢ－甕口－３ｂ類とした。

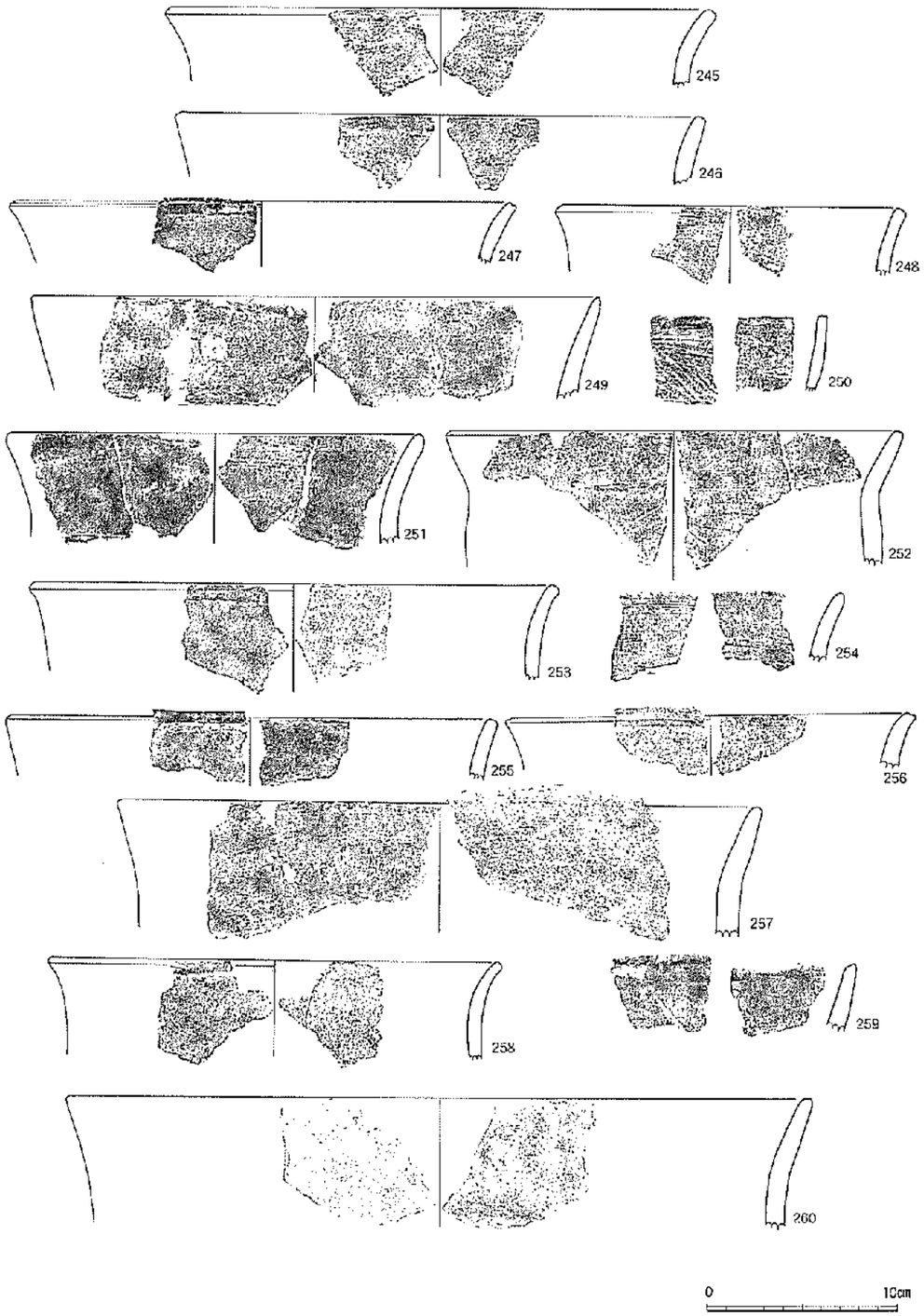
２９０は，口縁部と胴部との境に，断面三角形の突帯を一条有する。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。２９１は，ほぼ直立するが，端部が若干内湾する口縁部である。胴部との境に，断面が台形の突帯を一条有する。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢＢ－甕口－３ｃ類（第３０図２９２，２９３）

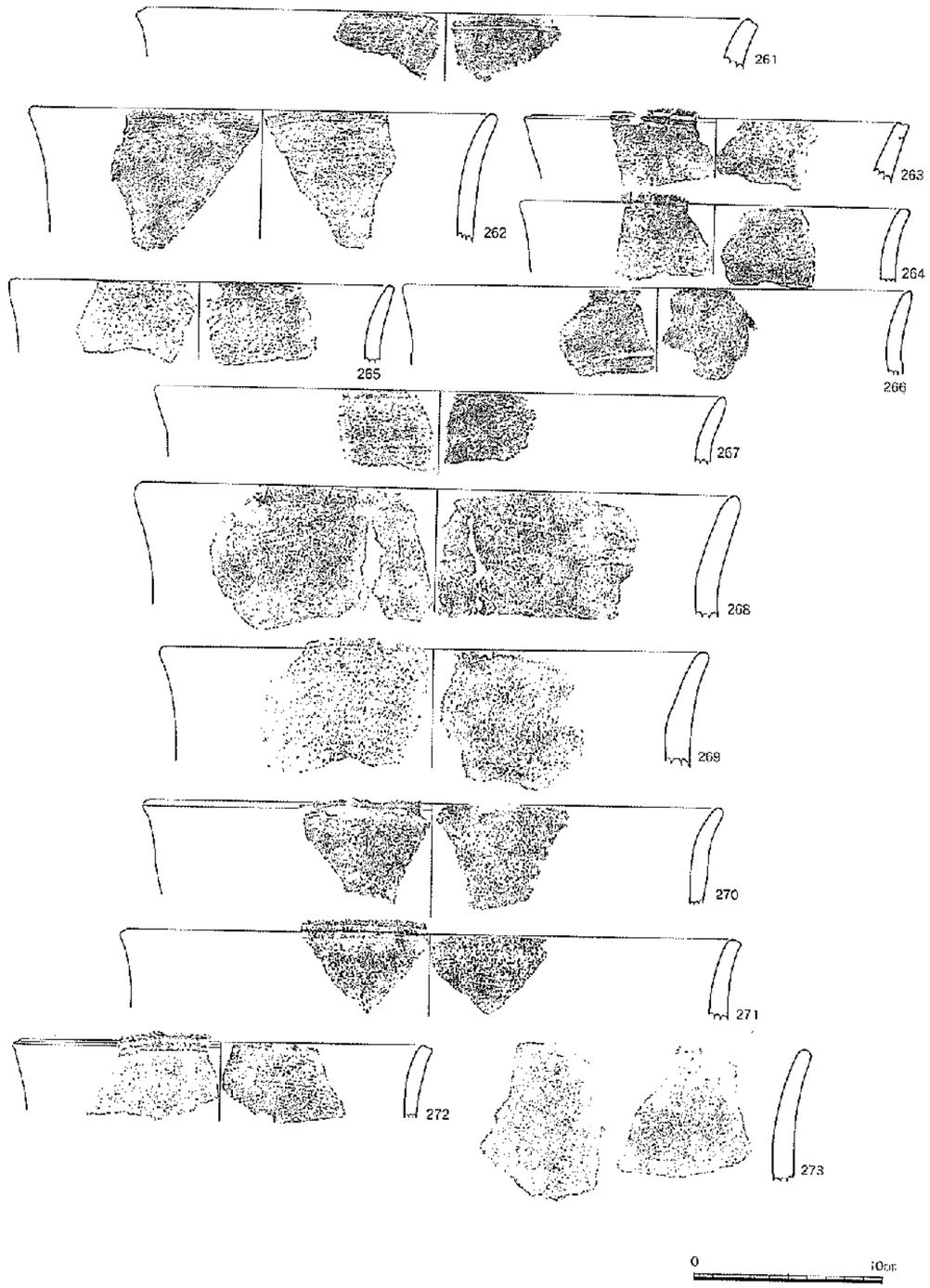
ⅢＢ－甕口－３類のうち，突帯を有しないものを，ⅢＢ－甕口－３ｃ類とした。いずれも内湾する口縁部である。器面調整は，いずれも内外面ともにナデが観察できる。



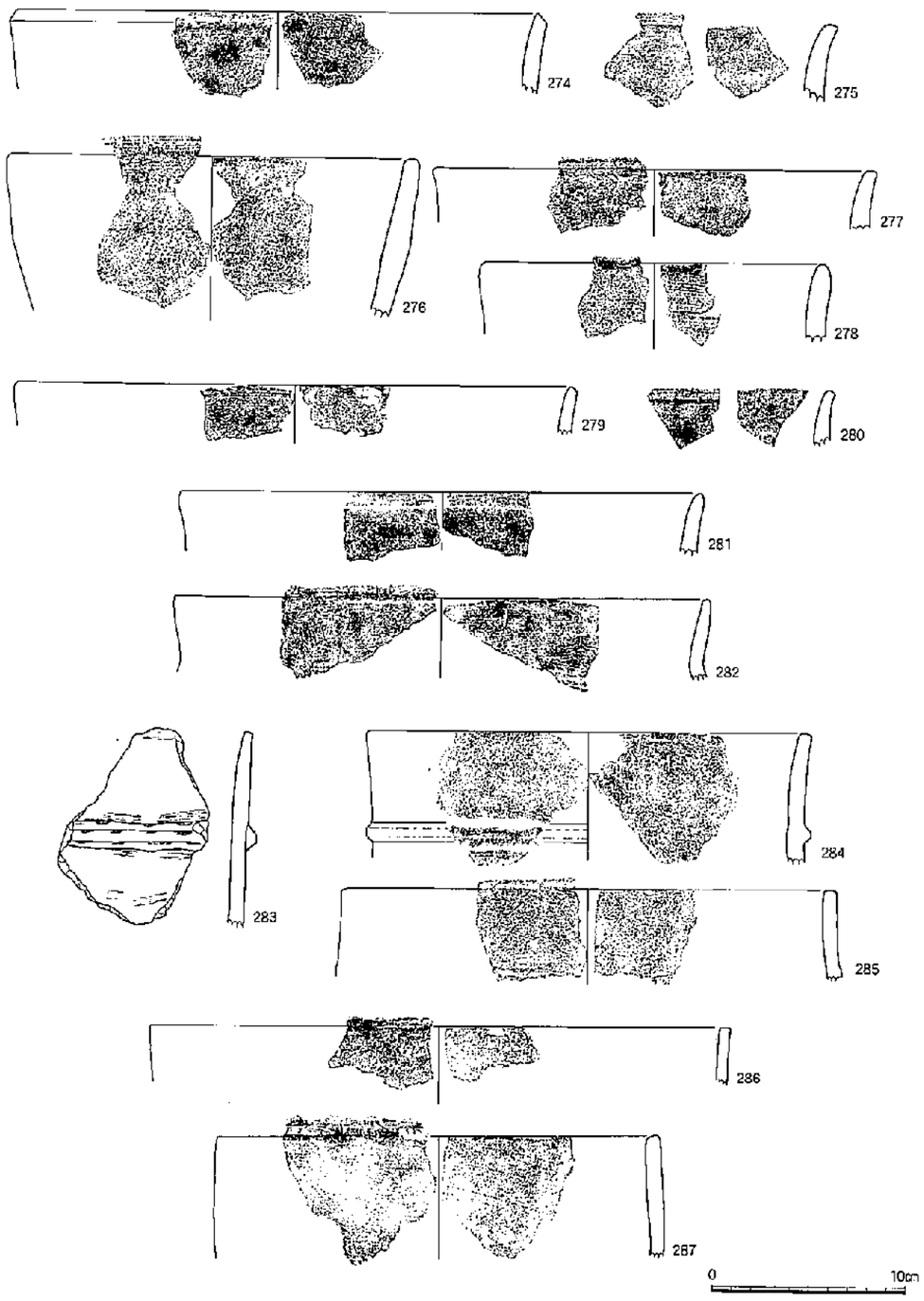
第26図　出土遺物実測図15（土器ⅢＢ－甕口－1a～1c類）



第27図　出土遺物実測図16（土器ⅢB－甕口－1c類）



第28図　出土遺物実測図17（土器ⅢB－甕口－1c類）



第29図　出土遺物実測図18（土器ⅢB－甕口－1c～2c類）

土器ⅢB－甕胴－１a類（第３０図２９４～３０３）

甕形土器のうち，胴部付近が残存しているものを土器ⅢB－甕胴類とした。このうち，外反もしくは外傾して開く口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－１類とした。土器ⅢB－甕胴－１a類は，刻目が施されている突帯を有するものである。

２９４は，断面三角形の突帯に棒状の工具によると思われる刻目を施すが，刻目内に繊維圧痕が観察できる。２９５～２９８は，断面が三角形または台形の突帯に，やや太い刻目が施されている。２９９～３０１は，断面台形の突帯に，工具によると思われるやや細かい円形の刻目が施されている。３０２，３０３は，断面三角形または台形の突帯に，さらに細い刻目を施す。

土器ⅢB－甕胴－１b類（第３０図３０４）

刻目が施されていない突帯を有するものを，土器ⅢB－甕胴－１b類とした。３０４は，断面三角形の突帯が二条残と，その上位にそれらより細い突帯が一条存しているものである。

土器ⅢB－甕胴－２a類（第３０図３０５～第３１図３２８）

土器ⅢB－甕胴類のうち，ほぼ直立する口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－２類とした。このうち，刻目が施されている突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－２a類とした。

３０５～３０９は，断面三角形ないし台形の，刻目が施されている突帯を有する。刻目内には繊維圧痕が観察できる。３１０～３２３は，断面三角形または台形の突帯に，指によると思われるやや幅の広い刻目が施されている。３２４～３２８は，断面三角形または台形の突帯に，工具によると思われる細い刻目が施されている。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。

土器ⅢB－甕胴－２b類（第３１図３２９～３３２）

土器ⅢB－甕胴－２類のうち，刻目が施されていない突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－２b類とした。

３３０は，断面がゆるい三角形の突帯が二条残存している。３２９・３３２は断面三角形の突帯を，３３１は断面台形の突帯をそれぞれ一条有する。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。

土器ⅢB－甕胴－３a類（第３１図３３３～第３１図３６８）

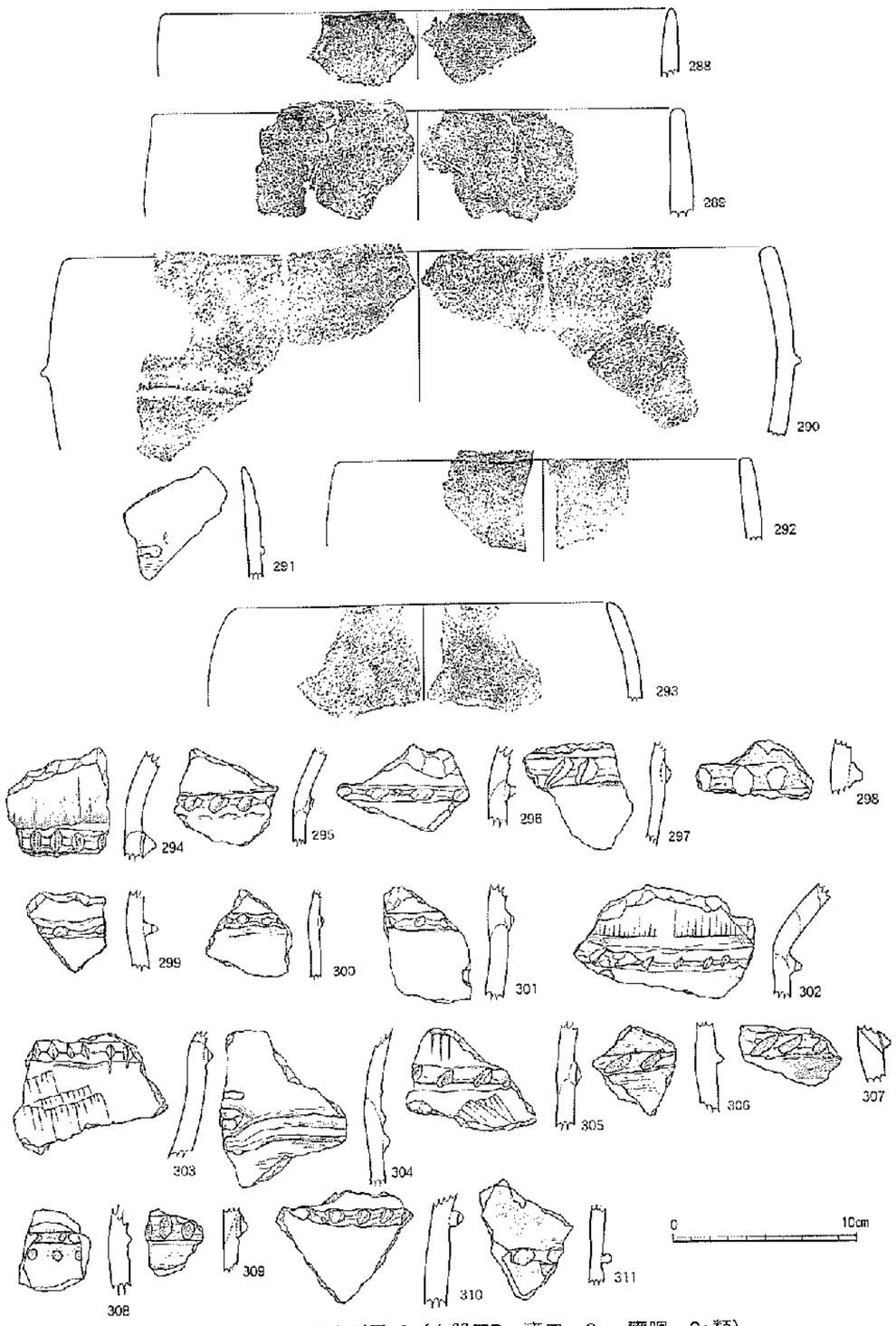
土器ⅢB－甕胴類のうち，内湾する口縁部に続くと思われるものを，土器ⅢB－甕胴－３類とした。このうち，刻目が施されている突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－３a類とした。

３３４～３４６は，断面が三角形ないし台形の突帯を有するもので，突帯には棒状の工具によると思われる刻目が施されている。刻目内には繊維圧痕が観察できる。３４７～３５４は，断面が三角形または台形の突帯に，指によると思われるやや太い刻目が施されている。３５５は，断面ゆるい三角形の突帯を，指により整形した絡状突帯であるが，突帯には，やはり指によると思われるやや太い刻目が施されている。３５６～３６８は，断面が三角形または台形の突帯に，棒状の工具によると思われる細い刻目が施されている。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。

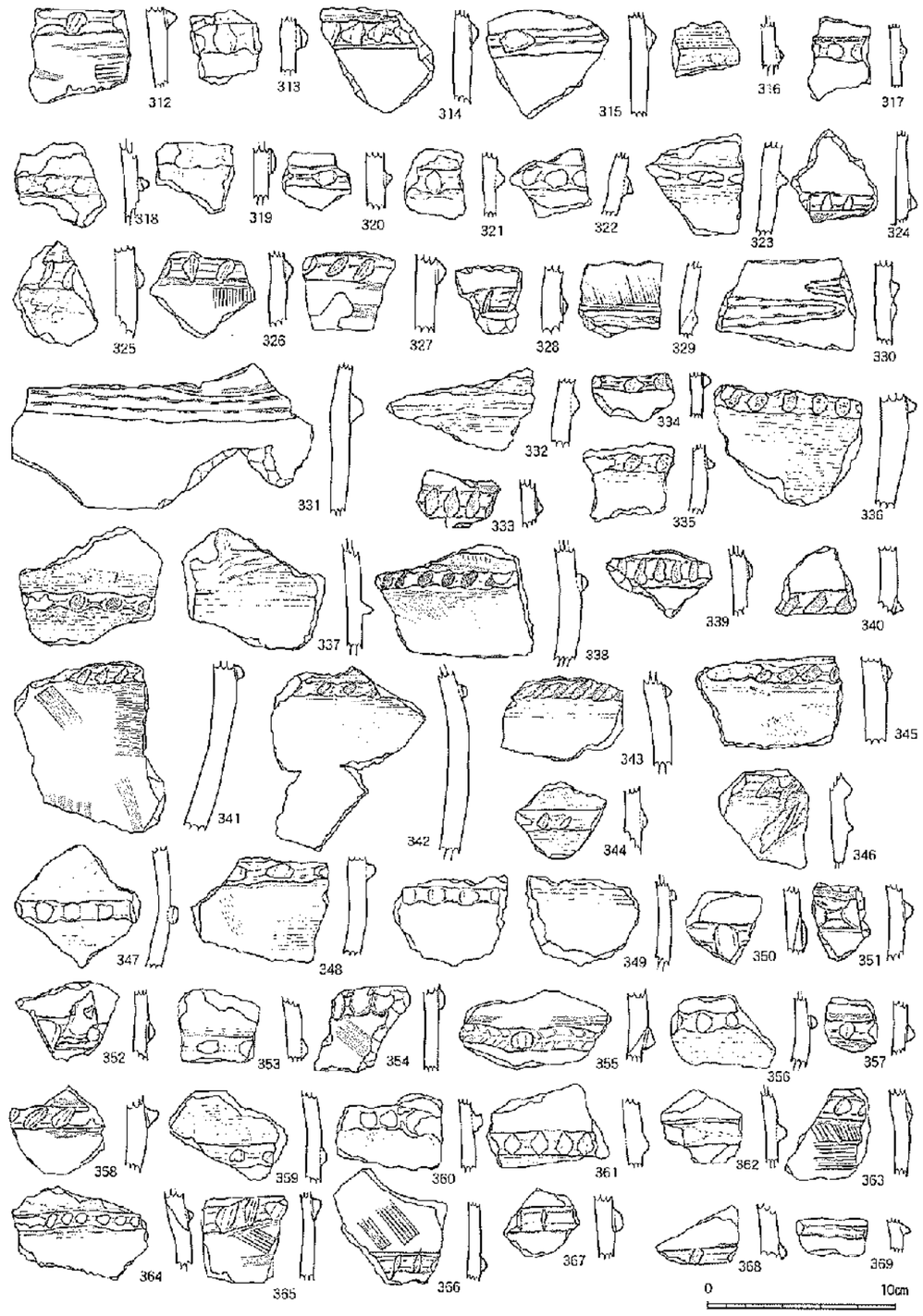
土器ⅢB－甕胴－３b類（第３１図３６９～第３２図３９９）

土器ⅢB－甕胴－３類のうち，刻目を施さない突帯を有するものを土器ⅢB－甕胴－３b類とした。

３６９～３７９は，断面が三角形または台形の突帯を有するが，この突帯は指による整形がなさ



第30図　出土遺物実測図19（土器ⅢB－甕口－2c～甕胴－2a類）



第31図　出土遺物実測図20（土器ⅢB－甕胴－2a～甕胴－3b類）

れた絡状突帯である。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。３８０～３９９は，断面が三角形または台形の突帯を有する。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。

土器ⅢＢ－甕脚類（第３２図４００～４０７）

甕形土器の，脚台付近が残存しているものを土器ⅢＢ－甕脚類とした。４００は，脚が先端へ向けて直線的に開き，内面天井部が若干突起する脚台である。４０１～４０６は，脚台の先端が残存しているものである。いずれも，先端へ向けて直線的に開くもの，あるいは直線的に開き，先端が僅かに外反するものである。器面調整は，ハケメ・ナデが観察できるものが多い。

土器ⅢＢ－壷口類（第３２図４０８，４０９）

壺形土器のうち，口縁部部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壷口類とした。

４０８・４０９ともに外反する口縁部である。器面調整としては，外面にナデが観察できる。

土器ⅢＢ－壷胴類（第３２図４１０～４１３）

壺形土器のうち，胴部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壷胴類とした。

４１０は，肩部である。頸部外面に横方向のナデが観察できる。４１１～４１３は胴部片である。刻目が施された断面台形または三角形の突帯を一条有する。４１１は，刻目内に繊維圧痕が観察できる。４１２はやや幅が広い刻目が施されている。４１３は突帯，刻目ともに細かいものである。器面調整は，ナデが観察できるものが多い。

土器ⅢＢ－壷底類（第３２図４１４）

壺形土器のうち，底部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－壺底類とした。

４１４はわずかに丸みを帯びた凸レンズ状を呈する底である。器面調整は，表面の磨耗が激しく判然としない。

土器ⅢＢ－小壷口類（第３２図４１５）

成川式土器のうち，小形の壺形土器と思われるものを土器ⅢＢ－小壺類とした。そのうち，口縁部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－小壷口類とした。

４１５は，直立して立ち上がり，先端がわずかに外反する口縁部である。器面調整は，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢＢ－小壷頸類（第３３図４１６～４１８）

土器ⅢＢ－小壺類のうち，頸部付近が残存しているものを土器ⅢＢ－小壷頸類とした。

４１６・４１７は頸部の一部と，肩部の一部が残存しているのみで，詳細については不明である。調整についても，器表面の磨耗が激しく，判然としない。４１８は，ほぼ直立する頸部である。調整は，器外面にナデが観察できる。

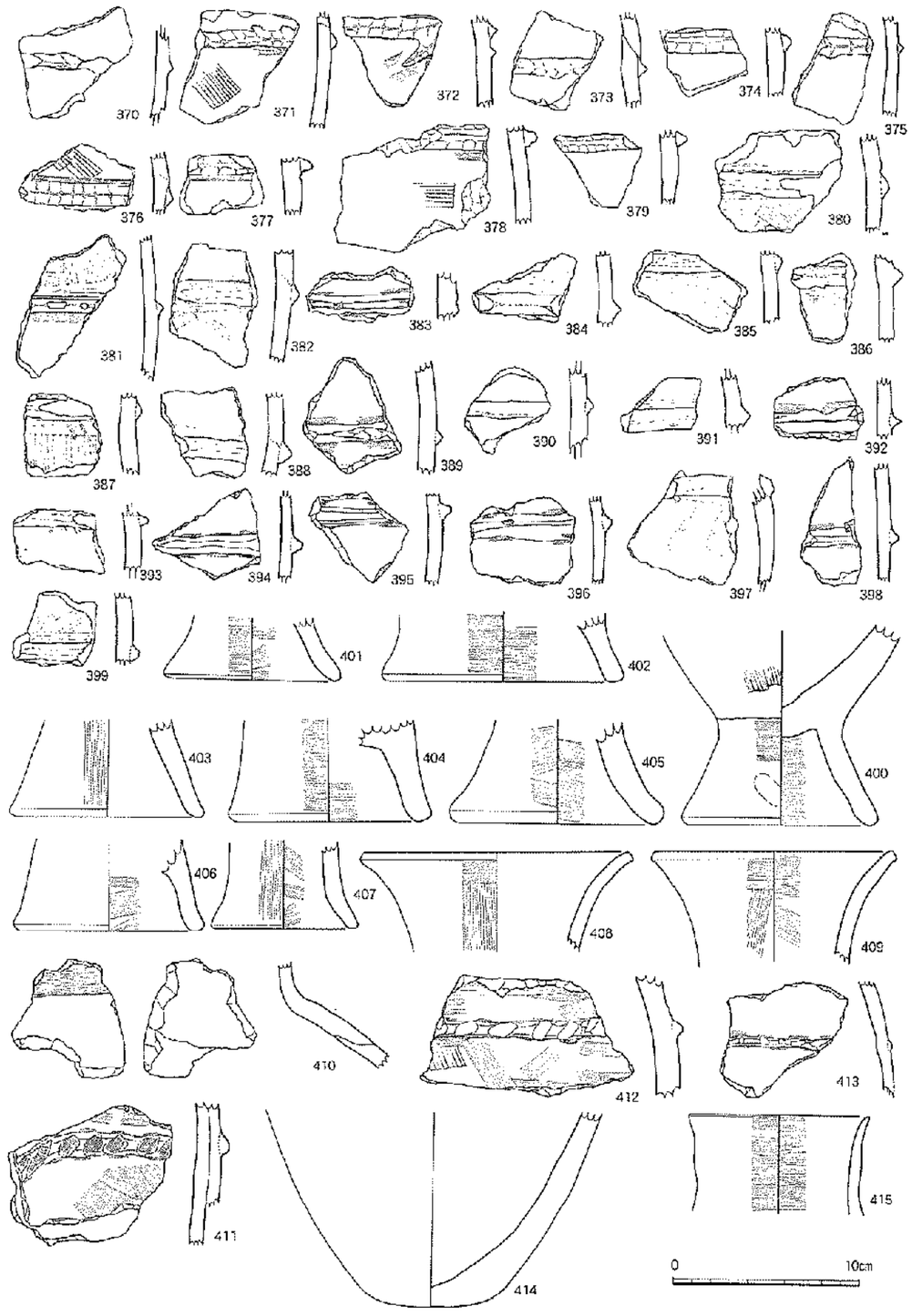
土器ⅢＢ－鉢類（第３３図４１９）

成川式土器のうち，鉢形土器と思われるものを土器ⅢＢ－鉢類とした。

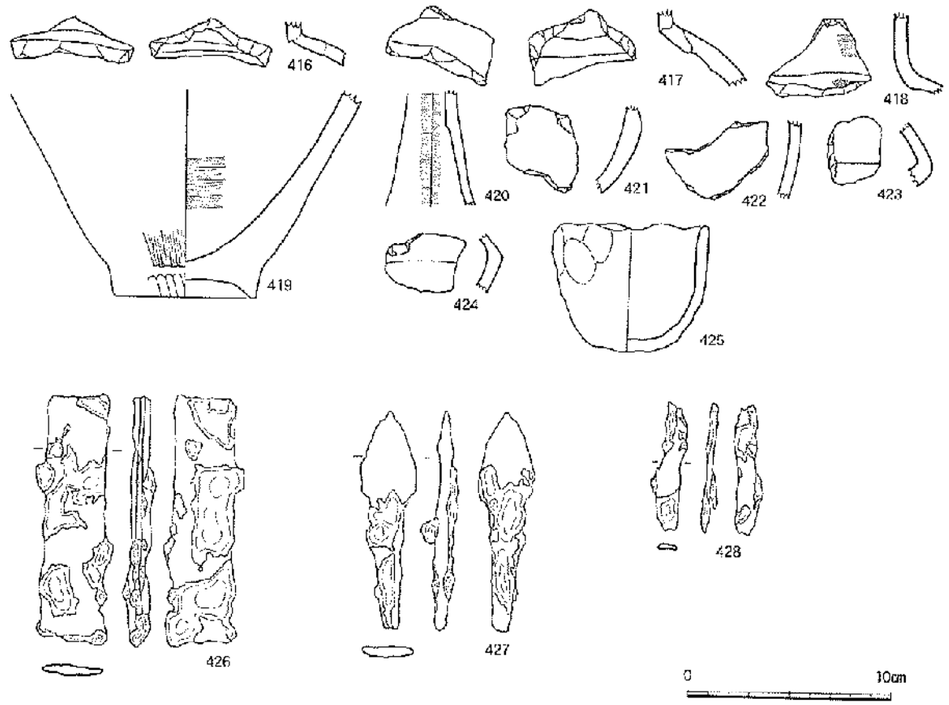
４１９は底部である。低い脚台を有する。脚台内部の天井部は，広い平坦部を有し，先端へ向かって放物線状に下りる。脚台外面は指により整形されている。調整は，器外面にハケメが，内面にはナデが観察できる。

ⅢＢ－高杯類（第３３図４２０）

成川式土器のうち，高杯形土器を土器ⅢＢ－高杯類とした。



第32図　出土遺物実測図21（土器ⅢB－甕胴－3b～小壷口類）



第33図　出土遺物実測図22（土器ⅢB－小壷胴類～ミニチュア，鉄器）

４２０は脚部である。中空で，器面調整として，内外面ともにナデが観察できる。

土器ⅢＢ－坩類（第３３図４２１～４２４）

成川式土器のうち，坩形土器を土器ⅢＢ－坩類とした。

４２１～４２４は，いずれも胴部片である。４２１・４２２は胴部の下位と思われるが，残存部が少なく詳細については不明である。調整についても，器表面の磨耗が激しく，判然としないが，わずかに研磨痕が確認できる。朱色を呈し，いわゆる丹塗りの土器である。４２３・４２４はソロバン状に張り出す胴部と思われる。最大径部で大きく「くの字状」に屈曲し，屈曲部には明確な稜線を有する。調整については，器表面の磨耗が激しく，判然としない。

土器ⅢＢ－ミニチュア類（第３３図４２５）

成川式土器のうち，いわゆるミニチュア土器を土器ⅢＢ－ミニチュア類とした。

４２５は，小形のカップ状を呈する土器で，器外面が指により整形された，いわゆる手捏である。

３　鉄器（第３３図４２６～４２８）

鉄器はわずかに３点出土したのみである。４２６は鉄剣である。４２７は鉄鏃で，４２８は鉄鏃の軸部である。表面の酸化が著しく，詳細については不明である。

〔第Ⅴ章　引用・参考文献〕

中　村　直　子　１９８７　「成川式土器再考」　『鹿大考古』６：５７－５６

第9表　横道遺跡出土遺物観察表6

混胎土のS・C・Kはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

掲載番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	調整・調整 外	調整・調整 内	焼成	備考
24	231	4			浅鉢		S・C・K	黒茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	表面に細線痕
25	232	4			浅鉢		S・C・K	黒茶褐色	ミガキ	ミガキ	良	
25	233	4	C－1	Ⅲa		底部～底部	S・C・K	淡黄茶褐色	剥離痕		良	
25	234	4	C－1	Ⅲa		底部	S・C・K	淡黄茶褐色	剥離痕		良	
26	235	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	煤付着物，ハケメ		良	
26	236	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部～頸部	S・C・K	淡茶褐色	煤付，ナデ	ナデ	良	
26	237	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K		ナデ	ヘラケズリ	良	
26	238	4	D－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ，カキアゲ	ナデ	良	
26	239	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
26	240	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	明茶褐	ナデ	ナデ	良	
26	241	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
26	242	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部			ナデ	ナデ		
26	243	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	ミガキ	ナデ	良	
26	244	4	D－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	245	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
27	246	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	247	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
27	248	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
27	249	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	250	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	赤茶褐	ミガキ	ナデ	良	
27	251	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	252	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ，カキアゲ		良	
27	253	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K		ナデ	ナデ	良	
27	254	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	255	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	256	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	257	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	258	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
27	259	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
27	260	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
28	261	4	E－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
28	262	4	F－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙	ナデ	ナデ	良	
28	263	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	264	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
28	265	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	266	4	D－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	267	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	268	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	赤い橙	ナデ	ナデ	良	
28	269	4	E－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	270	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	271	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	
28	272	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙	ナデ	ナデ	良	
28	273	4	E－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	274	4	D－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	275	4	C－2	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
29	276	4	C－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	277	4		Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	278	4	D－7	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	279	4	C－1	Ⅲa	甕	底部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
29	280	4	C－2	Ⅲa	甕	底部	S・C・K	淡橙褐色	ナデ	ナデ	良	

第10表　横道遺跡出土遺物観察表7

※胎土のS・C・K・Uはそれぞれ S＝石英、C＝長石、K＝角閃石、U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	調整 外	調整 内	焼成	備考
29	281	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	282	4	E－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	灰黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	283	4		IIIa	甕	口縁部	S・C・K	褐色	突帯、ナデ	ナデ	良	
29	284	4	D－2	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	暗黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	285	4	E－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	黒茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	286	4	C－2	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
29	287	4	D－2	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
30	288	4	E－2	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
30	289	4	C－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
30	290	4	C－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	暗赤茶褐色	ナデ、交番	ナデ	良	
30	291	4	C－2	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	黄褐色	ナデ、交番	ナデ	良	
30	292	4	C－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	暗茶褐色	ナデ	ナデ	良	
30	293	4	E－1	IIIa	甕	口縁部	S・C・K	茶褐色	ナデ	ナデ	良	
30	294	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
30	295	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯、ナデ	ナデ	良	
30	296	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯	ナデ	良	
30	297	4	D－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯		良	
30	298	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯、ナデ	ナデ	良	
30	299	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯	ナデ	良	
30	300	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗白茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
30	301	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯		良	
30	302	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
30	303	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
30	304	4		IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	突帯、ナデ		良	
30	305	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
30	306	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	褐色	刻目突帯、ナデ		良	刻目に細線状
30	307	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯、ナデ	ナデ	良	刻目に細線状
30	308	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	刻目に細線状
30	309	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	刻目に細線状
30	310	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯		良	
30	311	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	灰黄褐	刻目突帯	ナデ	良	
31	312	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	313	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
31	314	4	D－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯、ナデ	ハケメ	良	
31	315	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯		良	
31	316	4	D－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
31	317	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	318	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	319	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黄茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	320	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K・U	黒茶褐色	刻目突帯	ナデ	良	
31	321	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡黄褐色	刻目突帯、ナデ	ハケメ	良	
31	322	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	323	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	324	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	325	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	326	4	D－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	327	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	328	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黄茶褐色	刻目突帯		良	
31	329	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	330	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黄茶褐色	突帯		良	

第11表　横道遺跡出土遺物観察表8

※胎土のS・C・K・Uはそれぞれ S＝石英、C＝長石、K＝角閃石、U＝雲母を指す。

挿図番号	遺物番号	出土地点	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	調整 外	調整 内	焼成	備考
31	331	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯、ハケメ		良	
31	332	4		IIIa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯、ナデ		良	
31	333	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	刻目に細線状
31	334	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	刻目突帯		良	刻目に細線状
31	335	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	刻目に細線状
31	336	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ナデ		良	刻目に細線状
31	337	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	刻目に細線状
31	338	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ、ケズリ	良	刻目に細線状
31	339	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
31	340	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗黄褐色	刻目突帯		良	刻目に細線状
31	341	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
31	342	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	刻目に細線状
31	343	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ヘラナデ	ケズリ	良	刻目に細線状
31	344	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗橙褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	刻目に細線状
31	345	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
31	346	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	茶褐色	刻目突帯、ハケメ		良	刻目に細線状
31	347	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	刻目突帯		良	
31	348	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
31	349	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯	ハケメ	良	
31	350	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	351	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗黄茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	352	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯		良	
31	353	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	354	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	355	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黄褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	格状突帯
31	356	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K・U	淡赤褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	357	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	358	4	E－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	359	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	刻目突帯、ハケメ	ナデ	良	
31	360	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	361	4	D－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	362	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	363	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	364	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	刻目突帯、ハケメ		良	
31	365	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	刻目突帯、ナデ		良	
31	366	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗黒褐色	刻目突帯、ハケメ	ハケメ	良	
31	367	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	刻目突帯		良	
31	368	4	C－9	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶褐色	刻目突帯		良	
31	369	4	E－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯		良	格状突帯
32	370	4	D－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯		良	格状突帯
32	371	4	D－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯		良	格状突帯
32	372	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒茶色	突帯、ナデ		良	格状突帯
32	373	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯、ハケメ	ハケメ	良	格状突帯
32	374	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡橙褐色	突帯		良	格状突帯
32	375	4	D－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	暗赤茶褐色	突帯、ナデ		良	格状突帯
32	376	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯、ハケメ		良	格状突帯
32	377	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯		良	格状突帯
32	378	4	C－2	IIIa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯、ハケメ	ハケメ	良	格状突帯
32	379	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	淡茶褐色	突帯、ナデ		良	格状突帯
32	380	4	C－1	IIIa	甕	胴部	S・C・K	黒褐色	突帯、ハケメ	ハケメ	良	

第12表　横道遺跡出土遺物観察表9

※欄上のS・C・K・Uはそれぞれ S＝石英，C＝長石，K＝角閃石，U＝雲母を指す。

遺構番号	遺物番号	調査区	出土区	層	器種	部位	胎土	色調	器面調整 外	器面調整 内	状況	備考
32	382	4	C－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
32	383	4	D－7	Ⅲa	壺	底部	S・C・K	暗黄褐色	突帯，ハケメ	ナデ	良	
32	385	4	E－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	褐黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	384	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	褐黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	385	4	D－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	386	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤黄褐色	突帯，ハケメ		良	
32	387	4	F－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黄褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
32	388	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黄褐色	突帯，ハケメ	ハケメ	良	
32	389	4	F－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶色	突帯，ナデ		良	
32	390	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	褐黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	391	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	392	4	E－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄褐色	突帯，ナデ		良	
32	393	4	C－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤褐色	突帯，ナデ		良	
32	394	4	D－8	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤褐色	突帯，ナデ		良	
32	395	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	赤茶褐色	突帯		良	
32	396	4	F－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄赤褐色	突帯，ナデ		良	
32	397	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤褐色	突帯，ハケメ		良	
32	398	4	E－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶色	突帯，ナデ		良	
32	399	4	F－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	突帯，ハケメ		良	
32	400	4	D－7	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗赤褐色	ナデ，指による押圧	ナデ	良	
32	401	4	C－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	ナデ	ナデ	良	
32	402	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄赤褐色	ナデ	ナデ	良	
32	403	4	E－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄赤褐色	ナデ		良	
32	404	4	E－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡赤茶褐色	ナデ	ナデ	良	
32	405	4	E－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	暗黄赤褐色	ナデ	ナデ	良	
32	406	4	E－7	Ⅲ	甕	胴部	S・C・K	橙褐色	ハケメ	ナデ	良	
32	407	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
32	408	4	F－1	Ⅲa	甕	口縁部	S・C・K	淡白茶色	ナデ	ナデ	良	
32	409	4	F－2	Ⅲa	壺	口縁部	S・C・K	淡白茶色	ナデ	ナデ	良	
32	410	4	F－2	Ⅲa	壺	胴部	S・C・K	黄茶褐色	ナデ		良	
32	411	4	C－2	Ⅲa	壺	胴部	S・C・K	暗茶黄色	刻目突帯，ナデ		良	刻目は粘土紐
32	412	4	C－2	Ⅲa	壺	胴部	S・C・K	灰黄茶褐色	刻目突帯，ナデ		良	
32	413	4	D－2	Ⅲa	壺	胴部	S・C・K	淡黄茶褐色	刻目突帯，ナデ		良	
32	414	4	D－2	Ⅲa	壺	底部	S・C・K	黄茶褐色			良	
32	415	4	F－2	Ⅲa	小壺	底	S・C・K	淡白茶色	ナデ	ナデ	良	
33	416	4	F－2	Ⅲa	小壺	頸部	S・C・K	淡茶褐色			良	
33	417	4	F－1	Ⅲa	小壺	頸部	S・C・K	淡茶褐色			良	
33	418	4	F－2	Ⅲa	小壺	頸部	S・C・K	暗黄茶褐色	ナデ		良	
33	419	4	D－7	Ⅲa	鉢	底部	S・C・K	褐茶褐色	ナデ，指による押圧	ナデ	良	
33	420	4	C－2	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	黄茶褐色	ナデ	ナデ	良	
33	421	4	C－1	Ⅲa	甕	胴部	S・C・K	灰色			良	
33	422	4	D－1	Ⅲa	壺	口縁部	S・C・K	灰色			良	
33	423	4	E－1	Ⅲa	壺		S・C・K	淡黄白茶色			良	
33	424	4	F－1	Ⅲa	壺	口縁部	S・C・K	淡黄白茶色			良	
33	425	4	C－1	Ⅲa	壺	口縁部	S・C・K	暗黄褐色	指による押圧		良	

第13表　横道遺跡出土鉄器観察表

遺構番号	遺物番号	出土建物	出土区	層	器種	部位	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
33	426	4	D－2	表層	鉄鏃		12.2	3.1	0.6	70	
33	426	4	E－1	Ⅲa	鉄鏃		10.8	2.6	0.5	45	
35	426	4	C－1	Ⅲa	鉄鏃	柳部	6.2	1.3	0.25	17	

第Ⅵ章　ま　と　め

横道遺跡における２年間に及ぶ発掘調査は，約７，000 ㎡の調査範囲と約 10，000 点の出土遺物という成果を残し終了した。ただ広範囲にわたる調査であったものの，遺物の伴う遺構はほとんど確認できなかった．以下，各項目についてまとめてみたい。

1　遺　構

第３地点において土坑及び溝状遺構が確認された。土坑はすべて円形プランをもつ擂り鉢状であり，ほぼ等間隔に並ぶことから同時期のものと考えられる。埋土はⅡ層の黒褐色土であるが，遺物は出土しなかった。溝状遺構は谷状地形を呈する第Ⅲ地点の中央最深部を縦断するもので，土坑はこれに沿って点在する。埋土は土坑と同様で，遺物の出土はみられなかった。溝の堀り込みは一部不規則な部分もあり，あるいは自然の流水路の可能性も考えられる。いずれの遺構も遺物を伴わず時期や用途については不明確であるが，Ⅱ層中より僅かに出土している擂鉢状の小片から，近世以降の年代が想定される。

2　遺　物

縄文時代

縄文時代の土出遺物は晩期の土器に限られ，第４地点の一部にのみ確認された。底部にアンギンの組織痕をもつ浅鉢，前面にのみリボン状・鱗状突起をもつ波状口縁の鉢形土器である。比較的集中して出土し，周辺からは同一層（Ⅲ層）より弥生～古墳時代の遺物がみられ，また遺構等も確認されないことなどから，別の谷部からの流入したものと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代

本遺跡出土遺物の主体をなすものは，いわゆる「成川式」と呼称される土器群であり，谷状地形をなす第２・３・４各地点の斜面全体より出土している。第２・３地点からはほぼ完形の甕・壺，第４地点からは鉄鏃・鉄剣が出土している。成川式土器はこれまで多くの研究者による編年が試みられており，近年では中村直子氏の研究成果が注目される。本遺跡における土器群は中村氏の編年に従えば中津野式・東原式・辻堂原式・笹貫式に相当し，弥生時代後期末～古墳時代（3～6 世紀頃）の時代幅が考えられる。本遺跡においてこれらは同一層内より混在して出土するため層位的な考察は不可能であるが，完形品が点在すること（第２・３地点），免田式長頸壺の存在（第３地点），鉄器の出土（第４地点）など各地点ごとの特徴的な要素は伺える。

3　総　括

本遺跡においては，遺物の確認された第２～４地点すべてが比較的急傾斜の谷状地形であることは既に述べた。このことをふまえ，明確な遺構が存在しないこと，遺物が大きな年代幅をもって同一層に混在することなどから，本遺跡の遺物は丘陵上方より谷部に流入したものと思われる。ただ偶々の遺物には注目すべきものが多いことも事実であり，これらから横道遺跡周辺の考古学的様相が概観できたことは一応の成果といえよう。

（参考文献）

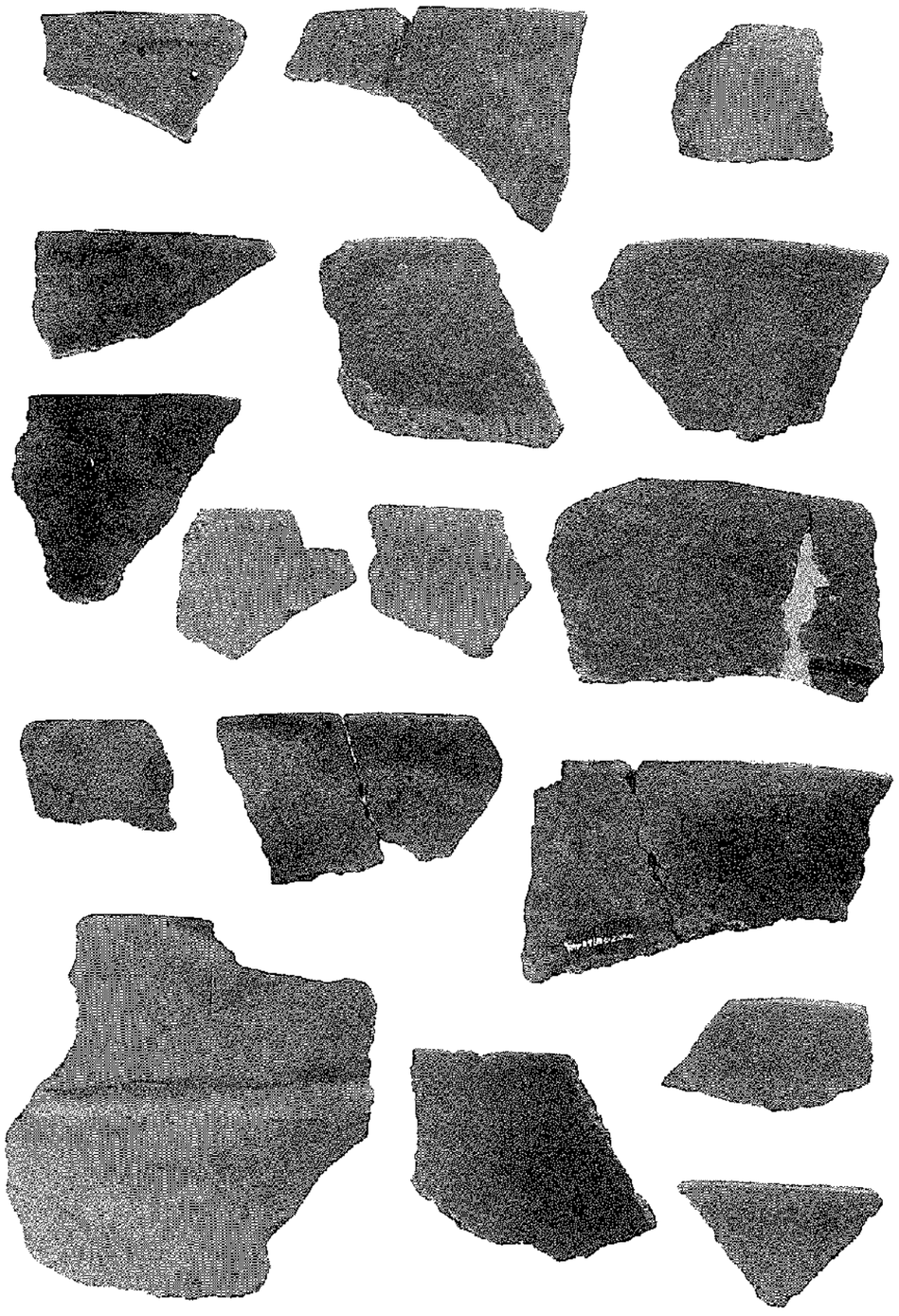
中村直子　1987　「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号　鹿児島大学法文学部考古学研究室

図　　版

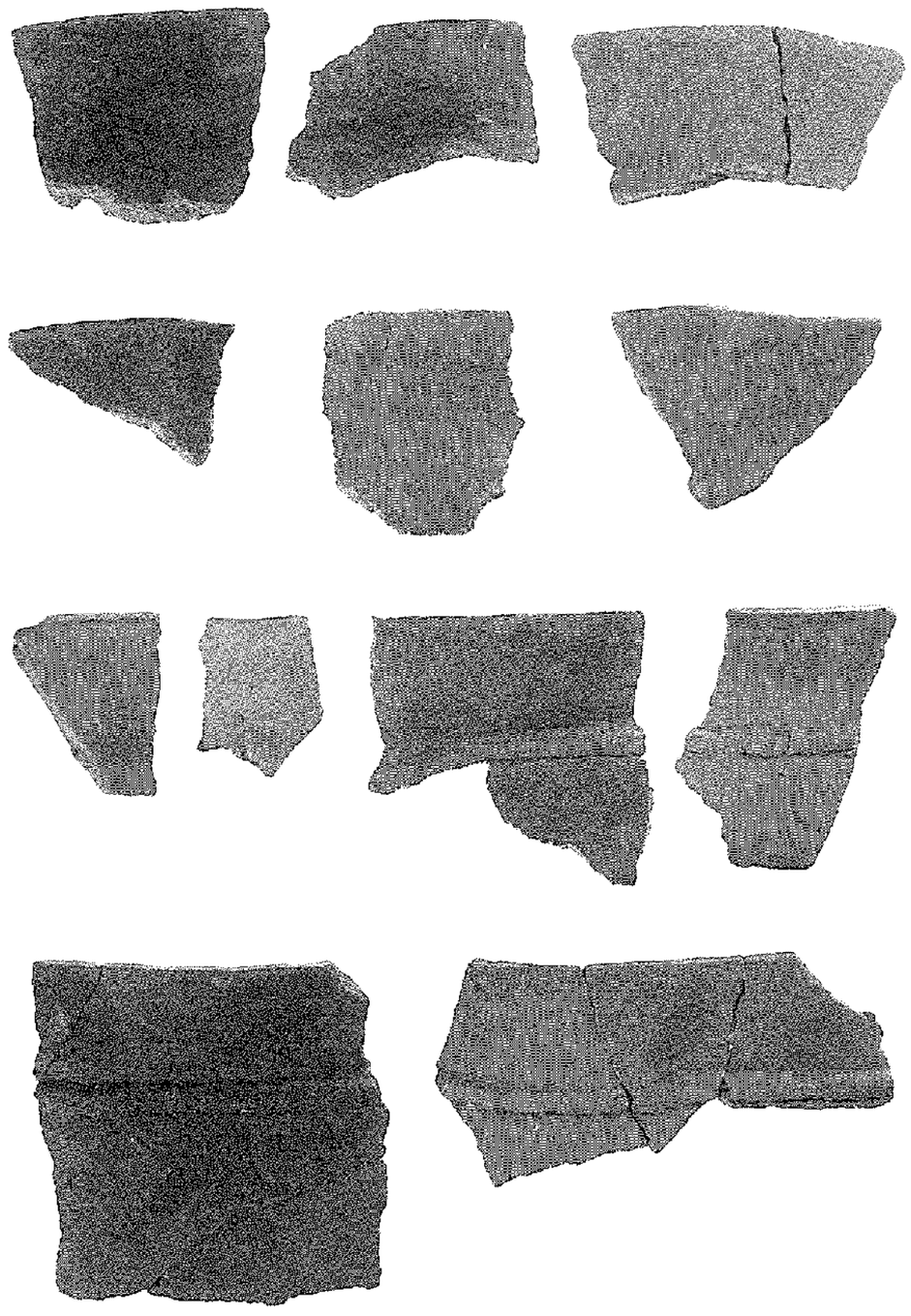
縄文時代晩期の土器

免田式土器

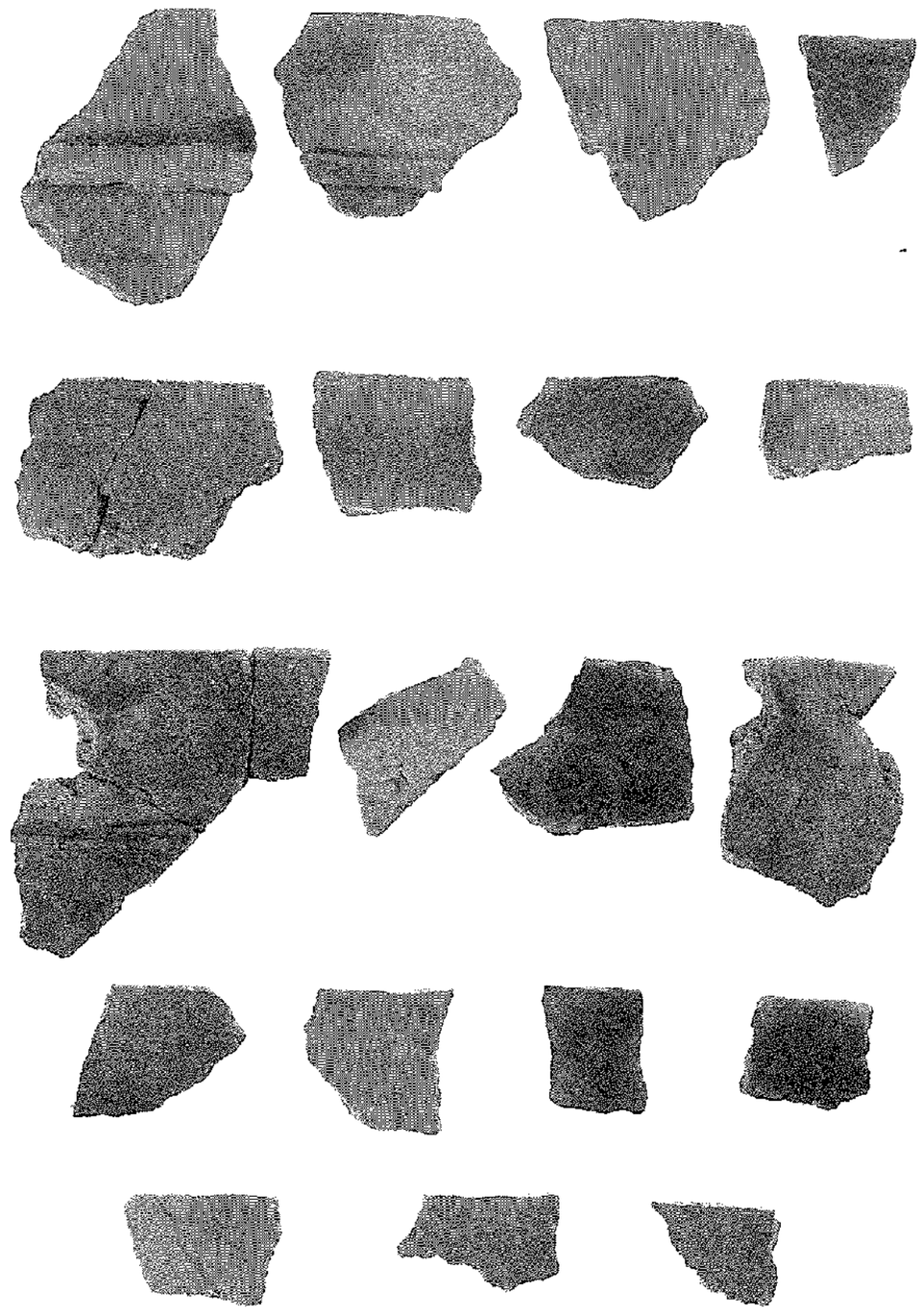
弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器）



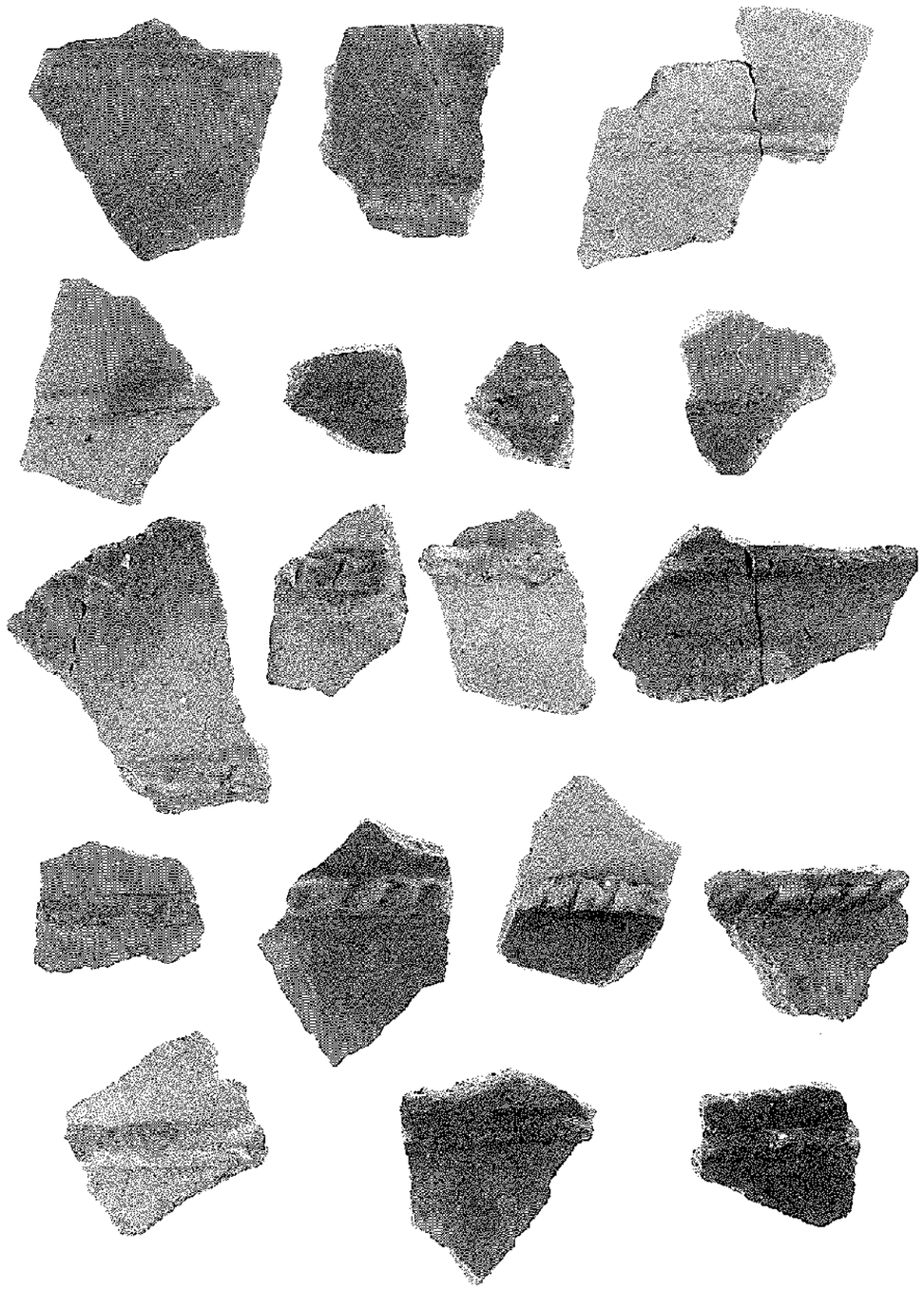
弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）



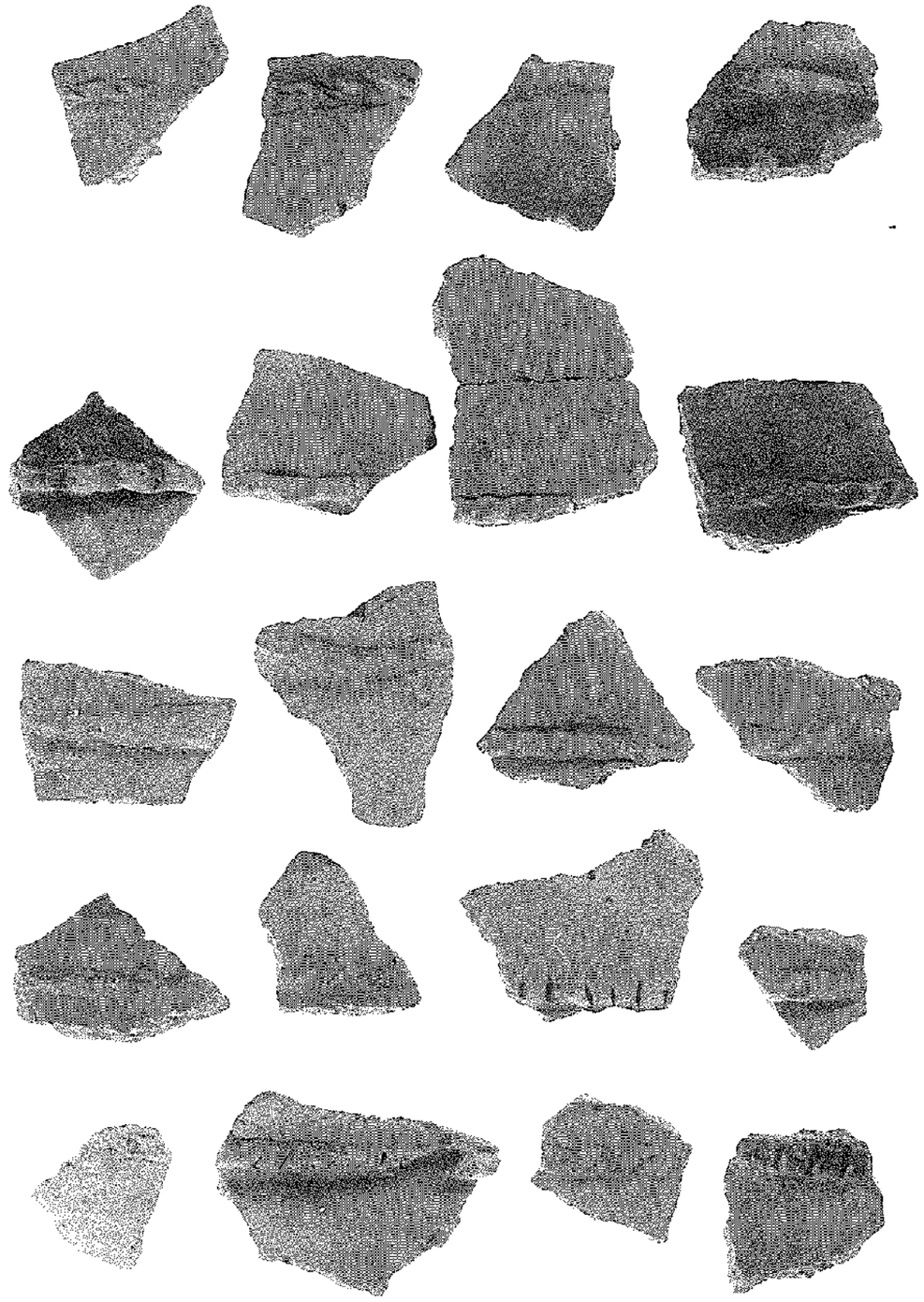
弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）



弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片）



弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の口縁部片・胴部片）



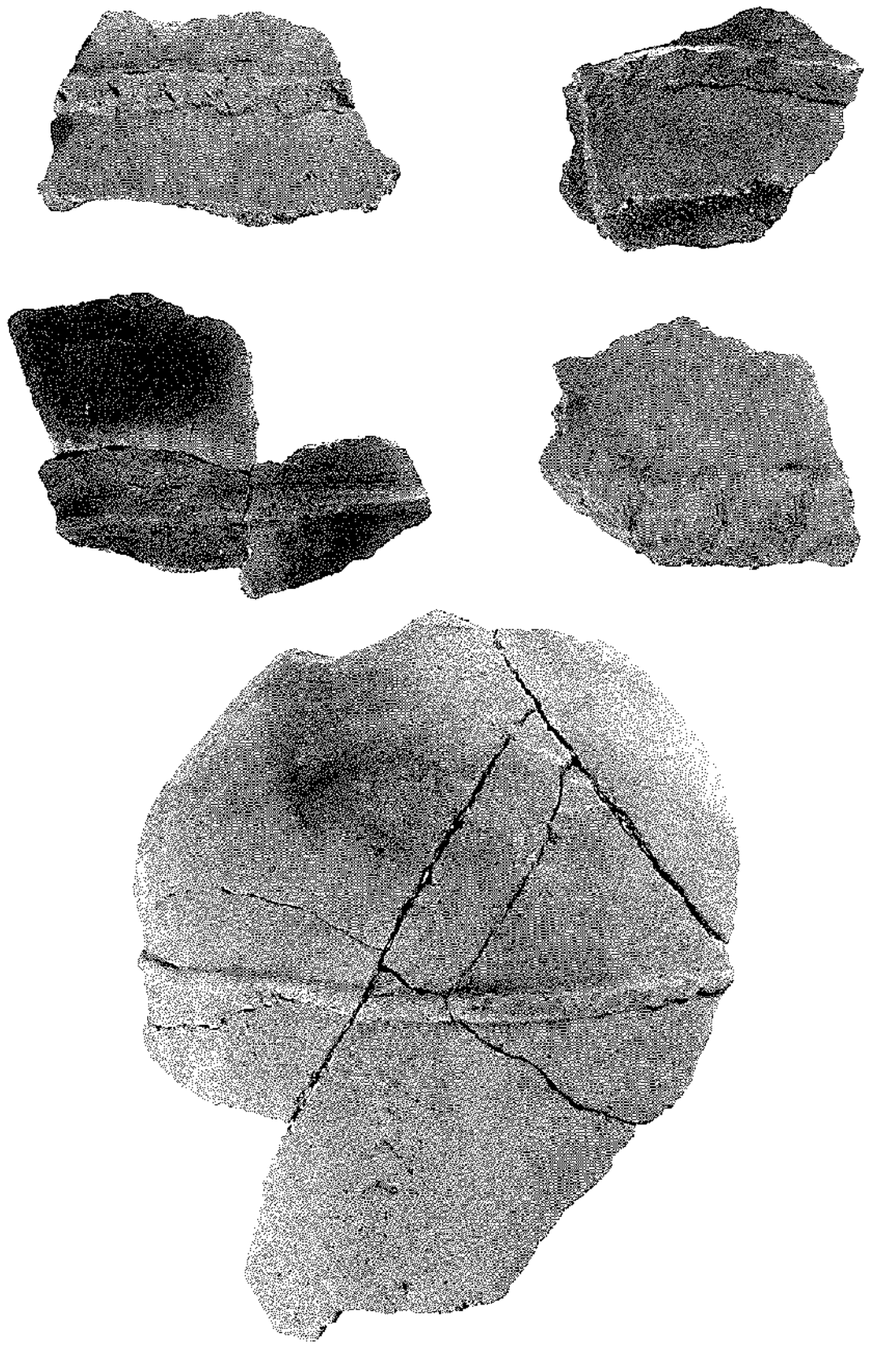
弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器の胴部片）

図版 8

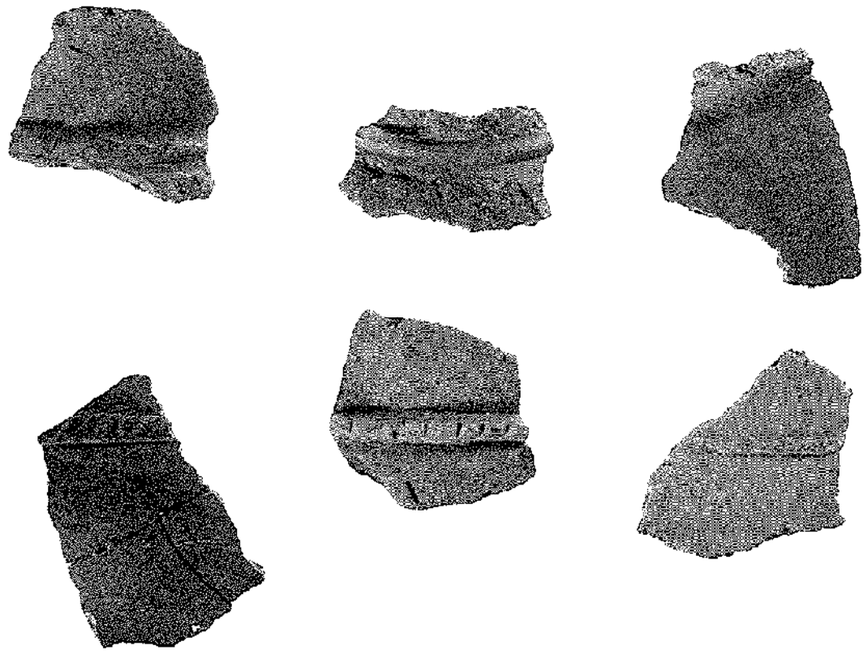
弥生時代後期～古墳時代の土器（甕形土器・鉢形土器・壷形土器の底部片）

図版 9

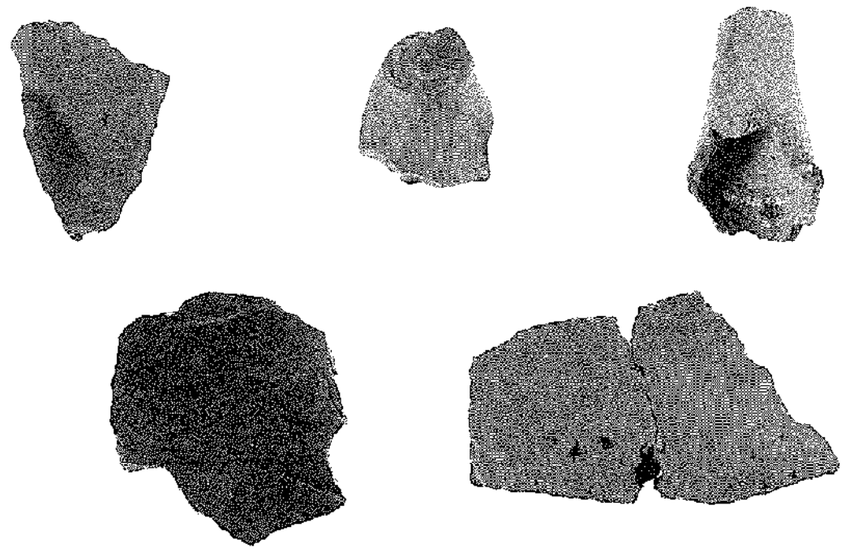
弥生時代後期～古墳時代の土器（壷形土器）



弥生時代後期～古墳時代の土器（壷形土器の胴部片）



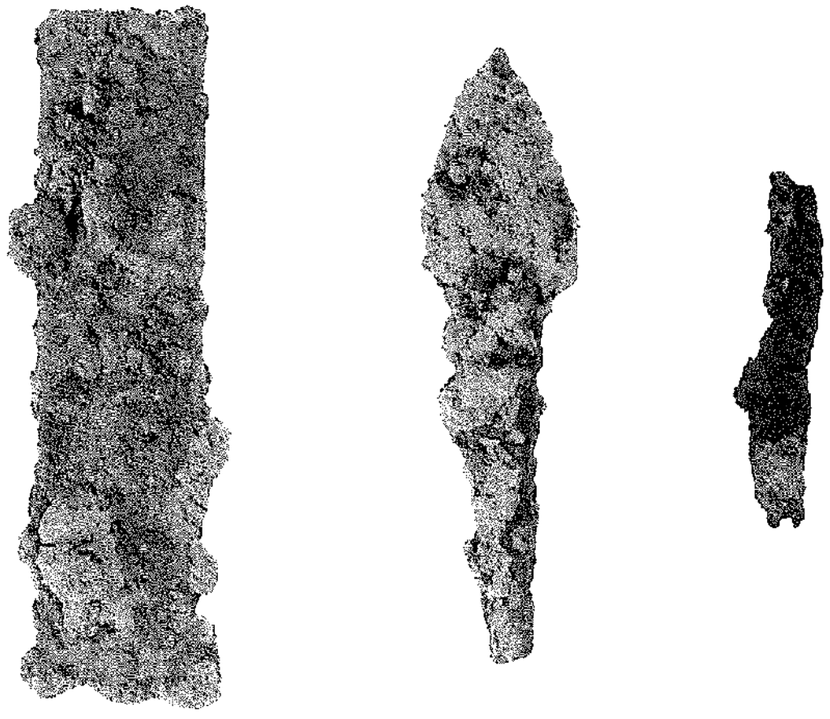
弥生時代後期～古墳時代の土器（壷形土器の頸部片）



弥生時代後期～古墳時代の土器（高杯片・坩土器片）

図版12

弥生時代後期～古墳時代の土器（ミニチュア土器）



鉄器（鉄剣・鉄鏃）

あとがき

本遺跡は，確とした遺構こそ出土されなかったものの，個々の出土遺物は資料性が非常に高く，今後の研究が大いに期待される遺跡である。しかしながら，整理期間の不足や筆者の力量不足から，報告書が十分な内容のものには至らなかったのが遺憾である。

けれども，どうにかこのように報告書としての体裁を保つに至ったのは，ひとえ鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島大学をはじめとする各研究機関・各関係機関，発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位のご教示・ご協力によるものである。特に，鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事弥栄久志氏，同文化財研究員今村敏熙氏には貴重な指導を賜った。これらの皆様方に感謝の意を表して，結びの言葉とかえさせていただきます。

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

横道遺跡

発　行　1997年3月
編　集　垂水市教育委員会
〒891-21　鹿児島県垂水市旭町61

印　刷　株式会社 トライ社
〒892-08　鹿児島市南林寺町12-6

受 15.6.-3 付